

すまいるん

季刊
2008
春号

(通巻第86号) 二〇〇八年四月一〇日発行 ©

ブルキナファソ、ロビ族のコンパウンド。屋上からしか出し入れできない大きな穀倉を内部に隠し持ち、部屋が複雑に噛み合った迷路状のすまいだ。(風紋より)



特集Ⅱ谷中はコレクティブタウンか

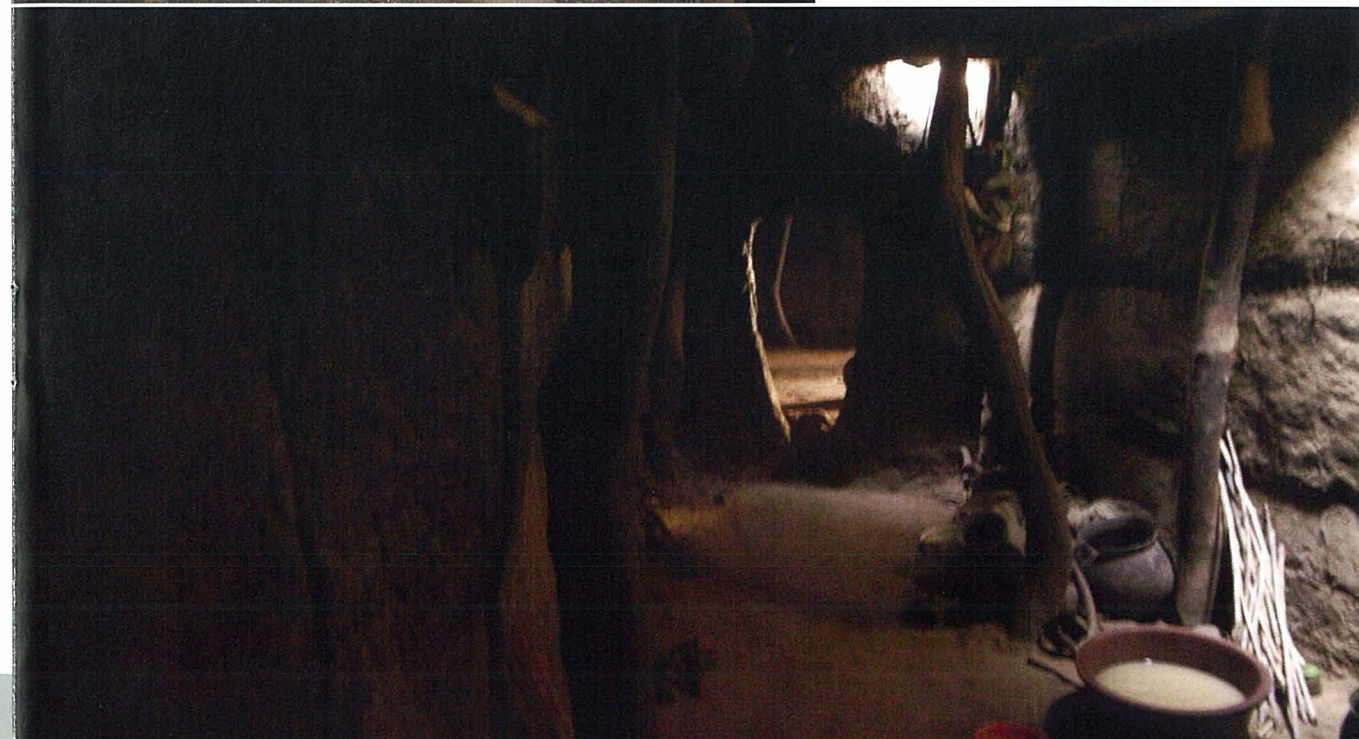
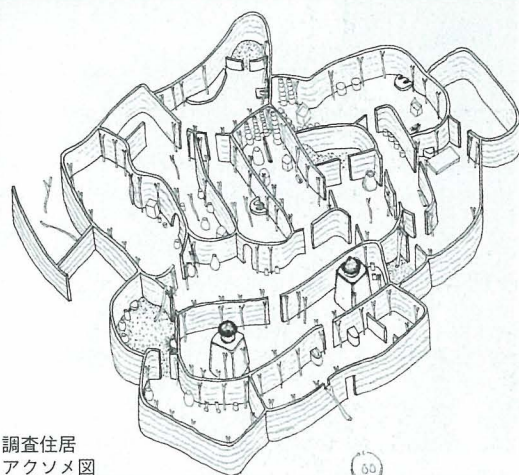
目次

- 〔風紋〕土の要塞型コンパウンド ブルキナファソ 南西部のロビ族 藤井明……2
- 〔焦忠〕日本流コレクティブタウンの復権……4
- コレクティブタウンへの道のり―谷根千のまちの二〇年から 椎原晶子……6
- 谷根千新商店会―谷根千の新しい波……14
- 箕入建志 (千駄木 往來堂書店) 十扇谷京子 (ギヤラリー) 十山崎範子 (工房) 司会Ⅱ手嶋尚人 (東京家政大 准教授)
- まちづくりとコレクティブタウン 福川裕一……34
- まちがあつて、人がいて、宿がある 澤功……38
- 発掘採集・散歩のまち 山口昌彦……44
- 谷中にコーポラティブハウス 清崎裕子……48
- 歴史的住まいでの共同生活―上野桜木 市田邸 中村文美……53
- 〔ひろば〕車椅子の母と介護生活に訪れた満足度二〇〇%のすまい 山口裕……58
- 〔図書室だより〕 蔵書探訪 ギャラリー タイセイル・クルビュジェ・コレクション 林美佐……68
- 〔すまい再発見〕 旧・平柳田中邸の現在 鞍懸章乃……74
- 助成研究の要旨……60 住総研ニューズレター……71 編集後記……76

創立60年

住総研

風紋



土の要塞型コンパウンド

—ブルキナファソ南西部のロビ族

写真と文／藤井 明

右頁写真 $\frac{1}{2}$
3

- 1 / 中庭の機能を補完する屋上。有機的に増殖してきた部屋の形がそのまま現われている。穀倉の入口が見える。
- 2 / 屋内に隠されている大きな穀倉。穀物の出し入れは屋上に昇らないとできない。
- 3 / 天井に開いた光井戸からの明かりで生活する内部。

ロビ族はブルキナファソ、ガーナ、コートジボワールの三国が接する国境地帯に住んでいる。過去に他部族やヨーロッパの植民者に侵略された歴史があり、防御に対する姿勢が極端に強く、住居は要塞化している。通常のコンパウンドは、中庭を中心にして、その周囲を住棟が取り囲むように配されるが、彼らのものは、各棟が完全に密着して集塊状になっている。以前(第23号)にコートジボワールのロビ族を紹介したが、今回はブルキナファソのものである。前者が直線的な壁面で構成され、部屋の形が矩形であったのに対し、今度のものは曲面で構成され、より有機的な造形になっている。

洞穴状の入口を入るとまず家畜のスペースがあり、次いで、巨大な穀倉が二基、屋内に収蔵されている。その奥に共用のスペースがあり、一隅に粉挽き用の石を並べた作業台がある。ここから先は個人の領域で、すだれ状の目隠しが下がった入口をくぐり抜けて部屋の内部に入る。小さい孔が外壁面にあるほかに窓はないが、屋根面の所々に光井戸があり、光や空気を採り込むと共に、立て掛けてある梯子で屋上に昇ることができる。

このコンパウンドは主人とその弟の二家族が住んでいる。それぞれの家族の部屋が複雑に噛み合っていて、一見、迷路状に見えるが、壁面の取り合いや平面の形態をよく観察すると、建設の後先がわかり、次第に増殖していった軌跡が読み取れる。こうした加算的な構成を可能にしているのが構法的な工夫で、屋根面を支えるY字型の支柱とその上に載せられた丸太の梁は、層状に積み上げた土壁とは独立している。こうすることにより、家族の増加などに応じて順次、新たな部屋を付加できるといふコンパウンドの特性が保持されている。

面白いのは穀倉の使い方、屋上に突出している口の部分からしか、穀倉の内部にアプローチできない。屋上に昇らないと、穀物の出し入れができないのであるが、これは意図的な仕掛けで、不便さよりも、他部族からの襲撃に対する備えを重視した結果である。屋上には、壺がいくつも散乱し、火を焚いた跡もある。また、あちこちに穀物などが干してある。ロビ族のコンパウンドでは、失われた中庭の機能を屋上が補完している。

(ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所教授)



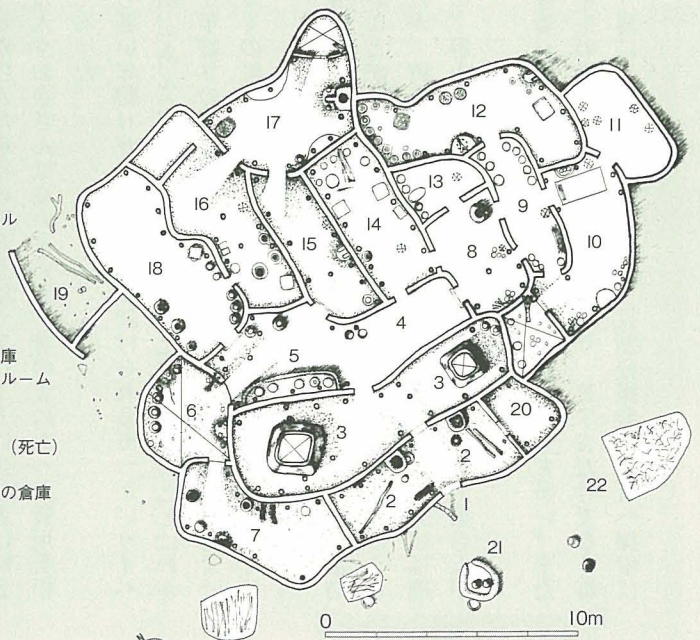
すだれ状の目隠しが下がった部屋の入口。



風にカメラを付けて撮影した調査住居全景。

調査住居平面図

- 1 入口
- 2 家畜
- 3 穀倉
- 4 食事室
- 5 粉挽台
- 6 ミレットビール
- 7 厨房
- 8 主人の倉庫
- 9 ホール
- 10 主人の寝室
- 11 主人の妻
- 12 主人の妻の倉庫
- 13 フェティッシュルーム
- 14 主人の息子
- 15 主人の弟
- 16 主人の弟の妻 (死亡)
- 17 食事室
- 18 主人の弟の妻の倉庫
- 19 牛囲い
- 20 鳥小屋
- 21 フェティッシュ
- 22 バーゴラ



日本流コレクティブタウンの復権

七、八年前になろうか、コレクティブハウス研究者の小谷部育子先生と谷中のまちを歩いた時、「谷中のまちはコレクティブタウンですね」と言われた。その後、「コレクティブタウン」という言葉が妙に入り、使うようになった。「コレクティブタウン」という言葉自体は造語のようであり、まだ明確な定義がされている訳ではないようだ。

私自身コレクティブハウスの暮らし方にはとても興味があったが、その生活に入るには、何か敷居の高さというか不自由さも感じていた。谷中の暮らし方が「コレクティブタウン」であれば、既に実践し、その良さ、楽しさも味わっていることになる。

それでは、谷中のまちな暮らし方というのは、どのようなものか？

●谷中のコレクティブタウン度

私が谷中、根津、千駄木地域と関わったのは、大学院時代に、谷根千工房（地域雑誌『谷根千』編集発行）や地元の商店主たちとまちおこしの一貫として「親しまれる環境調査」というのを行なったのがきっかけだった。この調査の中で、この地域が親しまれる環境となっているキーワードとして「人情」が一番に挙げられた。大学院当時は、「人情」という学生にとって死語のような言葉がピンと来なかったが、今思えば谷中にとっては至極あたり前の言葉であったのだろう。

大学院修了とともに、町の人たちとまちづくりグループ「谷中学校」^{やなか}を設立。以後、谷中を育てる活動をしている。「谷中学校」の活動を通し、町の多

くの人やそれぞれの事情に接した。横浜の新興住宅地で育った私にとっては、多くの発見と驚きがあった。幾つか事例を挙げてみたい。

・町会長が葬儀委員長…冠婚葬祭と町とのつながりが希薄になっている中、葬式を仕切る町会の体制は完璧だ。

・町会費が身の丈制…私が住んだ最初の町会では、アパートに住む者は町会費が安く、地付きの人やお寺さんは高いという、身の丈にあった費用負担でよいという考えであった。

・年寄りの面倒は少し若い年寄りが見る…「住み続けられる町」というイベントを行なった時に、「あんなたちみたいなきい人には年寄りのことはわかりやしないんだよ。年寄りの面倒は少し若い年寄りが見りゃいいんだよ」と言われ、会場の多くの町の人が納得していた。この町にはそういった体制があると驚いた。

・マンションには大家さんが必要…ある賃貸のワンルームマンション建設時、常駐管理人がいないことが問題になった。私は一〇戸程度で常駐は……と思ってしまったのだが、町会とのつなぎ役がないことが、町の人には問題とされた。確かに、谷中では、賃貸マンションのほとんどで大家さんが一緒に住んでいる。

・町が子どもを育て守る…子どもたちに対する町の行事はとて多い。また先日、ある小学三年生の帰りが遅いと招集がかかり、PTAだけでなく町会若手があつという間に七、八〇人集まった。役割分担をし、町へ探索に

散っていった。その迅速かつまとまりの良さには驚かされた。これも普段の人間関係がなせるわざだろう。

・町の中に寄合い所がある…床屋や銭湯は勿論のこと、墓地や公園にも町の人は集い、また、特定の喫茶店や飲み屋に居場所がある。

などなど、谷中の暮らし方が少しは伝わったであろうか。

●コレクティブタウンの必要性

その町の〈コレクティブタウン度〉は、町に暮らす人たち同士のコミュニケーションの距離というか濃度によって決まるのだと思う。

当然、町によってその度合いはまちまちである。中には〈コレクティブタウン度〉なんて全く無くてもよく、その多様性こそが町であるという人もいるかもしれない。しかし、谷中に暮らしてみても強く感じるのは、最低限の〈コレクティブタウン度〉はどの町にも必要だということだ。

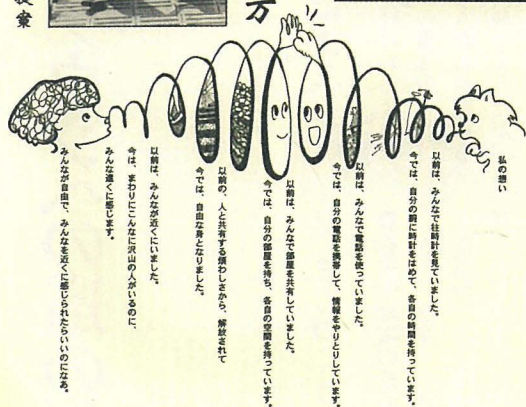
コレクティブタウンとは、述べてきたように本来は特別なものではなく、以前の日本ではごくあたり前の暮らし方であったのだと思う。これが明治以



わたしは
キーワードは
とりつぐ



「谷中コレクティブ・タウン」の提議



2000年、谷中学校でまとめた冊子「キーワード：とりつぎ」

降、国主導のもと、さまざまな制度（警察、消防、学校、医療、福祉等）によって地域の暮らしが守られるようになり、さらに戦後の町会等の解体によって、地域住民自身が自分たちの暮らしを豊かにしようとか、育てよう・守ろうという意識が希薄になった。今や、行政等のサービスに頼るか、民間の制度をお金によって買う社会となり、何か問題・課題があっても、地域の中で解決できるしくみを持っていないまちが多いのが実情だろう。

そうした点で考えると、谷中は近代以前や戦前を引きずっている町である。台東区では戦前の町会組織が戦後も基本的に継承されており、自治の精神が揺るがず町会を中心としたコミュニティが健在である。また、谷中では関東大震災や戦災での被害も少なかったために、戦前から継続して居住している住民も多く、良い面も悪い面も生活文化が継続しているといえる。

●谷中の町で捉えてみる

この特集では、〈コレクティブタウン〉を切り口に、ひとつの暮らしの場である谷中という地域を通して、重要だが徐々に忘れ去られてきているまちの暮らし方について考えてみたい。

まち育て、まちづくりは、防災や交通、福祉等、テーマを持って町に入っていくことが多いが、テーマ別で町をみるだけでは、その町の本質に迫ることは難しいと実感している。〈コレクティブタウン〉を考えるには、そのまちをまさに総体的に捉えることが大切だと考える。

具体的には、ミニシンポジウムによって、〈コレクティブタウン〉にとつて重要な役割を果たす商店を取り上げ、谷中におけるコレクティブタウンの度合いと、その変質を認識した。記事では、主に谷中の生活者や訪問者へ書き手となってもらい、谷中の暮らしぶりを浮き彫りにする。また、谷中で共に活動をしている椎原晶子さんに、谷中のまちづくりの歴史を踏まえた総括をしてもらった。

手嶋尚人／てしま・なおと

東京家政大学家政学部造形表現学科准教授。

一級建築士事務所(南)初音すまい研究所主宰。

谷中学校運営人。NPOひとまちCDC理事。

(略歴は14頁参照)。

コレクティブタウンへの道のり——谷根千のまちの二〇年から

椎原 晶子

1 コレクティブなまち、谷中・根津・千駄木

谷中・根津・千駄木が「谷根千」と呼ばれるようになって二〇年余り、江戸・東京の風情の薫る町として、平日、週末を問わず、多くの町歩きの人たちが訪れる。雑誌やテレビの中では下町歩きの観光地のようにだが、実際には約三万四千人余りの人が暮らす生活の町である。住人には、町に仕事場がある人、長年この地に暮らす人、子育て真っ最中の人など、まちと人生を重ねて暮らしている人たちも多い。そして学校、仕事場、商店街や個々のお店、町内会など、いくつもの交流の場をもち、町の人同士のネットワークを深めている。

二〇〇七年一月には、(財)古都保存財団による「美しい日本の歴史的風土一〇〇選」に、寛永寺・上野公園、谷中の街並み(台東区)や、根津・千駄木(文京区)などが江戸東京の歴史や文化を語る町として選ばれた。その真価は、よい景観や名所となる町並み・建物だけでなく、これを引き継いできた暮らし方や人と人とのつながりがあったこそ発揮される。人が住み合い、つながりを重ねながら、地域の生活文化や生業を引き継ぎ育てていく町を「コレクティブタウン」とすれば、これは今や町の東西新旧を問わず、その町ごとに求められる姿だろう。

2 まちづくりの道のり、1984～2008

●谷根千地域のまちづくり前史

谷中・根津・千駄木は、武蔵野台地の東部、上野台と本郷台、その間に刻まれた根津の谷を中心とする一帯である。先史時代は海辺の丘で、縄文や弥生の人びとも多く暮らした温暖の地だ。

平安時代には江戸氏の、室町時代からは太田道灌の所領となる。江戸時代には江戸城下町周縁部の町として、谷中は寺町、根津は根津神社の門前町となる。千駄木は駒込村に属し、田園や林であった。明治に入つて、田園や元武家屋敷などが住宅地となる。上野公園の博物館群や東京大学に隣接して、地場産業として科学や芸術を支える町にもなった。その後の震災、戦災では低地を中心に被災したが、丘の上は大きな被害を免れ、江戸、明治の地割りや道筋、寺社や町屋などを今に引き継ぐ。先史から今日に至るまで、人が少しずつ入れ替わりながらも連続と住み継いできた町である。

●二〇年前のまち——バブル期の変化と地域性の発掘

今から二〇年ほど前、バブル景気の絶頂期には、土地への投機が急増した。特に不忍通り沿いの土地は、次々に地上げされ、長年続いた個人商店や古くからの住人が減っていった。世間では、新しいもの、近代的

なものがもてはやされたが、気づかないうちに無くなっていく町の記憶や暮らし方、建物や自然とその由来を留めようと、調査・観察し、記録・発表する動きが地域有志の間で始まっていた。「江戸のある町会」「不忍自然観察会」「谷根千の生活を記録する会」などなど。

●谷中「菊まつり」と地域雑誌「谷根千」のはじまり——1984～

なかでも、地域の文化を地域内外の人にアピールし、まちの資源や大切にしたいものを顕在化したのは、一九八四年に始まった「谷中菊まつり」と地域雑誌『谷根千』である。谷中菊まつりは、谷中の寿司店主・野池さんらを中心に、明治時代にこの辺が菊の見せ物で賑わった由来を継いで始まった。谷中大円寺の境内で毎年一〇月に菊人形の展示と奉納舞などが披露される。翌年には三崎坂の並び、三遊亭円朝ゆかりの寺、全生庵で、八月の円朝忌に「円朝祭り」も始まった。地域の文化を掘り起こし、今の町の活力につなげている。

菊まつりと同時に創刊した地域雑誌『谷中・根津・千駄木』(通称「谷根千」の発祥の元)は、千駄木に住む子育て中の主婦三人が始めた。マスコミから流れる情報ではなく、町の古老や商店主、主婦らの語る話を聞き取って、古地図や資料で裏付けをし、自分たちの暮らす町の由来や暮らしの文化を掘り起こし、記録し、伝える出版事業だ。いつしか編集部の谷根千工房には、

町の人や市民活動グループ、学生や研究者が寄り集まり、町の情報交換、町並みや建物の保存、環境保全活動などの拠点ともなっていく。

●上野・谷中・根津・千駄木の親しまれる環境調査―1986～1988

このネットワークを最初に形にしたのが、トヨタ財団の「身近な環境を見つめる市民活動助成」による「上野・谷中・根津・千駄木の親しまれる環境調査」である。東京芸大建築科の前野研究室を事務局に、谷根千工房、菊まつり再興の野池さん、郷土史家、記録写真家、主婦、大工、旅館主人、自然観察のグループ、建築や都市環境を学ぶ学生・教員らが集い、「江戸のある町、上野谷根千研究会」をつくって、暮らし、自然、建物、遊びなどのさまざまな角度から地域の「親しまれる環境」を町の人たちから聞き取った。この時に「生活の総体としての町」の良さや方向性を考える基盤ができたと思う。

●「谷中学校」の設立―1989

「親しまれる環境調査」に加わった学生や町の人たちが集まり、一九八九年「谷中学校」が設立される。再発見した地域文化の記録を、実際のまちづくり、町育てにつなげるため、谷中のコミュニティを中心に活動を開始した。谷中の魅力に惹かれた建築や都市の専門家、町の商店主、主婦、公務員などが手を結び、町の文化発掘と交流の場づくり、建物の保存活用や町並みデザインの提案、環境学習のワークショップなど多角的な活動を行なってきた。

●歴史的建物保存活用のはじまり

谷根千の歴史文化がクローズアップされるようになって、それまでは古くて恥ずかしいとされがちだった明治・大正・昭和の建物を保存活用する取り組みも増えてきた。「吉田屋本店」（明治の酒屋）の移築保存、「朝倉彫塑館」（彫塑家・朝倉文夫の自宅・アトリエ）



上野公園、寛永寺から続く谷中は江戸期からの寺町だ。



不忍通り
シマン
ション
群。



大円寺の境内で行なわれる谷中菊まつり。

の保存と公開、元銭湯「柏湯」の建物保存と現代美術ギャラリーとしての再生、元質屋「小倉屋」のギャラリーとしての再生、路地奥の文化住宅の住宅としての再生など。谷中学校も明治の酒屋「蒲生家町家」の保存に協力し、その一階をまちづくりの拠点として二〇〇四年まで活用させて頂いた。こうした歴史的建物の保存活用が谷中界隈の地域性を際立たせる一方で、多くの由緒ある建物が相続や住み替えを機に取り壊されていくのも現実であった。

●自然環境の保全運動

古江戸湾の名残、水鳥の棲処、町のオアシスでもある不忍池、神社や寺院や屋敷の奥に残る斜面森、墓地の古木や多種多様な草本類、個人の家の庭木や路地の植木棚など、いずれも都心では貴重な自然である。開発や伐採の対象になる度に、住民や有志のネットワークで保全と共存を提案してきた。不忍池の地下駐車場化や「岩崎邸」のゴミ処理場化も市民運動により免れて、今は公共的に維持保全が行なわれている。

●文京・台東下町まつり―谷中まつり、根津千駄木まつり

地域性を活かす機運は、お役所も動かし、台東区、文京区の支援による、「文京・台東下町まつり」（谷中・根津・千駄木エリアのまつり）が一九八九年に始まる。これは一〇年続いた後、「谷中まつり」と「根津千駄木まつり」に分かれて今も毎年秋に行なわれている。行政とコミュニティのタイアップは行政管轄範囲で動く方が、どうも勝手がよいようだ。

●まちじゅう覧覧会・谷中芸工展―1993

谷中芸工展は一九九三年、谷中学校の活動のひとつとして始まった。地域の手づくり文化の顕在化と交流を通して、町の文化を地元の人同士で再確認し、新旧住民の交流の場をつくるのが目的だった。二年目から

は、手づくりのお店や職人さんの工房紹介などを含めて、まちの手づくりの場を巡る「まちじゅう展覧会」形式とした。実行委員会と参加者は公募制で参加費やマップの売り上げで予算を組み、町の協力とスタッフの熱意の下、毎年一〇月に開催している。一五年あまり継続する中で、谷中はアートや手づくり文化のある町というイメージが地域内外に定着してきた。近年、谷中界隈に住んで手づくりの店やギャラリーを構える若い人たちが増え、新たなネットワークも生まれている。

●ギャラリーの集積とartLINE上野谷中―1997

一九九〇年代からアートギャラリーが谷中界隈に増え始め、一九九七年、ギャラリーと上野公園の美術館等がタイアップするアートイベント「artLINE上野谷中」が始まる。アカデミックな美術館の世界と個々に先端を行くギャラリーやアーティストの活動を、上野谷中の歴史の地で展開し、新たな連携を築く試みである。谷中で最も早く現代美術ギャラリーを開いた量店主・熊井さんや上野の森美術館、事務局メンバーなど実行委員会の熱意により、毎年秋に開催されている。秋は谷根千地域をアピールするイベントが目白押しで、町の人にとってはとてもハードな季節なのだが、谷根千界隈の文化と人の層の厚みが実感できる。

●学校を通じた地域学習

地域性を学ぶ機会は、小中学校でも展開している。谷中小学校では、総合学習の時間を「やなかの時間」と呼び、町に出て、職人さん探しやいいところ探し、町の古老の話や聞く、自分たちで町案内をする、町に提案をするなど、段階を追って、自分の町を考える基盤づくりを行なっている。上野中学校でも社会科の発展学習で上野や谷中の歴史や文化を調べて発表する。台東区では小中学生を対象に土曜学習「歴史文化探検



谷中で保存活用の先駆けとなった吉田屋本店。



普段住んでいる長屋も芸工展の会場に早変わり。



谷中芸工展の受付、本部となっている香隣舎（元谷中学校寄り合い所）。

隊」を行なって、地域学習の機会を設けている。大人たちは町の環境に慣れすぎて新たな発想が湧きにくい。地域の歴史や暮らしを学び提案する視線を持った子どもたちが大人になる頃、まちづくりもまた一歩進んだ段階になっているだろう。

●マンション見直し運動と建築協定締結―1998～2000

地域性の再確認が地域内外の人に浸透しはじめた頃の一九九八年秋、谷中寺町の真ん中の三崎坂に、大規模マンションの計画が立った。ただちに近隣の寺院や町会の人びとが結束し「谷中のまちを考える会」を組織する。これは単なるマンション反対運動ではなく、計画を谷中の景観や文化に合ったものに見直すことを求めるものだった。谷中学校メンバーも町からの依頼を受けて、建築・都市づくりの立場から提案を行なった。住民大会を開き、地域全体の総意として、行政、議会、事業者、各方面へ働きかけた結果、画期的なことに、事業者と地域が地域共生型のマンションのあり方を目指して協議を重ねることができた。当初九階建てだった計画を、沿道側四階、奥は六階に変更し、一階には庭や集会室を設けて地域交流もできるスペースがつくられた。三崎坂一带には高さを六階相当までとする建築協定をかけて、地域としての環境を守っていく。このマンションに住んだ人々も地域コミュニティに参加し、地域共生型の暮らしを実践している。

●まちづくり憲章とまちづくり協議会の発足

その二年後の別の大規模マンション計画では、残念ながら建築計画に地域の意向を反映することができなかった。改めて、地域の環境を守るには、明文化されたルールが必要だと町の人びととともに実感した。

マンション見直しのエネルギーを継続的なまちづく

りに役立てようと、地域の人たちは二〇〇〇年に「上野桜木・谷中地区まちづくり憲章」と「谷中地区まちづくり協議会」を発足させた。まちづくり憲章では、地域社会、環境と自然、町並み、安全、土地を大切にし、自分たちの町は自分たちの手で守っていこうと方針を表明している。まちづくり協議会は、今後の具体的なまちづくりの検討を地域主体で行なう体制として整えた。

●まちづくりNPOの設立—2003—

しかし、具体的なまちづくりの協議や計画を進めていくには、専門的な作業が必要である。地域の人たちの立場に立って、専門的な提案業務を行なうため、谷中学校のメンバーと建築・都市の専門家が協力して、二〇〇三年、「NPOひとまちCDC」を設立した。こちらは、谷中地区まちづくり協議会からの信任を得て、まちづくり事業について、専門事務局として地域の立場から事業計画を検討する作業を行なっている。

歴史的建物については、住みたい、お店にしたいなどの需要が高まっているが、持ち主にとっては維持保存が難しいケースが多い。建物の持ち主と使いたい人をつないで、維持保存活用につなげるしくみが必要となる。芸大や地域の有志、谷中学校メンバーらが協力し、二〇〇〇年、明治の住宅「市田邸」を借り受け活用するのを機に「たいとう歴史都市研究会」を発足した。二〇〇三年にはNPO法人となる。上野谷中の生活文化の勉強会を行ない、「市田邸」や大正町家「間間」等の借り受けシェア居住+活用のしくみを実践を重ねながら開拓している。

●行政のまちづくり事業—2000—

地域におけるまちづくりの機運を受ける形で、台東区も二〇〇〇年頃より谷中地区の密集住宅市街地の防災安全性を高める事業、交通安全や景観向上を総合的

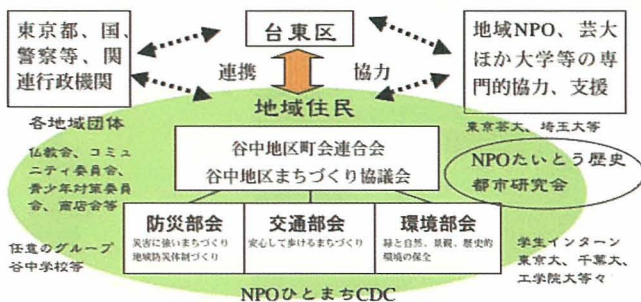


明治のお屋敷を活用（市田邸）。



元旗本屋敷が防災広場「初音の森」に。

谷中地区
まちづくり



NPOひとまちCDC



9階→6階へ見直し後の三崎坂マンション。



地下駐車場化を免れた不忍池。

に進める事業などを行なっている。この数年の計画や議論を経て、二〇〇七年、約七〇〇㎡のお屋敷の跡地が防災広場「初音の森」として整備公開された。これは地域にとって大きな前進であった。斜面の森に囲まれた広い草原で、日頃は子どもたちが遊び、折々、地域の行事も行なわれる。

東京都は、谷中霊園の再整備について、隣接寺院や区、まちづくり協議会と協議検討中である。また、都市計画道路の整備方針（二〇〇三）の中で、谷中地区の都市計画道路について、歴史的な道筋、町割りを尊重し、地域のまちづくりに即して見直しを行なう路線に選定した。地域も見直しに賛同しているが、その実質的な議論はこれからである。

これら行政のまちづくり事業も、地域の産業、観光や福祉、教育、文化振興など、地域の活動を総合的に捉え、町が目指す方向を公に支える基盤となるよう、練り上げていかねばならない。

●日用品の店が減っている

実際には、少し前まで、ちょっとした街角ごとに八百屋、魚屋、肉屋、豆腐屋、荒物屋などの日用品の個人商店があり、住人同士でつづがなく毎日の生活を送っていた。しかし地上げ開発や商店主の高齢化などから、昔からの日用品店は次々と減っている。日常の買い物は商店街か町のスーパー、トラックでの行商、生協などの宅配に頼るようになった。日常生活の地としての基盤が弱まるのが心配である。

●新たな「ものづくりの住むまち」へ

一方で近年、手づくり・オーダーメイドの生活雑貨や洋服、靴、家具、自転車などの店、独特のテイストのある本屋と喫茶店などがそこに増えている。店主の多くは、この地の雰囲気や文化的土壌に惹かれて

自ら起業した若い世代の人たちである。今後、この人たちも地域で家族を持ち、お祭りなどを通して古くからの住民との交流も生まれていくかもしれない、それが日常の店の充実やコミュニティ活動の世代更新などにつながって、再びものづくりの住む町の元気が甦ることが期待される。

3 まちづくりの役割

●地域の自治会、町会の底力

○ベースとしての町会、町会連合会…まず、何をにおいても町の基盤となるのは町会とその連合会である。谷中には一四の町会があり、町会が集まって連合町内会をなす。地域の防犯防災、交通安全、親睦、祭りなどをなす。日常生活の自治は町会単位で活動し、町会連合会は地区全体の自治の最高決定機関になる。行政からのお知らせや調査協力の窓口にもなる。

○町の実働隊「青年部」と青少年育成委員会…町会の活動を主に実行するのは、青年部と呼ばれる町会の壮年層である。自営業の人が主だが、サラリーマンもいる。多くは行政の「青少年育成委員会」委員も委嘱されていて、子どもたちの育成行事も取りまとめている。○まちの消防団と交通安全協会…消防や警察などの公務についても、地域からバックアップする組織がある。地元の消防団は初期消火や初期救助の訓練を重ね、交通安全協会員は地域の交通安全普及に協力している。

○谷中コミュニティ委員会

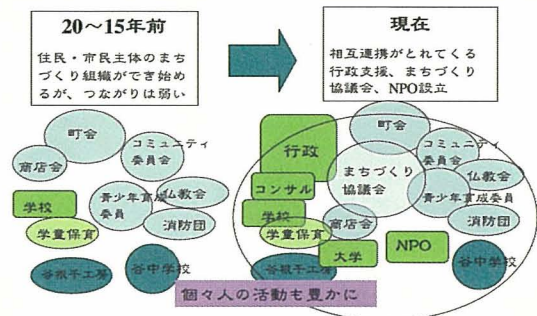
谷中コミュニティセンターの管理運営を担う住民組織。個々の町会の枠を超えて地域の福祉や教育、親睦に尽くす。

これらの活動も町会の青年部層が主に担う。つまり、青年部層の人たちは町の日常を多方面から常にサポート



谷中の台所、日常のお店が連なる谷中銀座。

まちづくり主体の連携状況



ハンプによる速度抑制社会実験。



交通部会による車止め社会実験。

トしているのだが、動ける人が限定されがちである。町会へ参加する若い世代が求められている。

●よそ者の起こす風

町会が地域のベースを担う存在なら、よその町から来てこの町に根つき、この町らしさを伸ばそうと動く人たちは、町に新たな転機をもたらしてきた。外の目から見ると地域のよさや魅力が見えやすく、まだ地元の社会に組み込まれていない分自由に動きやすい。自分たちでできる範囲のことなら町の中で小さな実験を重ねられるし、町会の了解を得れば少し規模が大きい催しや企画も実行できる。「谷中芸工展」や「ひと箱古本市」などのイベントも、よそから来た若者たちから始まり、地元の人たちが協力して地域らしさを伸ばし、日常の産業にもつなげてきた。草分けは、「菊まつり」を興した野池さんだろう。信州から来て三崎坂に店を持ち、地域振興と重ねてさまざまなまちづくり活動を支援してきた。今では連合町内会長の立場に立ち、谷中の文化を活かしたまちづくりを多々支援されている。

●大学・学生の参加と交流

谷根千地区は東大や芸大に接し、昔から町が学生たちを育てる気風がある。学生・研究者にとっても学ぶことの尽きない場である。今まで、さまざまな大学の建築、都市工学、デザイン、社会学、文化人類学など、多くの学生らが活動に携わってきた。その際、研究が表面的なものにならないよう、地域の人たちの間に入って共に活動し、研究成果を必ず町に還すことを約束している。学生らの参加が町のさまざまな試みに新鮮な視点やパワーをもたらし、町の人の生活者の姿勢が学生たちの研究と人生に深い体験を与えている。今は大学も責任を持って学生と地域の交流を継続的に支援することが求められる。

●商店街は町の元気のバロメーター

谷根千界限には、谷中銀座、谷中三崎坂、よみせ通り、根津銀座、団子坂下など一七の商店街がある。都電から地下鉄へ、下町歩きブームと時代の変化に応じてそれぞれの商店街ごとに生きる道を工夫している。谷中銀座は豊富な惣菜や日用雑貨で地域の日常需要に応えつつ、肩の触れ合うような路上対面型の懐かしい商店街のつくりと少量売りが特徴で、谷中散策などの観光需要にも応えている。三崎坂は千代紙や寿司、喫茶店など、町の歴史や文化をゆつくり味わえる店が多い。根津銀座は開発の裏で昔からの八百屋や氷屋が無くなり心配だったが、近頃高級志向の豆腐屋や魚屋、セレクトショップやギャラリーなどが増えてきて、新たな兆しが感じられる。

●個店と職人さんの仕事場―手づくり文化と地場産業

谷根千らしいのは路地や横丁にぽつぽつとある個人の店や工芸工房、作業所などだ。江戸からの彫金、鍛金、指物のさしもの、籠甲かごがら、象牙などの伝統工芸家の住まいと工房が各所にある。寺町の谷中にはお寺関係の仕事、卒塔婆屋、表具屋、畳屋、工務店、仕出し屋、和菓子屋、寿司屋などが多い。根津千駄木には東大や日医大などの需要に応える理化学機器製造業や古本屋がある。また芸大や上野の博物館・美術館の制作や展示に応える美術品運送・設営、筆屋、画材屋の老舗もある。地域のお寺や科学技術・芸術文化を支えるものづくりたちが住み、一種の地場産業を形成している。この土壌の上に、手仕事の生活道具をつくる新たなものづくりたちが地域に集まってきている。

●谷根千に住む人の増加

バブル期の地上げと地価高騰、少子高齢化で一時は減少していた人口も、近年は少しずつ増加に転じてい



再建運動が始まった谷中五重塔。



谷中・日暮里の総鎮守、諏方神社。



江戸期には谷中靈園を寺領とした大寺、谷中天王寺。



伝統工芸の職人さんの工房兼店舗。



谷中寺子屋での障子貼り。

る。新しく住んだ人と話すと、町の人や自然、歴史とのつながりが自然に持てる町に住みたいと願う人が増えていると感じる。交通至便で大きな病院や公園や文化施設も近い。家やマンションの値段やアパートの家賃も決して安くはないが、自力改修やシェア居住など、工夫を重ねて自分らしい住まい方を実現している人も多い。元から住む人の多くも、慣れ親しんだ町で長く暮らしたいと願っている。

●子どもを通してつながるパワー

新旧住民双方で地域に愛着を持って住む人が増えた。しかし、代々町に住む人たちと、最近この地域に住み始めた人が共に活動する場合は案外少ない。町会は新たに活動に加わる人を求めているが、なかなかきつかけがつくりづらい。新しいお店のネットワークと地元のお店の接点も今は少ない。けれど双方、何かつながりをもてたらとの願いはある。

そんななか、子どもたちを地域で育てる取り組みは、親同士、子同士、新旧住民の区別のないつながりを生んでいる。保育園や学童保育の父母会、幼稚園や小学校のPTA、地域の子ども会、町会や青少年育成委員会などの行事、芸工展や谷根千、谷中学校、NPOによる環境学習など、地域で子どもたちを見守り育てる取り組みが本当に沢山行なわれている。子どもたちが安心して育ち、この町をふるさとと思えることは、町に住んだ時間の長短に関わらず、大人たちの共通の願いだ。そんな大人の背を見て育った二世、三世や、新たに住んだ若い世代も、自分たちとまちの創造的な関わり方を模索している。まちの寿命は人の寿命よりはるかに長い、自分たちの町といえる場所が在り続けるには、次の世代の人たちが主体的に町を受け取り育てる気持ちと行動を起こしていくことが欠かせないのだ。

<ul style="list-style-type: none"> ■2007「美しい日本の歴史的風土100選」に選ばれる「寛永寺・上野公園と谷中の街並み」 「根津、千駄木、神楽坂、等」 	<ul style="list-style-type: none"> まつり(毎年10月1999~) F駄木まつり(毎年10月1999~)
<ul style="list-style-type: none"> ■谷根千ねっとプロバイダー(2000~) ■たてもへの応援団NPO法人化(2007) 	
<ul style="list-style-type: none"> ■『蔵』部(1999~) ■団体のNPO法人化と地域との連携強化 ■たいとう歴史都市研究会(2001~、NPO法人化2003) ■NPOひとまちCDC(2003~) ■芸工展(2008~) 	
<ul style="list-style-type: none"> ■不忍ブックスストリート実行委員会(2005~) ■一箱古本市(2005~) ■東京芸大120周年/地域連携(2007~) ■サスティナブルアートプロジェクト(2004~) 	
<ul style="list-style-type: none"> ■特別養護老人ホーム千駄木の郷(2001) ■谷中コミュニティセンター再生マスタープラン(2006~) ■谷中五重塔再建運動(2007~) ■蒲生家「香階舎」(2005~) ■上野桜木会館保存運動→改築部分保存(2001~02) ■明治屋敷「市田邸」保存活用(2001~) ■大正町家「間間間」保存活用(2002~) ■旧平藤田中部・アトリエ保存活用(2003~) ■旧平藤田中部・アトリエ保存公開(東京都2001~) ■根津茨城県会館保存運動→解体一部保存(2003~06) ■新しい店、若い世代のネットワーク増える ■谷中坂町ハウス(青空ボラティブ、竣工2002) ■ギャラリー-KINGYO(2000~) ■青山洋品店(2004~2008(移転)) ■いるばに木工(2005~) ■ブックオフ千駄木店(2004~) 	
<ul style="list-style-type: none"> ■谷中坂町ハウス(青空ボラティブ、竣工2002) ■ギャラリー-KINGYO(2000~) ■青山洋品店(2004~2008(移転)) ■いるばに木工(2005~) ■ブックオフ千駄木店(2004~) 	
<ul style="list-style-type: none"> ■上野桜木マンション見直し運動(2000~03) ■上野桜木マンション完成(2003) ■谷中地区まちづくり協議会(2000.3) ■谷中三崎坂マンション完成(2000.11) ■谷中三崎坂建築協定締結(2000.12) ■谷中地区まちづくり協議会(2000~) ■谷中地区まちづくり推進の要望書を区に提出(2000) ■防災広場「初音の森」整備計画(2003~) ■完成2007 ■谷中地区まちづくり基礎調査研究(台東区2001) ■谷中地区まちづくり整備計画(台東区2002~04) ■谷中地区都市再生整備事業(台東区2005~10) ■東京都都市計画道路整備計画(東京都・特別区2003) ■谷中公園再生計画(東京都2005~) ■根津駅周辺まちづくり(文京区2006~) ■景気回復(2002~) ■東京ミッドタウン(2007~) ■景気回復(1999~2002) ■制度開始(1996) ■都市再生特別措置法(2002) ■活動促進法(NPO法1998~) ■景観法(2004) ■まちなか再生事業(2006) 	
<ul style="list-style-type: none"> ■行政によるまちづくり支援事業が増える ■景気回復(2002~) ■東京ミッドタウン(2007~) ■制度開始(1996) ■都市再生特別措置法(2002) ■活動促進法(NPO法1998~) ■景観法(2004) ■まちなか再生事業(2006) 	

●行政に引き受けてほしい公共性のリード
 谷根千エリアは、文京区、台東区、また北区、荒川区の一部を含むが、いずれも行政区の辺縁にあり、各区協力の総合的な政策は難しい。その分、住民同士の自由な交流や催しが盛んで、地域文化の再発見や地域イメージのブランド化をもたらしした。ただそれが大規模マンションや建て売り住宅開発にはプラスになることはあっても、歴史ある家や緑を守り、新旧住民が住み合える家をつくること、空の広い、伸びやかな景観を引き継ぐことにはなかなかつながらない。もちろん住人として地域性を守り活かす取り組みに手間を惜しまないとしても、外部からの大きな開発の力を地域のスケールと質に合わせるには、やはり法律に基づく明文化されたルールが必要である。高さ制限、通りと建物の距離、壁面線の位置は地区計画で、建物の色彩や素材、形態などは景観法で地域ごとのルールを定めることができる。歴史的建物についても、国登録文化財への登録や景観重要建造物としての税制緩和、規制緩和の道がある。これらのルールは地域、行政双方が真剣に積極的に取り組まねば実現しない。しかし、まち

のルールは私権の制限にもなるので、最後は行政が、公共性のある制度として定めていくプロセスが不可欠である。谷根千は江戸東京の生活文化を引き継ぎ育てる国際的にも貴重なエリアである。都や国などが、総合的な視点から地区の総合的な保全整備方針をリードしていくことも望まれる。

●まちなかのかなめ…神社と寺院
 最後に、覚えておきたいのが、神社と寺院の存在である。谷中は日暮里の諏方神社(一二〇五年創建)を鎮守の氏神とする。祭りは町会活動の大きな柱になっており、町会連合の単位が神社の氏子の範囲とほぼ重なる。神社は中世以前にさかのぼる地域自治の本当のベースなのである。

また、八〇軒余りの谷中や上野寛永寺の寺院群は江戸時代の寺町の骨格を引き継いでいる。四〇〇年近く前から、寺々のお堂が並び、そののある瓦屋根の上にな大きな空が広がる。そののびやかさは代々の祖先の生きた町と今やこれからの暮らしを無意識のうちに生きているようだ。そして毎年春秋の彼岸やお盆には町中が花と線香の香りにつつまれる。谷中のどこかおっ

とりした気風は、寺町の風景やリズムと無縁とは思えない。今、谷中では五十年前に焼失した谷中五重塔、幸田露伴の小説『五重塔』のモデルにもなった塔の再建運動が再び始まっている。五重塔は単なるランドマークではなく、町の歴史や日本の大工技術、ものつくりのシンボルとして、さらには彼岸と此岸をつなぐ精神的な柱として、根気強く求められている。

4 コレクティブタウンをつくるには

私たちが谷根千地区で体験した、町の歴史文化や自然を活かし、新旧、老若の住民や訪問者が交流しあう暮らし方は、本来どの町でも実践できるものだろう。古い町でも新しい町でも、都心でも地方でも、その町なりのやり方があるはずである。個々の町の姿は違いますが、きっと共有できると思う要素をあげてみる。

○まちなかの成り立ちや今あるものからヒントを掴む
 当たり前だ、と思っただけで見逃しているもの、町の欠点と思っただけで敬遠しているものの中に、その町ならではのものが含まれている。町内外の人の目を合わせて町のユニークポイントを浮き上がらせよう。

○子育てしたい町、終の住処にしたい町

人が生き物として代を重ねて住みたい環境を整える。安心できる食べ物や住まいが手に入る。日常の安全、快適だけでなく、人と人とのつながり、心の拠り処となる歴史文化、身近な自然との接点も必須要素。経済性で切り捨ててはいけませんが経済的裏付けも必要。積極的に創り守らなければ保てない。

○前近代的なコミュニティのもつ力を見直す

伝統的な暮らしや住まい、町を保ってきた近代以前からのコミュニティのしくみを見直そう。町の情報は最初から誰にでもオープンではない。それは町や家を

<p>■地域性を活かす 出来事、イベント</p> <p>■まちづくり関連 組織</p>	<p>根津神社大祭（毎年9月） 諏方神社大祭（毎年8月）</p> <p>古くからの地域団体</p> <p>■根津神社氏子会 ■諏方神社氏子会 ■町会、町会連合会 ■青少年育成地区委員会 （教育委員会所管） ■消防団（消防署所管） ■交通安全協会（警察所管） ■幼稚園・小学校・中学校PTA ■保育園・学童保育父母の会</p> <p>ベーシックな地域団体が しっかり運営されている</p>	<p>■谷中菊まつり(1984~毎年10月) ■月朝まつり(1985~毎年8月) ■文京・台東下町まつり(毎年10月1989~98)</p> <p>■地域雑誌『谷中・根津・千駄木』(1984~2009) ■谷根千工房(1984~) ■不忍池を愛する会 ■谷根千の生活を記録する会(1984~) ■「上野、谷中、根津、千駄木の親しまれる環境調査」(1986~89) ■江戸のある町、上野谷根千研究会(1986~89)</p> <p>■谷中学校(1989~) ■谷中芸工展(1993~毎年10月) ■art-Link上野谷中(1997~毎)</p> <p>■谷中朝少会(1977~) ■谷中コミュニティまつり(毎年5月) ■谷中コミュニティ委員会(1979~)</p> <p>■文京歴史の建物の活用を考える （たてもの応援団）(1996~)</p> <p>■けんこ</p> <p>■谷中 ■根津</p>
<p>■公共施設整備（新設）</p> <p>■歴史的建物保存活用</p> <p>■商店街、店、工房、 ギャラリー、事業所、 住宅など個人や企業の 動き</p>	<p>谷根千地域の商店街</p> <p>■谷中の商店街 谷中銀座（半分は荒川区）、谷中さんさ き坂、よみせ通り（半分は千駄木） ■根津の商店街 根津銀座通り、根津宮永、八重垣 ■千駄木の商店街 千駄木二丁目商店街、千三中部平和会、 団子坂下、大観音通り、道灌山下、動坂、 動坂中央通り、動坂上通り、など</p> <p>■谷中コミュニティセンター(1979) ■谷中小学校改築、小広場設置(1990) ■谷中銀座商店街リニューアル(1979) ■特別養護老人ホーム谷中(1989) 公共施設をコミュニティ拠点として活用 ■谷中五重塔再建運動(1988) ■根津ふれあい館(1995)</p> <p>歴史的建物保全活用のはじまり ■明治町家藩生家再生（谷中学校寄合処1990~2004） ■旧東京音楽学校奏楽堂保存運動（1983~） ■上野桜木会館保存活用（都一区1991）</p> <p>移築1985 → 公開1987 → 再生1993~</p> <p>■旧吉田屋酒店移築保存（1986~） ■元銭湯枯湯保存活用計画（1991~） 日用品の店や、古い建物が減っていく → 移築公開1987 → 再生1993~</p> <p>■ギャラリー五社) ■アートフォーラム谷中(1989~) 歴史的建物保全活用の下 ■ギャラリーKONDO ■だうんタウン工房 ■ギャラリーSCAITHBATHHOUSE(元銭湯) (1 ■個人ギャラリーの草分け ■ギャラリーすべーす小倉屋(元質屋) (1993~)</p> <p>谷中にギャラリーが増えはじめる</p> <p>■旧岩崎邸地下</p> <p>■往來堂書店(1996~)</p> <p>■古書ぼう</p>	<p>■谷中三崎 見直し運動</p> <p>■不忍池地下駐車場計画(1988) ■不忍池地下駐車場反対運動</p> <p>■不忍通り不燃化促進事業(都・文京区1991~2000) 不忍通りのマンション化が進む</p> <p>■千駄木向ヶ丘密集住宅市街地整備促進事業(文京区1995~2007)</p> <p>■谷中三崎 見直し運動</p> <p>地域のまちづくり 気運、高まる</p> <p>■富士見</p>
<p>■地域のまちづくり の動き</p> <p>■行政のまちづくり 事業</p>		<p>■丸 ■国登録文化 ■特定非営利</p>
<p>■東京や全国の動き</p> <p>■新たな法律・制度</p>	<p>■高度経済成長(1955~1974) ■オイルショック(1973,78) ■地区計画制度(1980) ■伝統的建造物群保存地区制度(1975)</p>	<p>■バブル経済開始、地価高騰(1986) ■バブル崩壊(1991) ■赤レンガの東京駅保存運動(1987~)</p>

年表制作：椎原晶子2008、資料：「谷中のまちづくりの歩み20年」『季刊まちづ

守るシールドでもある。しかし、よそから来た者、若い者でも地域活動を通して信頼が得られれば、段階的に町や住まい運営への扉が開かれる。ゲスト（お客さん）からホスト（町の担い手）へ。信頼と責任は表裏一体である。

○まちの価値のベクトルを共有する

大勢の人が住めば、それぞれの理想とする町の姿は同じではない。しかし、住人たちが町について百八〇度違う理想や価値感を持っていたら、まちづくりは立ち往生する。町全体でゆるやかな目標像を共有しよう。その中の特徴ある地区ごとに将来像やまちのルールを設定する。必要に応じて、行政や専門家の協力も得て、法定ルールにしておく。統一性の中にも多様性のある町に向かっていける。

○人の和とタイミンを活かして

もちろん、そこに至るしくみは簡単ではない。だが、町の有志たちが長く方向性を持って町に働きかけていると、機が熟す時、人の和がよい盛り上がりを見せる時がある。そのタイミンで方向性を決定づける。根気よさと機敏さ、信頼の輪が必要だ。町はゆるやかで大きな生き物である。代々の住人や関わる人たちでその総体をよく捉え、自然体で住み永らえていきたい。

椎原晶子 / しいはら・あきこ
地域プランナー。NPOたいとう歴史都市研究
会副理事長。谷中学校運営人。晶地域文化
研究所代表。

一九八六年、東京藝術大学美術学部芸術学科
卒業、八九年、同大学院美術研究科環境造形
デザイン専攻修士課程修了。佛山手絵合計画
研究所、東京藝大大学院文化財保存学専攻非
常勤講師等を経て、地区の歴史文化を活かし
たまちづくり、建物の保存活用に取り組み。
共著に「新・町並み時代」、「路地からのまち
づくり」などがある。

谷根千新商店会

千駄木・往来堂書店

箕入 建志 / おいり・けんじ

大手書店勤務を経て、二〇〇〇年、往来堂書店店長となる。街の本屋の復権を目指して、書棚は管理するものではなく、編集するものをモットーに、取次に依存しない品揃えをする。http://www.ohradio.com/

ギャラリーKINGYO

扇谷 京子 / おおぎたに・きょうこ

竹中工務店勤務を経て、(株)SD602設立。二〇〇〇年、ギャラリーKINGYO開設。http://www.13.plala.or.jp/sd602kingyo/

谷根千工房

山崎 範子 / やまざき・のりこ

一九八四年、仰木ひろみ、森まゆみとともに地域在住の主婦三人で谷根千工房を開設。地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊する。一九九二年、「サントリー地域文化賞」受賞。http://www.yamansen.net/kobo/



写真-1 町なかでの「芸工展」風景。



写真-2 毎年数回路地で開かれるフリーマーケット「我家我家市」。

谷根千の新しい波

司会 手嶋 尚人

てじま・なおと

建築家。初音すまい研究所主宰。東京家政大学家政学部造形表現学科准教授。NPO法人ひとまちCDC理事。谷中学校運営人。

一九八六年、東京芸術大学美術学部建築科卒業。同大学院美術研究科博士課程満期退学。同大学片山研究室助手、DIK設計室を経て、現職。一九八六年以来、谷中のまちづくりに関わり活動。コーポラティブハウス「コーハウス喜多見」、上野毛地区会館・出張所等担当。その他住宅を中心に設計活動。共著に『谷根千路地事典』（住まいの図書館出版局）ほか。

コレクティブタウンを支えるお店の役割



手嶋尚人（司会） 今回の特集テーマは「谷中はコレクティブタウンか」としています。谷中の町は最近とみに多くの人が散策に訪れ、土日はまるで観光地のようなにぎわいを見せています。この現象は、谷中の町が歴史的価値の高いエリアであることはもちろんありますが、それ以上に、

「三丁目の夕日」ではありませんが、日本の古き良き面影を残していると感じさせてくれる町であり、町の人との接点、出合いが持ちやすい町であることが理由に挙げられると思います。

私も谷中で暮らし始めて二二年が経ちます。生活者として谷中の町を見た時、家賃や日常品の物価は安くはないですが、谷中に暮らししていると帰属感を感じることができ、町の中での人とのつながりがつくり易く、安心して暮らせています。

コレクティブタウンと呼べる谷中の暮らしを支えている大きな一つの要因として「お店」が考えられるのですが、その「お店」も、現在大きく変化してきています。このミニシンポジウムでは、その現象について考えていきたいと思っています（谷中・根津・千駄木はひとつの生活圏なので、「お店」の話としては谷根千とします）。

最初に私の方から谷根千における「お店」の役割や現在の傾向についてお話しさせていただき、その後、今日パネリストとして来ていただいているお三方にコメントをいただき、会場も交え、議論を進めていきたいと思います。まちとのかわりで注目される谷中のお店は

お店の大切さ。たとえば「ご用聞き」はお店のうちでも最も町、人の中に入ってきてくれるものです。ご用聞きが行った先のおばあちゃんの具合が悪いと、次の家へ行って、「あそこのおばあちゃん、具合が悪そうだから面倒みてあげてよ」と言ってくれる。谷中銀座のあるお店では、ボケだしたお年寄りが鍵をなくしてしまう。それで鍵を預かってあげている。日常のなかで信



写真-3 町医者工務店・阿部建築も「芸工展」参加。
（貸はらっぱ音地にて）

「ポップ・イン・フォト」という写真屋さん。やっているお店ですが、町のことをいろいろ面倒みてくれています。「我家がや家市」「写真」というフリーマーケットをやったり、「落書き大会」ということで町の子どもたちを集めたり、秋には「ハロウィン」をやっています。町の一つの潤滑油になっているような形のお店です。

また、日常品の小売店だけでなく、旅館業の「澤の屋」や地域工務店の「坂本建築」「阿部建築」(写真-3)なども地域のなかで非常に重要な役割を担っています。

いま谷根千に増えてきているお店の形態の一つとして、雑貨屋があります。「かなかな」(写真-4)はこういう形態ではないちばん古いでしょうか。二〇年近く前にできた雑貨屋です。「EXPO」(写



写真-4 雑貨屋の草分け「かなかな」。



写真-5 大阪万博にちなんだ雑貨屋「EXPO」。

頼りできる関係が町の中でつくりやすい形としてお店があるのだと思います。町での人と人との取り次ぎ役をお店は果たしてくれているのです。お年寄りや独り暮らしの方がこの町には多いですが、やはり誰かと話をしたいという気持ちがあつて、お店へ行って世間話をするということがあります。これはある種の福祉になつています。同年代の人がお店をやってくれていることによつて非常に話がしやすいということがあります。

真一5」という雑貨屋は、芸大のOBが七〇年大阪万博にちなんだお店としてやっています。

「わがままや」(写真-6)は自分の家を一部改装して、雑貨や絵手紙などの自分で創作した作品を展示販売する形でやっています。「丁子屋」(写真-7)は、以前はここでは小売りはしていなかったのですが、町が活気づいて散策者が多くなったせいも、最近はお店もやるようになったという形です。

「木楽庵」(写真-8)は職人さんとの交流から始まった江戸指物の展示販売のお店です。新しく入ってくる人と、谷中の住人が町の流れの中で始めたお店があります。

他にも新しく来た人がやっているお店として、雑貨系の「ノスタルジア」(写真-9)、「きんじ」などがあり、また、「タムタム」というアフリカ雑貨を扱っているお店はNGOの活動拠点ともなっています。

貸しスペースという形も最近増えてきています。

ギャラリーは、二十数年前に根津にオープンした「コンドーギャラリー」が先駆けとなり、町のいろんなイベント会場にも提供してもらいました。次に古いのは、寛永寺出入りの老舗畳店熊井さんが始めた「アートフォーラム谷中」(現「K's Green Gallery」)(写真-10)。その後、次々とギャラリーが誕生しました。銭湯を使った現代アートのギャラリー、明治の町家と蔵のギャラリー(写真-11)、以前自分のアトリエだったところをギャラリーにしているものなど。当初は地元の人が始めたものが多かったのですが、外から来て開くギャラリーも増えています。現在では、谷根千地域に二十を超えるギャラリーが点在しています。

手づくり、ものづくり、そういう分野のお店が多くできているのも、この地域の特徴でしょう。

もともと古くからあるものとしては、べっ甲、象牙細工、銀器、彫金などの伝統工芸がありますが、最近では、家具製作をやっている「いろはに木工所」(写真-14)とか、金継ぎをやっている若い女性の方の「nico」とか、浅草で靴制作をやっていた職人さんたちがみんなでお店を開いた「アジエンダ」など、

ものづくりの人が集まるエリアにもなっています。

また、カフェ関係では、「カヤバ珈琲」(写真-13)という地元の人たちの憩いの場になっているところ(現在は閉店)、「愛玉子」「カフェ・デザール」とい

う昔からの喫茶。それに対して、外から入ってきた若い人たちがやっている喫茶店が、「谷中ボッサ」(写真-15)

「カフェ・コパン」(写真-17)「喫茶めめ」等

そして「やなか珈琲」はチェーン展開という新しい形で入り込んでいるものです。

本とカフェがマッチングしているような形の「BOUSINGOTT」(写真-16)なども生まれてきています。

いま谷根千では、いろんな新しいお店がで



写真-10 畳屋さんが開いた「K's Green Gallery」はアートギャラリーでは草分け。



写真-8 家の車庫をリノベーションした「木楽庵」。江戸指物の展示・販売も。



写真-6 「わがままや」は玄関先で自分の作品を販売。



写真-11 元質屋を保存修復した「すべす小倉屋」。



写真-9 最近できた雑貨屋「ノスタルジア」。



写真-7 「丁子屋」。老舗も小売販売を。

きています。そして、新しいお店同士でネットワークをつくりだしてもいいです。こうした状況を今回、「谷根千新商店会」と名付け、なぜこういうことが起こっているのか、今後の谷根千の方向性として、町として本当はどういうお店が出てきたらいいのか、そういうことを考えていきたいと思っています。お店の人にとっては、谷根千はそんなに儲かる場所でもないと思うので、谷根千にお店を出したいというのはどういう気持ちからか、町とどういう関係を持つようとしているのか、ということも考えていければと思います。

お客さんと話したい——お店の仕事はコミュニティ



箕入建志 千駄木・往来堂書店の店長をやっております。

千駄木・往来堂書店は、不忍通りを千駄木から根津のほうに向かっていますと、真ん中あたりで左に少し折れるところ、その不忍通りに面したマンションの一階をテナントとして賃借しております。私はオーナーではなくて、雇われの二代目の店長です。そもそもオープンしたのは九六年一月。私が店を任せられるようになったのが二〇〇〇年六月からです。

それまで私は池袋の大きな書店にいたんですが、大きいところと小さい書店は全然違います、一見、大きいところにはたほうがいいんじゃないの、といわれることが多いんですが、実はそうでもない。ターミナル駅の大きいところでやっていますと、たくさんの方があって、たくさんのお客様が来て、ものすごく目まぐるしい毎日なわけで、自分としてはもっと落ち着いてお客さんとコミュニケーションしながら商売をやっていたらいいなと思っていました。

往来堂は本の陳列の仕方が工夫しており、書店の業界内や本屋好きの間では名が知れていたんですね。で、どんな本屋なんだろうということで、私は来訪者として初代の店長がやっているときに往来堂を訪れたのですが、偶然、前の店長が別のところに移りポストが空いたので応募して採用された、とい

うことで今日に至っています。

お店というのは、直接会話を交わすかわりには別として、店の人間からお客さんたちへ何かしら語りかけることなんだろうなと思っていました。それに対して売上げという形で答えが返ってくるのか、あるいは直接的に「あの本、おもしろかったよ」という言葉で返ってくるのか、いろいろな形があると思うんですけれども、ある程度固定したお客さん、固定した地域のなかで、それなりの適当な規模で商売をやっていく、そのなかでコミュニケーションを大事にしながらやっていきたいなと考えています。

ただ話したいというだけではなく、当然商売として成り立たな



写真-16 古本カフェという業態のお店「BOUSINGOT」。



写真-14 女流木作家の作業場兼お店「いろはに木工所」。



写真-12 「浅尾拂雲堂」。額縁、絵画修復の老舗がギャラリーを併設。



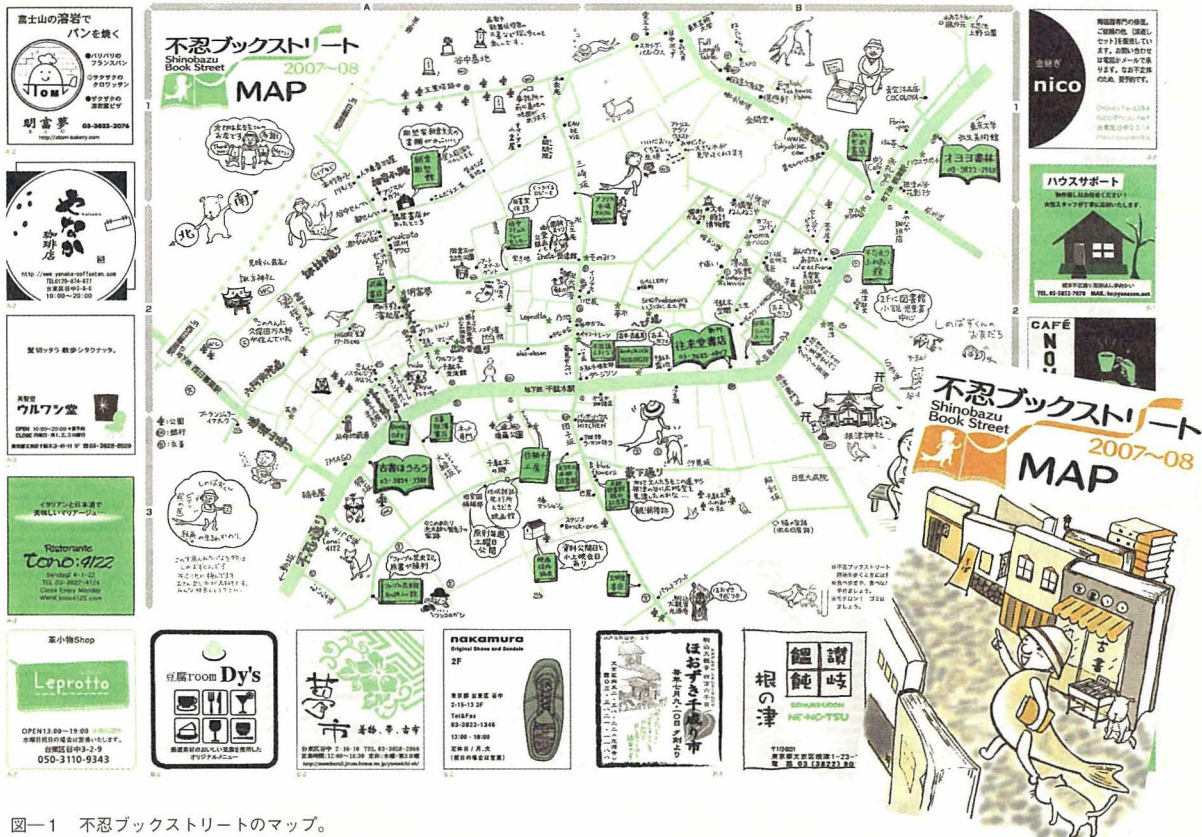
写真-17 新しいお店「カフェパン」。



写真-15 新しいお店「谷中ボッサ」。



写真-13 地元の人の憩いの場「カヤバ珈琲」。



図一 不忍ブックストリートのマップ。

本でもない、けれど個人的にこん
42冊」(図一と)です。

「不忍ブックストリートが選んだ
環として、本を買いに来た人、本
を読む人が集まるところなんだか
ら本の話をしようじゃないかとい
う単純な思いつきでやったのが、
「不忍ブックストリートが選んだ

三本柱でやっております。
お店のコミュニティづくりの一
とで、私の仕事は、店でのコミュ
ニティづくり、地域での本を媒介
にしたコミュニティづくり、本屋
同士のコミュニティづくりとい
うことだと思っています。

もう一つ、本屋同士の協業もや
っており、店でのコミュニティをつ
くることは、お店が一軒だけでは
なかなかかむずかしいというこ
とで、地域の人たちと協力して「
不忍ブックストリート」という活
動をここ三年ぐらいやっています。

冒頭に手嶋さんからコミュニティ
というものが出ました。たしかに
お店というのには語りかけるこ
と、それに答えることの小さい積
み重ねなので、お店の仕事はま
さにコミュニティ、繰り返し来て
いただくことでコミュニティをつ
くっていくことだと思っています。
そこで、お店でコミュニティをつ
くることは、お店が一軒だけでは
なかなかかむずかしいというこ
とで、地域の人たちと協力して「
不忍ブックストリート」という活
動をここ三年ぐらいやっています。



図二 不忍ブックストリートが選んだ42冊。

な本を読んだらおもしろかったよ、というものを選んでいただいて、そこに一言コメントを付けていただいで、一昨年の年末に実際に店頭で並べて販売しました。これは思った以上に売れたんです。本は必需品であり嗜好品であると思います。それ自体でお腹がいっぱいになるわけではない。何か読みたいんだけど、みんなが読んでいる本じゃなくて誰かに勧められた本をちよつと読んでみたい、という気分にはマツチしたみたいで、とてもよく売れました。

新刊書店はあわただしい職場なので、新しい本がどんどん出てきて昔の本を、どんどん忘れ去ってしまうんですが、こういう形で少し前の本も皆さんに教えていただくと、ほかの書店とはがらつと雰囲気の違いができて、お客さんにも喜んでもらえたと思っています。

もう一つ「不忍ブックストリート」という二色刷の地図をつくっています(図-1)。谷根千地区のイラストマップは、町会がつくったものをはじめ、いろいろあるんですが、本にスポットを当てたもの、本をテーマにつくったものはないねということで、本にまつわるスポットがちよつと目立つように、本のマーク付きになっております。いちばん真ん中に大きく書いてもらっているのがうちで、図書館、ブックカフェなども網羅しています。谷根千工房、朝倉彫塑館にも本棚があるので、本マークになっています。

そういう意味で、よそから散歩にみえた方が、あんなところにもちよつと



写真-18 参加者が段ボール箱の店を広げる「一箱古本市」。



図-3 「一箱古本市」のスタンプリーマップ。

雰囲気の良い本棚があつてゆつくり本が読めるんだよ、というような使い方もしてもらえればと思つています。

この地図をつくるのと並行して、春と秋、「一箱古本市」というのをやっています(写真-18、図-3)。インターネットを使って幅広く出品者を集め、段ボール箱の古本を持ち寄つていただいて、一日だけ、一箱だけの古本屋さんになつてもらうというイベントです。会場はこの地図のなかで一〇か所であつたり一五か所であつたりというふうなことで、べつに本のスポットには限らず、「ギャラリーKINGYO」のスペースもお借りしましたし、「谷根千工房」、「香隣舎」の隣の「はらっぱ」もお借りしました。

そういうふうな町中に本を売っているスポットを散在させて、地図とスタンプリーマップを企画して、本を探して歩く楽しみと同時に路地で散歩も楽しんでもらうというイベントになっています。

これは「不忍ブックストリート」とまず名乗つてしまったもの勝ちみたいなどころがありまして、そう自称してしまおうと考へて始めました。それによそから人がいつばい来てくれれば、書店も、古書店も、カフェやギャラリーも、こんなところにこんないいところがあるんだというのを地域内外、両方の人に広く知つていただけるのではないかなということでした。

手嶋 ありがとうございます。続いて扇谷さんから。

扇谷京子 「ギャラリーKINGYO」の扇谷です。

私は、なぜこのギャラリーをこの地域につくつたのかという質問にはちよつと答えられません。私はほかの仕事をしていまして、子どもと夫と引つ越してきたわけです。ギャラリーのことを考へてでなくて、その地理的な条件と、新しくつくられた町ではなく自然に出来上つた町が子どもを育てるのに好ましいと思つたからです。

ギャラリーを開いたのは二〇〇年です。普通、ギャラリーを開く方はア



ートに対する深い思いがあつて、アートにかかわる仕事としてギャラリーを開きます。私の場合は「盲蛇に怖じず」で、何も知らなかったから開けたんだと、いまになってしみじみ思っている次第なんです。

ほんとうに知った人もいないで越してきましたので、ギャラリーを開くにあたって、地域の中に入れていただく、またその場所で何か地域に還元できることはないか、ということ、私はソフトの部分で考えることができなかったので、うちの店の前を地域のポケットパーク的な場所にしたいと思いました。

店をご覧になった方にはその意味もわかりただけだと思うんですが、形は過去から継承したものなんです。不忍池の近くはいちばん谷底なので、とても水の出る場所で、みんな店の奥が上がっているんです。それをそのまま、ギャラリーの中と外を同じ扱いで引き込むような形にしました。表はどんなでも腰掛けてもらったり自由に使っていただくスペースにという気持ちでつくりました(写真19)。

それから、地域の差ということでもおもしろいのは、たとえば銀座のギャラリーでは絶対にできないような切り口で個展ができたりというところもあるんだと、あとで発見しました。

この地域にはとてもアートに造詣の深い方が多くて、ほんとうに恥ずかし



写真19 「ギャラリー-KINGYO」。

い思いをしています。作家さんと一緒に飲みに行く、私よりずっとアートのかわりがすばらしいママさんがおられたりする、そんなところやっております。

手嶋 ありがとうございます。お二人にはまた、町の反応などについても伺いしたいと思います。続いて山崎さん、一言。

家族全員でお店をやっていた時代から、たつた一人でやる時代へ



山崎範子 『谷中・根津・千駄木』という地域雑誌を出しています(写真20)。

一九八四年に発刊して今年で二四年目に入っていますが、笈入さんの「不忍ブックストリート」の地図に広告を出しているお店で、『谷根千』発刊時にあったお店は一軒もないんです。ほんとうに新しいこの二〇年の間にできたお店がこういうことに協賛して広告を出されているんだと、すごく感慨深いです。

私たちはいま、出来上った雑誌を三一八店に三か月に一回配達して歩いているんですね。そのお店が少しずつ入れ替わっていますので、二〇年続けて届けているところはだいぶ少なくなっています。最初に届け始めたときには商店会がまだものすごく機能していました。商店会を盛り立てている役員の方はそのまま町会の役目も担っている方が多くて、町会の仕事もなさりながら商店会の仕事もなさる、ほとんど店はやっていないという……(笑)。ただ、ご主人がお店にいらなくてもお店が機能していられた時代だった気がします。



写真20 発刊24年になる地域雑誌「谷中・根津・千駄木」。

たとえば私たちが最初に出会ったのは谷中の「乃池」というお寿司屋のご主人でした。その当時「乃池」は、谷中で寿司屋を始めて二〇年ぐらいでしたが、新参者ですということは何度も何度もおっしゃっていました。まだ二〇年ぐらいでは谷中の住民とはいえないんだけれども……と言いながら、「菊まつり」というお祭りを立ち上げたんですね。自分の店だけがよくなるのではなくて、町がよくなるようにということに賛同したお店の方たちや町会の方たちがとても多かったです。

それが二四年たつて、新しいお店の方たちが担って入ってきたかというところ、お店を張りながらそういうお祭りを担おうという人たちの数はとても少ない。私たちが本を配達して思うんですが、いま新しくできたお店は、お店をやっているが、昼日中、外でほかの仕事をやれるということがほとんどない。

それだけ小さいお店が多いことだし、手一杯でやっている。あるいはそれだけでは生業として成り立たない人たちが多くて、谷中でお店を開くためには本業をほかにもっている。そのせいで、あまり金儲けに走らなくて、そのことが町歩きするとほっとする、いいな、という気分させるお店にながっているのかな、というのが最近感じることですね。

以前は、家族全員がお店をやっている主人が外に出て、いまはそうじゃなくて、ほんとに一人がなさっているところが多いんだなということです。

手嶋 そうですね。あまり気がついていなかったですが、たしかにそういうところはありますね。

もう一回笹入さんに戻りますけれども、ブックストリートをやられたときの町の反応、エピソードがあれば。

ブックオフ上陸と不忍ブックストリートと

笹入 「不忍ブックストリート」も若輩者（若輩といながらも四〇歳になっちゃっている人もいますし、僕ももうすぐ四〇になります）が恐る恐る始めたんです。僕の感想ですが、地図をつくるということも印刷費が二〇万かかるので広告料をお願いしようとなつても、なんか笑っちゃうぐらい引つ込み

思案で、ほんとに広告が取れるのかな、なんて言いながらやっていたんです。そうしたら、そんなに安い広告料でもないんですが、意外とあっさり枠が埋まりまして、ちよつと嬉しい誤算ではありました。

新しいお店が多い、若いというお話がいまあったんですが、やっぱり新しいお店のほうが広告をとりやすいということもありました。同時に、われわれ四〇歳前後でこの近所に部屋を借りて住んでいるメンバーが多いんですが、その者たちが何らかの形で日常お世話になっているお店だったり、個人的なつながりで生まれてきた広告であり、掲載してあるスポットなんですね。

ですから、地元を代表するイベントであるというつもりは毛頭なくて、自分たちの現段階でのほんとうに等身大の地図をつくらせていただいたと思っています。

春の「一箱古本市」のほうは、人出がものすごくある根津神社の「つつじまつり」に合わせて毎年やっています。外から人をたくさん呼びたいというのがありました。「不忍ブックストリート」を始めるきっかけは、ブックストリートの地図の不忍通りのいちばん北の端っこにある「古書ほうろう」と千駄木駅との間に「BOOK・OFF」ができたことにあります。山崎さんから、新しいお店はあまり金儲けに走っていない、町の雰囲気ではっとするということとお話がありましたけれども、僕らからすると「BOOK・OFF」の原色の看板はちよつと……悪いという意味じゃないけれども異質な存在がつかいに千駄木にも上陸したなというのが、いま思えば大きなきっかけとありますね。

そのときに、「BOOK・OFF」にお客さんをもつていかれるだろうなという心配はもちろんありましたし、そうなるのであれば商売の常として違う方法で自分たちの店はそれなりにやっつけていこうという考えと、あとは外からのお客さんが来てくれたらいいという考えもあって、「不忍ブックストリート」を始めたのです。

本というテーマで貫かれていますので、たとえば神保町などの昔からの本の町に「不忍ブックストリート」も仲間に入れてくださいということとで宣伝すれば、神保町のほかにも中央線の真ん中へんであったり早稲田であったり、

そういうところからも長い目でみて人が来てくれるようになればな、と考えたのです。

手嶋 いま広告のほうは特に本屋さんだけでなく、それ以外も入っていますよね。これはいま年代的にも近い世代の関係でというのもありましたけれど、たぶん町が好きで谷中に店を出したというお店が多いような気はするんですが、その若い三〇代ぐらいの人たちのおつき合いはあるんですか。

箕入 お店をやっていると、お店の仕事の手一杯でそれ以外のことがなかなかできないという話がありましたけれど、まさにそれで、横のつながりがありますか、これを始める前は、「古書ほうろう」とも、「オヨヨ書林」という古本屋さんとも僕はそれほど親しくなかったです。これをきっかけにいろいろ

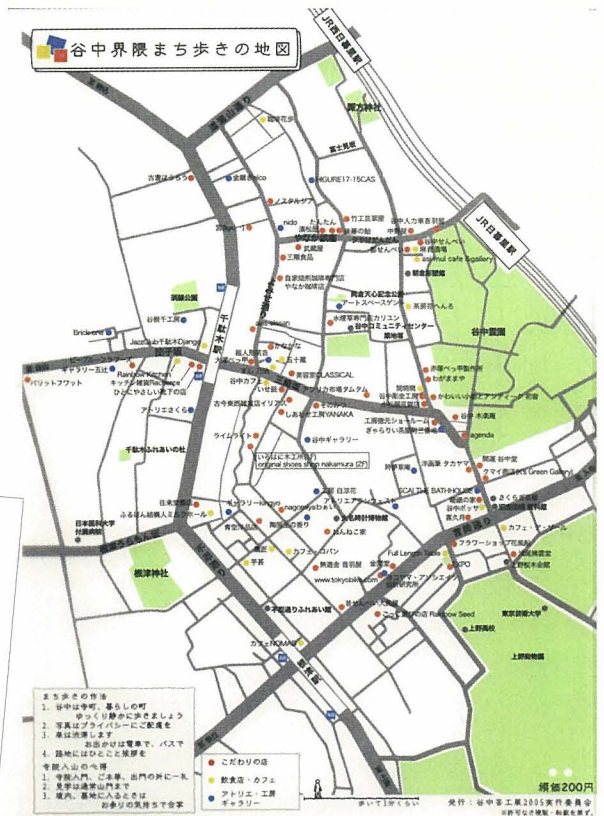


図-4 「谷中芸工展」のパンフとマップ。

駅の間に「books & cafe BOUSINGO」というところがあるんですが、月に一度そこに集まって自由にやりましょう、というようなことをやり始めたところなんです。だからまだまだこれから、始まったばかりという感じはしています。

手嶋 扇谷さんのほうでも、そういうギャラリー関係でのつながりというのは何かありますか。

ギャラリーがかたまっているのはいいこと

扇谷 私もちんぷんかんぷんで始めたんですが、まずは谷中芸工展とart houseに参加させていただくということで、皆さんに出会うきっかけになりました。どちらも町歩きのできる地図をつくっています(図-4,5)。

ギャラリーは、見に来てくださる方が一軒だけのために遠いところから来るのはちょっとおっくうですよね。それで、地域にいくつもあることはとてもいいことというところで、それはお米屋さんとかお豆腐屋さんとはちょっと違うと思います。



写真-21 「谷中芸工展2007」の受付、本部となる「香隣舎」。

るお話しすることができるようになったので、とてもよかったです。素朴に思っています。

もう少し自由に、緩やかなサークルのようなものであるとするならば、メンバーも本の仕事に限らず、もつといろんな人が出たり入ったり、あるいは地元で仕事をしているかどうかにもこだわらなくても、興味をもった人は誰でも来てくれるようになったほうが、新しいアイデアも生まれてくるかもしれません。

不忍通り沿いの往来堂と千駄木

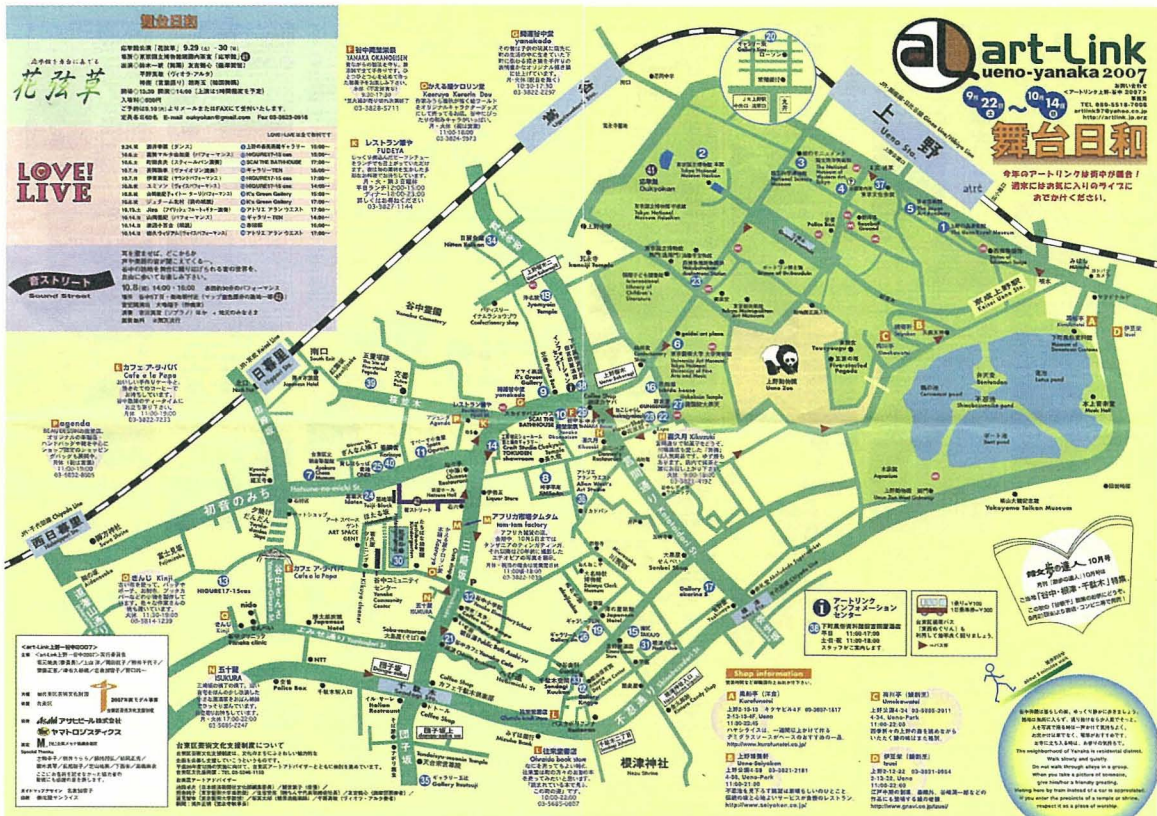


図-5 「Art-Link 上野一谷中」のマップ。

「アートフォーラム谷中」「スカイ・ザ・バスハウス」「すぺーす小倉屋」などは日暮里から上野桜木にかけての動線にあつて、うちはちよつと離れて寂しかったんですね。いまは根津のほうにもいくつかできまして、真後ろに「千駄木空間」、「ギャラリーT E N」は澤の屋旅館の前、「Leplotto」も近いです。「ギャラリー人」は本格的な企画ギャラリーで、いつもよい展示をなさっていて心強く思っています。この二月には播磨みどりさんの展示会があるんですが、それは「ギャラリー人」の企画展なんです。うちは場所を借りていただいて「ジアンネックス」になってしまふんですけれども、そのときに同時にうちの二階でも、この間B T賞をとった磯谷権太郎さんの展示をします。そういうことを嬉しくできるといふのはありがたいことだと思っています。

うちで秋山祐徳太子さんが「プリキ男と招き男」というテーマ展をしたときに、笈入さんの往来堂書店で秋山さんの本のコーナーをつくってくださった、秋山さんもそちらに嬉しくて挨拶にいらつしやるとか、そういう交流ができたのを感謝しています。

笈入 扇谷さんに秋山さんの『プリキ男』（晶文社刊）を選んでいただきました。「ギャラリーK I N G Y Oさん」が選んだ本」という帯を巻きました。その秋山祐徳太子さんの「プリキ男」の展示のたしか二、三か月前だったんですね。予告としてちょうどいいなということで、展示の予告と往来堂書店からギャラリーK I N G Y Oさんへの路地の地図が載っているというふうにごせてもらいました。

扇谷 秋山さんも、往来堂にいづくようにということをご皆さんにいつてくれて、そんなこんなで……。

手嶋 山崎さんが聞かれる話は何かありますか。

路地裏にしか開店できないことが好結果に

山崎 いま谷中、千駄木、根津あたりでお店を出したい、住みたいけれど、高いために、金銭的に考えて路地になるといふことはありますね。で、結果

的に路地でよかったというのとても聞きます。

「ミルクホール」なんかは、あそこはお店がほとんど見えませんね。探し探しかないと行き着けない。よくああいうところでやるな、と思うんですけど(笑)、倉庫として不動産屋に出ていたのを家賃がびったりということでも借りたそうです。ずいぶん口コミで広がって、ご商売になっているかどうかまでは聞いていないですが、それなりにやめないでなさっています。ここじゃないと借りられないということでも表通りではないけれど、というところはとても多いかなと思います。

外に出られた方が自分の土地に戻ってきてて商売をするというのはいくつかありますね。池之端にある花屋とカフェと一緒にやっている「ブランシェール」も、実家があったところでも素敵なお店をしていますし、「筆や」というレストランは、もともと筆屋さんの息子さん。谷中墓地の入り口ですけど、とてもいいランドマークになるきれいなお店をしてくださっています。そういうのがいくつかあるといちはん嬉しいですね。やめようと思っていたけど継ぎました、というお店をみるのとても嬉しいですね。

一時期、女性一人でやっている花屋がとても増えた時期があつて、聞くとおよ八〇〇万円あればお店が出せる。花は資金が安くて済むのだそうです。在庫としての費用が少ないのかもしれない。そういう形で思い切つて起業するという若い女性も多いです。

手嶋 女性がお店を開くのはけっこう多いですね。「かなかな」とか「ガルボ」とか。

山崎 思い切りがいいんじゃないですかね(笑)。男性の人は名前入りの判子をつくるとか看板をつくるか凝りますけど(笑)、女の人は手書きから始めます。領収書を手書きで切つてくれたり、ほんとうに何も用意せずに始まります。私たちもそうでしたけど(笑)。

手嶋 最近では、旦那さんと一緒にやっているというパターンも増えていきますね。

また、最近お店を開いた人から、不動産屋さんの中には結構わかってくれ

る人がいて、「自分たちはそんなにきれいなところじゃなくてよくて、できれば広くて改造できるようなところを探しているんだけど」というと、そういう店をうまく探してきてくれるという話を聞きました。

同じ業種のお店が寄ることもありますよね。それは大家さんが協力してくれるということだと思えます。「ギャラリー人」も大家の山岡さんが理解ある方で、隣もイメージの合うお店が入っているし、「indo」と「マキシム」も二軒ものづくりのお店が同じ家作に入っています。そういうことも町の受け入れ体制として面白いですね。

山崎 ご近所の人も、ギャラリーとかカフェがいくつかできると、明るくなる、防犯になったと喜んでますね。これが焼鳥屋さんとなると難しいかもしれないですけど(笑)。いままで暗かったところに電気がつく。商店にいちばん期待したいのは、やっぱり夜明るくしてほしい、なるべく遅くまでやってほしい、電気をつけておいてほしいというのは感じます。それも煌煌としたものじゃなくて、やさしい感じでつけておいてほしいなと思います。

手嶋 新しくお店を始めた方は商売をやるのが手一杯でなかなか町のことにかわりにくい、また、昔は町会の仕事で町へ出ているときは家族がお店をやつてくれていた、という話がありました。

会場におられる松田さんは町会長をやられて、「スカイ・ザ・バスハウス」の家作の持ち主でもあり、町の事に積極的に活動されている方なので、新しくできるお店に期待するところなど、お話しいただければありがたいです。

谷中のお店は企業ではなく家業

松田 檀雄 (谷中坂町町会長・谷中町づくり協議会環境部会長)

まず谷中の商売の移り変わりを、私の個人の事例をあげると非常にわかりやすいのかなという感じがします。

私の家は東京ではいちばん古かった銭湯でして、私は七代

目になります。学校を出て結婚するまで宣伝の仕事をやっており、銭湯がそ



ろそろ斜陽になった時代に、銭湯を継ぎました。通りに面した店の一角でスナックを開店しました。非常に珍しかったもので、銭湯の一〇分の一以下の面積だったんですが同じぐらいの売上げを上げて、銭湯とスナックと両方掛け持ちで行ったり来たりという感じでやっておりました。

昭和五〇年代になりますと、いよいよ銭湯が非常に厳しい状況になり、ビルに建て替え、一階でパンの「リトルマーメイド」を東京でも三番目ぐらいの早さで開きました。何故ということですが、私は町に自分の好きな形態の店ができるということを経験したことで、まずパン屋をやったのです。実は銭湯を坂の上と下に二軒やっておりましたので、もう一軒のほうもやめることにして、そのときに谷中学校、手嶋さんたちにお世話になったんですが、「スカイ・ザ・バスハウス」(写真122)というギャラリーにしました。これもうちの親父が「谷中にギャラリーがほしいな」というのを前から言っておりましたもので、もうそのときは亡くなっていましたけれども、多少親孝行のつもりでやらせていただきました。

「リトルマーメイド」は三年前にやめました。かつては新しい業態は三〇年もつといわれていたのですが、いまはそれは非常にむずかしいことです。で、限界を感じまして、「もへい」という居酒屋をテナントとして誘致しています。

店は、できれば一つの業態で何代も続けられることが望ましいのですが、社会の変化が非常に激しくなっていますので、なかなか同じ業態でいくことはむずかしい。谷根千にいろいろ新しい店が出来てきたことは非常に喜ばしいことだと思いますね。

特に谷根千地域のお店の特徴だと思いますが、面積的にも大きな店がない



写真122 銭湯の建物をそっくりギャラリーにした「スカイ・ザ・バスハウス」。

ので、店主の顔がみえる店、という感じがすくくしますね。うちの親父も、「谷中の店は企業ではなくて家業ということが大事なんだ」ということをよく言っておりました。谷中のいま新しく出来てくる店はそういう傾向があつて非常にいいことだと思います。

ずっと谷中にあると、逆に谷中の良さが意外にわかりにくいんですね。具体的はどういうところが新しく来た方に魅力なのかということもすくく知りたいです。私は谷中に生まれて育ちましたけれど、結婚まではほとんど谷中には関心もなかったし、ちよつと外へいくにもやたら声を掛けられるのでうつとうしくていやだなと思つていた時期もあります(笑)。

だから、なんでも表と裏があつて、いい面と悪い面とが当然あると思うんですが、町会とかかわり合いも、ほんとうはむずかしいことだなとも思います。よそから来た方がたぶんすくく入りにくいと思います。こちらが門戸を開いていないという意味ではないですが、接点がない。町会もできるだけ新しいコミュニティの形になってきてはいませんが、いま町会はむずかしくなっていますね。特に、町会の大きな部分を占めている官公庁とか学校とのつき合いがほとんどウィークデーの昼間なんです。だから商売をやつていられる方はなかなか参加できないと思います。僕も三年前までは本格的な町会の活動はそんなにできませんでした。

それよりも、新しくお店を出された方の横のコミュニケーションをやつているところに門戸を開いていただいて、町会のなかでも興味のある人たちがそこへ飛び込んでいって両方のコミュニケーションをとるといふ形、お互いに歩み寄ることができればうまくいくのかなという気がしています。

手嶋 僕自身ももう二三年ほど谷中にいますけれど、町会の活動というのは実はなかなかできていないです。もうほんとにすごい密度で町会活動があつて、その分、頼りになる町会というんですか、住んでいるとすくく帰属感をもてるということはあるんですけれど。

続いてもうひとつ、上野桜木で「ポップ・イン・フォト」をやっている関さんから、町の中でお店を開きつついろいろ活動をやっているその苦労も

含め、お話しただけだと思えます。

地域からしてもらったことを、いまお返ししている

関香代子（ポップ・イン・フォト） 小さな店なんです、DPEの他にデジタル画像処理と印刷をやっています。若い子がみんな寿退社をしまして、ジジババ三人で、先がないなと思いつつ、それでもここがいいと言つて遠くから来てくださる方がいらつしやるとやめるにやめられず、食えないね、といながらやっております（笑）。



最初は専業主婦でごく当たり前のサラリーマンの女房をやつていて、そこには物を見る目を養う機会はあまりなかったように思います。子育てでいろんな場面に直面しながら、自分が何をやらなければいけないのか、少しずつ学びながらきたんですが、ちょうど谷中芸工展が始まったところに、うちの娘が芸大を受験することになり、芸工展を育ててくださった前田さんから「受験生も応援してあげよう」ということで、作品を出しなさいよ。そういうことから谷中学校に少しずつ近づいていったように思います。

で、娘が世話になったからには何か手伝わねばと、次の年に会議に出たらいつの間にかスタッフになっていて、その後ずっといろんなかわりをもつて、町づくりや環境のことをいろいろ学ばせていただきました。

私が地域の中で細々と活動を始めたのは、仕事を始めてしばらくのこと、店を出て自宅勝手口のある路地に入ったときに、そこは色がなく、グレー一色にしかみえなくて、「私はどういうところに住んでいるだろう。ここは人間が住むところなのかな」と思ったんです。ちょっと恐怖にも近いような……。ブロック塀とコンクリートの路地と古びた長屋。いまは古びた長屋が味わいがあるとかいろいろいますが、朽ちていく骨のようにみえたんです。

そんななかで、何かしなければと思えました。花の種をまいたプランターを勝手に人様の家の前に持つていき、「すいません、私が水やりががんばりますけど、乾いているなと思つたらちよつとあげていただけますか」なんてこと

から始めて、自分ができる範囲で楽しい場所にした、輝いている場所にしたと思えました。

さつき話に出した前田さんが、「楽しいリサイクル」「ゴミを減らそう」といつてフリーマーケットをよく開いてくださったんですが、あなたもやりなさいといわれて、始めて一年半ぐらいして阪神・淡路の震災、それでまた何かしなきゃと思つて募金活動。その募金活動するためにフリーマーケットをする。そういうことで、この一〇年ちよつと続いています。

長屋に住んでいるアメリカ人に二歳ぐらいのチビちゃんがいて、パパが「僕が楽しかったことは子どもにも体験させたい」とおっしゃるので、ハロウィンを始めました（写真123）。最初は二人でした。いまは六〇人を超えて、もう今年は路地では写真が撮れなくて、近くの公園にいつてみんなの写真を撮りました。それも四回ぐらいに分けないと撮れないような有様で、最近、大人も喜んで参加してくださっています（笑）。

もう私の手には負えない状況になっているので、ちよつと遊びをするための組織をつくろうかなと思つていますが、「手伝います」という人はたくさんいても、「考えます」という人、「準備します」という人がいなくて……。当日手伝うだけではなんの役にも立たないんですが、いまそういう状況です。少しずつ私が後ろへ退いて、いままでやってきた活動が良しと受け入れられるならば、それを続けていくために次世代を育てていきたいと思つています。私のこういう生き方は、要するに自分が楽しいからやっていると感じて、そのやつていることが他人様に何かお役に立つのであればということろは少しはあります。

町会の役員をさせていただいて、仕事をして、孫二人のおばあちゃんもやらなきゃいけないし（笑）、とにかく手一杯、目一杯。夫からは、鉄砲玉でどこへいかわからないし、何をしているかわからないし、いつ帰ってくるか



写真123 ハロウィン。

もわからない、とうとう携帯電話をもたされてしまつて残念でしょうがないですけれど、それくらいみんながんばつて町会のことをやっています。

でもほかの地域から見ると、谷中はとても町会がしつかりしていてうらやましい、とおっしゃる方は多いです。当たり前だよ、働いているもの、と思います。さつき松田さんが、この地域は入りにくいかもしれないとおっしゃっていましたけれど、上野桜木は特にそうで、住んで五〇年なんてまだよそ者といわれるぐらいです。嫁はせいぜい二〇年、三〇年で町会に参加するわけですから、よそ者といわれてもしょうがないと思いますが、いまは一〇〇年続いているような顔をしてやっています(笑)。

自分がいま地域のために何ができるかということ、余裕があれば人に優しく、余裕がなくなつたら助けてね、という関係を常につくっていくということが基本なのかなと思います。

私はいま他人様の鍵を三軒分お預かりしています。鍵を忘れちゃつたとか入るための鍵とは意味の違いを預かり方をしています。これはとても重いんです。ほんとに家の中を全部みちゃうこともありますし、頼まれれば夜中に飛び出さなきゃいけないこともありますし、そんな簡単なことではありません。でも預かつたからにはやらなきゃと思つて、倒れるまでたぶんやるんだろうと思います。私はこの地域からいろんなことを教えてもらいましたので、いまお返ししているところだと思います。

谷中六丁目はちよつと危ない交差点なので、小学生の見送りももちろんですけれど、勝手に立つて、いろんな方と「おはようございます」「いつてらっしゃい」とやっています。きつとウザイと思われていると思います(笑)。でも、「私、来週結婚するんでもうここ通りません」という報告をしてくれたお嬢さんとか、孫が生まれて三か月休んだら、「心配してました」と声をかけてくださった方があつて、「しめしめ」「うれしいな」と思いながら、とりあえず健康でいられる間は皆さんのかかわりを少しずつ保つて、それを保つことによつて私はまた健康でいられるような気がします。「お母さんの顔を見ないと一日が始まりません」という認知症のオジイサンは、一日何度もそ

う言つてお辞儀を深々としてくださる。それだけ思つてくださるということ。はほんとにありがたいと思つて、一緒に九〇度のお辞儀をしながらおつき合ひさせていただいています。

手嶋 いろんなお話を伺えました。きょう会場に来ていただいているのは地元の方々だけではありませんので、外からみた谷中、きょう話を聞いてどういう印象をもたれたか、そういう話が伺えればと思います。

ご商売をされている方はいらつしやいますか? 横山さんはコミュニティカフェをやられていると思いますが。

子育てのためにニュータウンへ移つたのだが

横山裕幸(㈱横山環境計画事務所) 多摩ニュータウンの小さな商店街でコミュニティカフェ、コミュニティレストランのまねごとのようなことと、それに併設して設計事務所をやっています。

この谷根千の地区とは対照的なニュータウンで日ごろ生活しているわけで、ニュータウンの特質でみんな閉じて生活している、なかなかつながりがないものから、関さんのお話とか松田さんのお話、若い方がどんどん入つてくるけれども実際に地域のコアになつていく方がふえているわけではないというお話を聞いて、そういう意味では、どの地域でもある意味限られた人たちが悪戦苦闘しているなという印象を受けました。

われわれも何かやろうということであるイベントをしたりお祭りをしたりするんですが、なかなか谷中芸工展の一〇年というスパンで続けてはいけません。一年やつては休んだり、単発になつてしまつたりということで、非常に粘り強く活動されているので、底力が違うなと考えさせられました。

あともう一つシヨックだったのは、扇谷さんが「新しい町では子どもを育てないと決めた」と(笑)。私は実は子どもが生まれたときには都心にいたんですが、そのときちよつと怖い思いをしたものですから、子どもを育てていくには安全な環境でなければという思いで、多摩ニュータウンに引越した



という体験があります。

それで安心して子育てをしてきたつもりなんです。最近「やっぱりちょっと違うな」という思いが強くなってきたところに、さっきの扇谷さんのお話を聞いて、非常にショックを受けました。

扇谷 ニュータウンは年代の持ち上がりになるじゃないですか。私は多摩の聖蹟桜ヶ丘に住んでいたんですけど、近くのニュータウンに住んだ友人は、若い人ばかりで活気があっていいと言っていました。でも私は、お年寄りだとか子どもだとか混ざっているほうが子どもにいいかなと思って。でも、いい性格に育ちませんでしたよね(笑)。

横山 べつにうちももう成人して、悪い子どもには育たなかったんですけども(笑)。でも、いま考えてみるといろんなタイプの人たちがいる、非常に多様なところはよかったです。

高山登(ポラス暮し科学研究所) きょう知ったのは、商店街に住んでいる方のコミュニケーションに大変重要なものになっていくこと。商店街の存在というのは顔の見える、経営者のみえるという、あれはたいへんいい言葉でした。それはいまの時代に忘れていく大事なことです。

それで、考えないといけないと思ったのは自治会ですね。私も五〇〇世帯のマンションにいますけれど、自治会に入らないとか、けっこういろいろ問題があります。そういう意味で、それなりの町づくりをしていくということでは、建物のほうの保存とか改修ということもあるでしょうし、きょうのようなお話もあるでしょうし、町内会とかも……。そういうものがいろいろオーバーラップされて、一つでも二つでも活動が重層的に重なっているようなところが、住みよいといえるのかなと。それが数少なくなってしまうと、東京砂漠になってしまうのかなと思いました。

そういう意味でこの谷中から一ついえるのは、商店会ということがきょうのキーワード、切り口ですけれども、それぞれの地域特性によって、どんな切り口からそこを地域にもっていくのかみたいなことを考えさせられたよう



な感じがします。

日本の住まい方を知るには谷中を知るのがいい

中村文美(もば建築文化研究所) 「たいとう歴史都市研究会」という、町内会の皆さん、谷中学校の方、そういう皆さんの活動の延長線上に生まれたNPOをやっています。

どうしてそういう会をつくったかといいますと、関さんの住まわれているすぐ近くの上野桜木に築一〇〇年の家があり、空き家になっていたんです。明治四〇年に建てられた元・布問屋さんの家で、私は芸大に通いながら文化財建造物の修復を勉強していたんですけども、せっかく芸大に通っているので何か自分が谷中に貢献したいと思いついて、そこに住むことで一つ家が守られるのだとしたらそれはすごく近道というか、自分もそういう古い建物の何がいいのか大変なのかということをもっと学びたい、いろんなことが重なってお借りすることができたんです。



写真—24 大正時代の「間問間」をNPOで管理・活用している。

それはただ個人的に借りるということではなくて団体をつくらうということとで、そういう古い建物で朽ちて使われなくなってしまうものというのは、ここだけではなくたくさんあるのだから、そういうものにも考えを広めていこうということをつくったNPOです。

活動としては、「市田邸」というその建物と、「間問間(さんけんま)」(写真—24)という大正時代に建った町家の建物の二つを定期借家でお借りしながら管理をしています。「市田邸」の場合、イベントとか習い事の場所として使っていて、「間問間」のほうはカフェとかお

稽古会場として使っています。古い建物の調査、実測して図面を描いたり、上野公園周りの勉強をしようということでも二か月に一回ぐらい勉強会をしたりというような活動をしています(「市田邸」については、53〜57頁参照)。

私は生まれが北海道で、東京に出てきて独り暮らしのマンションで、こんなところには一生住めないなと思いつながら三年ぐらい過ごしたんですね。谷中には町歩きには来たことはあつて、かかわりだすと抜け出せなくなるような、濃そうな場所だなと思つていたので(笑)、ちよつと住むぐらいで一軒の建物が残るならというかわりを始めたとなん、ドツポにはまったというところがあります(笑)。谷中に住むまでは人間対人間で成り立っている場所だと思つていたんですが、市田邸に住み始めて、その間にすごく自然があるということに気づきました。地形的にもそうですし、町を守っているとか家を守っているというような野性的感覚のなかで人がつながっているという印象があるんです。私も古い建物に住みながら、ネズミやシロアリなど戦いながら住むことに喜びを覚えてしまいました(笑)。

手嶋 若い人が谷中の魅力をどういうところに感じているかというお話だったかと思ひます。

中村 各大学、建築を勉強すると、なぜか谷中歩きは絶対にカリキュラムに入るようになっておと思ひますが、建築側だとそういう日本の住まい方を勉強するには谷中をみておかなければというふうに通じているようで……。谷中芸工展も芸大生の参加よりも、芸大とは関係ない、ものづくりをしている人の参加が多いですよ。芸大生はやりたい放題だけれども、そういう方のほうが谷中に入ってくるマナーがいいような気がして(笑)、すごくびっくりしています。

谷中に戻るとほっこり安心する

鞍懸章乃 (株)文化財保存計画協会)

私は、同じく市田邸に大学院に入った当初から昨年春まで住んでおりました。若い方が谷中に入ってきたときにどういったことを感じたりす



るのかという話ですが、やっぱり人がおもしろすぎるといふことですね。私も札幌出身で、大学を卒業するまでずっとあちらに住んでいたんですけど、こちらに来てまず思ったのが、しばらく住んでいると「こんな人が住んでいる」というのがなんかわかるんですね。

手嶋 よそれから来て、町の中でなかなか出会いというのはできないと思うんですけど。どういう接点になっていますか。

鞍懸 やはり市田邸という媒体、拠点があつて、そこにいろんなおもしろい方が集まってくる環境に住まわせてもらったというのがすごく大きかったと思うんです。そういうところからつながってきた人間関係で、近所を歩いているときに声をかけてもらつたり、この人どつかで会つたことあるとちよつと話してみたら、実は芸工展のイベントで会つた人だったり、おもしろい町だな、住んでいる人の顔がみえる町だなというのをすごく感じています。

それで、たまに実家に帰省したりするとなんかつまらないですね(笑)。札幌はすごく平べったい街で碁盤の目で整つていて、普通の感覚で考えれば住みやすいきれいな街なんですけど、どうも谷中に戻つてくるとほっこり安心するような、ふるさとはあつちのはずなのになんで私はここにいるのが安心するのかないつも考えちゃうんです。どうもこの引力に逆らえなくて千駄木に住んで五年くらいになります。

手嶋 続いて、いま芸工展の牽引役になっている牧住さん。谷中へかかわつた動機というか、そういうものも含めて。

表参道・六本木より谷中

牧住敏幸 (貸はらっぱ音地) 谷中芸工展の実行委員をさせ

ていただいています。もう一つ「貸はらっぱ音地」という、元・谷中学校の隣の「はらっぱ」を屋外ギャラリーという名前前で使ってもらつたという活動もしています。

私の谷中へのかかわりというのは、私も建築出身で町歩きをしたところから始まっています。少しずつ町にかかわりたいなと思いつつも、やはり入り



込みづらいというか、一度入ったら抜けられないんじゃないかみたいなどころがあつて……(笑)。

この谷中地域というのは手嶋さんが始めた「谷中学校」と、山崎さんたちが始めた『谷根干』という雑誌。この地域に蒔かれた二つの種がじわじわと育つて、いま往来堂のすぐそばに住んでいるんですけれども、なんであんなところで本屋さん成り立つんだろな、いろんなところから来るんだろな、というのが不思議だったんですけれども、蒔かれた種が重層的に何となくつながりながら、だけど個別にいろんな形でやっているとところ谷中のおもしろさになっているのかなと思います。

先ほど松田さんがおっしゃったように、ほんとに町が動いているというのを芸工展をやつて感じていました、たとえば昨年、「朝日湯」の隣に「TAY TSUJIMURA」というレニー・クラブिटツの指輪をデザインしていた、いままでニューヨークにいた人が谷中に入つてきたんですけれども、「僕は表参道あたりに店を構えようと思ったんだけど、この町をみて、この町でやっていきたいというふうに思った」という……。またそういう新しい谷中が好きな人が入つてきて、次の流れがこれからまた起きてくるのかなという、そういうことを感じています。

手嶋 きょうが谷中は初めてという方はいらつしやるでしょうか。

高齢者シェアハウスには格好の土地

海老塚良吉 (都市再生機構都市住宅技術研究所) ここは高齢者もけっこう多そうな感じがするんですけども、若い人もほとんど入つてきていますね。人口は増えているんですか、減っているんですか。



最初に見た谷中銀座に日常的な品物がいっぱい溢れていて、観光地的な感じでなくかなり普通の町の人が買いに来ているのでびっくりしたんです。**手嶋** そんな急激ではないですが、若干増えている状況にあります。だいたい五〇〇〇世帯一万人ですね。

海老塚 木造密集地域でもあつて、道路付きが悪いのか、古い住宅が改修されないで残っている雰囲気がありました。それがいいということもあるんですけども、高齢者が住んでいるためにあまり建て替えができないとみたほうがいいんでしょうね。

手嶋 それは一つの要素としてあるかもしれないです。具体的にかかわった例ですが、高齢なので、自分が生きている間はどうかもつからいまさら建て替えるのは嫌だというお宅がありました。だからそういう点はあるかと思えます。

海老塚 ここへ入りがつている人もけっこういるので、住宅の改修をうまくやつてあげると、もつと魅力的になるかもしれないですね。

私は本郷五丁目、東大前の裏の、昔は木造密集地域だったところで老夫婦に頼まれて三五坪の敷地の建て替えをしましたが、上に四人の若者が住めるシェアードハウジングを企画して、一年半ほど前から〇L三人と四〇歳の男性が住んでいます。かなり人気があつて二〇人ぐらいの応募がありました。ワンルームで寂しいからこういうシェアードハウジングに住みたかったという人が入つてくれて、フォルクスの田中さんが設計してくれたんですが、喜ばれました。

そんな形で、いい企画を立てて、賃料が平米四〇〇〇円ぐらいであればほとんど自己資金なしでも建て替えできると思います。誰かそういう専門家ができて、建て替えをうまく進めてあげるといいかもしれないですね。

園原一代 (NPO法人ハートウォーミング・ハウス) 私は



下北沢でNPOでシェアハウスをやっています。**世田谷**もすごく古い建物が残っていて、空き家が多いんです。いまの世田谷区の一帯の平均人数が1・九八人という低さに達していますから、一軒家をなかなか人が借りないという現実があります。そういうことで、私自身は一軒家を借りて若者と四人で暮らしています。それを二軒やっていると、リビングを地域の人に開放するということをやっています、毎月一回「カレーの日」というのをつくって

地域の人、住民の人とやっています。

いま私のところにも外国の人が住むようになって、比較的短期で一、二年住み、なかなか溶け込めないまま国に帰るといったようなことがあるので、そういうふうには地域の住民とも暮らし合うこと、地域とつながっていくこと、帰属感、そこが自分の家と思えるような、そういう暮らし方を提供するということも、その地域に活性を促すことであるのかなと思っています。

手嶋 谷中でシェアードハウスは可能性はありそうですね。

園原 十分ありますね。町そのものもとても古い町ですし、たぶん古い一軒家がたくさんあるのではないかと思いますから、そうすると、家と家とつながり合うともっと活性化するし……。やっぱり独りで暮らしていると寂しいという人もたくさんいるわけですね。そういうことの促しもあるかなと思います。魅力的な町だなと思います。

扇谷 シェアードハウスというのはどんなものですか？

園原 大きな屋根の中に他人と暮らしているという形です。私とそれ以外に他人が三人。それも日本人だけじゃなくて外国の方、それからネコが二匹いるんですけど、そんなふうには疑似家族みたいな形です。

扇谷 ご飯も一緒に食べるんですか。

園原 いいえ。たまたま一緒に食べるときはあります。トイレとかお風呂とかはみんな共用です。

手嶋 昔、貸間と言っていたものとはほぼ同じだと考えてください。

園原 みんなでルールを決めて……。私は掃除のおばさんじゃないといって、みんなで掃除し合うということをやっています。

手嶋 そういう視点から、町の中のお店のあり方というのは何か考えられることはありますか？

園原 大阪に空堀商店街というのがあります。そこは古い建物の風合いをそのまま生かしながら店舗にしています。で、それがまたどういうわけか、これからやっというこうという若い人たちにも、店舗や企業にもとても人気で、その空堀地区で中心となっている設計事務所の方が大きな家を小さくしながら

ら店舗にしているんですね。それもとてもデザイン性の高いお店になっています。

そういうふうには、大きな建物を小分けにするのかもしれないし、側だけというか、設備はやっぱりそれなりにしないといけないので、側だけはそのまますかしながら、それこそ一坪とか二坪くらい、魅力的な、町の風合いもそのまま残しながらやれるのではないかなと思います。

手嶋 店舗のほうもシェアードだということですね。

園原 はい。十分考えられます。

海老塚 若者はけっこう外国へ行って慣れているから、若者向けのシェアードハウジングは簡単にできるんですが、できれば高齢者と高齢者、古い家でルームシェアをやっていたら展覧していい。そのときにお店が大事なんです。なかなか食事を一人でつくるのは大変ですから、安く食事を提供してくれたり……。で、問題はマッチングなんですね。お年寄りにはけっこうるさいですから、もし地域の人がそのお年寄りの独り住まいの状況なんかをよく知っていてあげて、このおばあさんとこのおばあさんだったら合うのじゃないかということでも組み合わせをしてあげる。場合によってはお年寄りだけではちょっと心配なので、ここに住みたい、けどなかなか家賃が払えない、そういう若い人たちの情報もどこかへプールしておいて、NPOでルームシェアの組み合わせをする。

手嶋 お店をやっている人たちが、そういうネットワークをつくるときの組み合わせのキーになっていただけると、とても可能性が広がる。実は私はいま、多摩ニュータウンの永山で、公団の賃貸住宅でルームシェアでグループホーム的なことを企画しているんです。そういうことを「福祉亭」という四五〇円で昼食を提供しているNPOにちょっと頼みかけているんです。谷中地区はかなり店舗の層が厚そうなので、この地区で日本であまりやられていないシェアードハウジングができそうな感じがとてもします。ひとがんばりしていただきたいと思っています。

手嶋 町の中で、お店がある種、町を支える状態にでき上っていると見える

と思うんですが、それが今後どうやって持続していくかも今回の大きなテーマなのかなと思いますね。

坂部明浩（ワーカーズ・コープ） 消費者側の生協と違って、仕事をつくりながら、みんなで出資しながら、というワーカーズ・コープをやっています。根津交流館の仕事を委託を受けていますが、そのほか主に公園関係の清掃の管理を任せられ、障害をもっていらっしゃる方を含めてみんなで支え合ってやっていくような仕事をしています。



シェアードハウジングの話が出たのでぴんときたんですが、僕は谷中生まれで、しばらく十条に一軒家を借り切って視覚障害の連中と五、六人で住んでいました。彼らはマッサージができるので、近くのお年寄りがみんな来てくれたり、逆に一人が床屋さんと呼んで五人一緒に髪を切ってもらったりとか、そういうことで一〇年もやっている商店街もみんな知っていて声をかけてくれるんですよ。いまその仲間は十条商店街でマッサージの店を開いています。そういうなかにプロボクサーの卵がいたんです。なんでいるのかというと、やっぱりすごい疲れるのでマッサージしてほしいと(笑)。逆に彼が後樂園で試合をやるときにはみんなで応援しにいつて、すごくおもしろい体験ができたんですね。

そういうふうに、いろんな方が住むということがおもしろいのじゃないかなと思います。

山崎 この二十何年間に、こういうものがあつたらいいなというお店とか建物とかを思いつくことは何度もありました。いまのような介護保険などなかったときには、肩もみハウスをやりながら聞き書きをやれば向こうからお金をもらって取材ができるなどか(笑)、子どもを育てながらのときは、食堂の上にあパートがあつたら子どもにご飯をつくらなくてもいい、お弁当もつくってもらえる、これはもう共稼ぎにはいいし母子家庭にもいいな思ったり、私たちは年に一回映画会をやっているんですけど、そういうことを三〇年以上前にやっていった人が品川区にいました。「勇者の園」という、高齢者の家に

若者が住み込むというのを事業にしていたんですね。それは大がかりなものでしたけど、同じところに武蔵野市で二〇〇万円もらえれば高齢者の最終期でめんどろみますというのを行政でやっていて、片や民間の若い人がやっていたのは六〇〇万円ぐらいから「あなたの息子になります」みたいな感じでめんどろみちやう(笑)。それが最終的に一〇年続いているので詐欺ではないと思うんですけど、それはすごくおもしろい、いまだつたらもつとまうくつたかもしれないぐらい。

ただ、こんなに部屋が余っているのにどうして貸さないの?というお家は千駄木にも谷中にも多いです。やっぱり人に入られたくない。使つていいよというその一言がなかなか出せない。身近な人が無料で使うのはいいけれども。土地をもっている方や住んでいる方の意識改革というのはほんとにむずかしい。住みたい人はいても、なかなか貸してくれるところがないと思えました。

片山和俊（東京芸大教授） さつき山崎さんから「新しい担い手は増えたけれども、これからの担い手になるかどうか」というお話がありました。山崎さんが二〇年『谷根千』をやつてこられて、住宅地としての性格がかなり変わってきたのではないかと思うのです。

地域にお金を落とす

山崎 一言でどう話していいかわからないですけど、この間にすごく町がスマートになったと思います。とにかくセンスがよくなりました。さつきの表参道をやめて谷中に店をなんて、驚いちゃいますが、最近、上野桜木に「群現堂」ができたんです。これは石見銀山のブランドなんですけど、この間まで六本木にあつたお店をやめて上野桜木……。商店街がいつまでも続いてほしいと思いますけど、たとえば十条や、荒川区、足立区など商店街がまだ生き生きしているところと比べてみると、日常で使う商店街からちよつとずつ、ほんとに緩やかですけど、もう移行しているなと思います。





写真-24 日常の買い物のお店が軒を並べる谷中銀座。不忍通り側から夕焼だんだん方向を見る。この界隈でもマンション建設が始まっている。

それが来訪者のためにはなっているけれど、住んでいる人もそれに合わせて、ドンくさいのにスマートにならなきゃいけないのかなという(笑)、ちょっとそういう気持ちがありますね。

私が好きな八百屋さん、魚屋さん、本屋さんはまだ町の中にあるんですね。それを守りたい。同じことを考えている方は町の中にずいぶんいて、買うなここで買う。よそでいいものをみつけたら同じものを町へ戻ってきて買う。それはすごく大事かなと思います。

家を改修するときに地域の工務店を使う。ところがそれを介護保険でやろうとすると地域の工務店が使えないんですね。指定業者になっていかなかったりする。やっぱり地域にお金を落とそうという志があっても、それを許さないうものが今後増えてくると思うので、それをどうやってあがなうか。住んでいる人がこれからどうやって担っていくか。それはまた町会のお役目以上に、町のお店を守る、好きなお店にずっといてほしいということは、消費者側もやらなければいけないことだと思っています。

福川裕一(千葉大学) 最後になってしまいましたが、「谷中はコレクティブタウンか」というテーマなのですが、「コレクティブタウン」とは聞きなれない言葉ですから、どういうことを指すのか、教えていただきたいと思っています。

手嶋 山崎さんにすごく明快な、最後の締めをやっていただけました。後がすごく言いにくくなってしまったんですけども(笑)、福川先生の質問のコレクティブタウンというのは造語で、以前、コレクティブハウスを研究されている小谷部育子先生が谷中に来られて、「この町はコレクティブタウンだね」と言われたことがきっかけになって使っているんです。いま山崎さんもおっしゃっていたように、僕も二二年住んでいて、谷中もやっぱり変わってきているなという感じはすごくしています。

「コレクティブ」とカタカナで言っていますが、要は、ちゃんと助け合っている町であってほしいということですね。「三丁目の夕日」が流行っているけれど、そういう世界が地域というところではちゃんとあるべきなのかなということ。それをうまくみんなまで支えていかなければいけない。そのためにはそれをやる手段として何があるのかなということ、今回「お店」を取り上げて皆さんにご意見をいただいたわけです。ありがとうございます。

(文責＝編集部)



今回のミニシンポジウムは、東京芸術大学の教室を拝借して開催しました。シンポジウムに先立ち、司会の手嶋さん、谷根千工房の山崎さんの案内で谷根千地域の見学会を行ない、多数の参加をいただきました。上の写真は、雑貨のお店「かなかな」の前で。



まちづくりのコレクティブタウン

福川 裕一

コレクティブタウンとは？

ミニシンポジウム「谷根千新商店会―谷根千の新しい波」の前に開催された見学会に参加、谷根千工房の山崎範子さんの案内で町をめぐった。諏方神社を出発して、JR日暮里駅からの道を右に折れ「夕焼けだんだん」に至ると、脇の空地でマンションの建設が始まっていた。ここ数年、三年生の設計課題に出していた敷地である。建築家なら放っておけない、絶対何か提案したくなる敷地として、谷中学校の^{やなか}手嶋さんに教えてもらった、とっておきの場所だった。だんだんを降り、賑わう谷中銀座を抜けると、正面に構えていた信用金庫が取り壊され駐車場になっていた。この二階は、設計の成果を谷中銀座商店街の方々へお披露目する会場であった。少しがっかりしたが、この敷地も課題には魅力的だ。だんだん横の敷地を課題に使うのは難しくなかったが、新たな敷地が現れた格好だ。

果たして谷中銀座のふたつの変化は谷中の町づくりにとって凶か吉か、簡単に判断がつかねたが、その後シンポジウムの会場となる芸大までの道すがらは驚きの連続となった。タイトルにある通り「商店会」というかどうかはともかく、町並みに新しいショップが点々とオープンしているのだ。山崎さんは、われわれを連れ、道を右へ左へと自在に横切りながら、ここもあ

そこもと店から店へハシゴしていった。多くはギャラリィ、クラフト・雑貨系、喫茶店である。最寄り品の店が集積する谷中銀座と異なり、いわゆる買回り品の店である。ここ数年、谷中銀座のまわりしかうろついておらず気がつかなかった。不覚であった。

夕方からのミニシンポジウムで、山崎さんは、実にリアルにコレクティブタウンのイメージを語った。曰く、「タダの肩もみハウスをやってお年寄りに集まってもらえば、取材に行かなくてもその場で聞き取りができる」「子育て中は食堂の上に住めば、仕事との両立がうまくいくのではないか」。かつて夢想されたことだそうである。もちろんそんなに都合よくいくわけではないが、谷中はそのような夢をかき立てる町なのである。今、コレクティブタウンへ最も近い町のひとつであることは間違いない。

山崎さんも正しく指摘されたように、今や一住宅あたりの世帯人員は二人を切るうとしていて、二〇〇三年の土地住宅統計調査によれば、東京区部の平均は一住宅あたり二・一四人。最低は渋谷区の一・八四人で、新宿区一・八七人、中野区一・八九人と続く。谷中のある台東区は二・一人、文京区は二・〇七人だ。次の調査は二〇〇八年であるが、これまでのトレンドでは、平均が限りなく二・〇人に近づくだらう。もともと、持ち家はこれより高く、平均が二・六三人、最低の港区が二・一〇人。これもさらに減少していくと

想定される。

なにしろ、単独世帯が一九九五年の二五・六%（全国、東京は三八・一%）から、二〇二〇年には二九・七%（東京四二・六%、以下括弧内の数値は東京）となつて家族類型の一位に踊り出るのだ。「夫婦と子供からなる世帯」は、一九九五年の三四・二%（三一・〇%）から二〇二〇年には二六・六%（二三・九%）へ後退する。単独世帯のうち六五歳以上の世帯は二二〇万（二六・五万）世帯から五三七万（七四万）世帯へ倍加する。夫婦のみ世帯も、七六二万（九一萬）世帯から一〇五二万（一一一萬）世帯へ増加する。「夫婦と子供からなる世帯」を標準に組み立てられてきた住宅や都市そして両者の関係は、変化せざるを得ない。

このような状況下であるべき街の姿を模索したとき、「コレクティブタウン」へ行き着くのは自然な流れといえよう。二〇〇〇年三月に谷中学校が提案冊子『谷中コレクティブタウン』をまとめている。また、一九九八年度住総研助成研究で「高齢者の〈安心・自立居住〉を〈まち〉で支える〈地域力〉の実践的研究・コレクティブタウン・モデルの提案に向けて」（主査 延藤安弘）が取り上げられている。同論文では、「一人ひとりの高齢者の安心・自立居住が可能となるような「居住―福祉―まち一体型住環境」を「コレクティブハウジングにならつて「コレクティブタウン」と名付け、神戸真野地区にその特質と成立要件を探っている。

見出された条件は次の三点である。

・自立しながら支え合える…①住・商・工・福祉・楽遊などの多機能混在・職住近接のまち、②スマートな個人主義とゆるやかな豊かな共同性を精妙に結びあう老若多世代混住体、③緊張感のある異質な元気を交流するまちづくり人ネットワーク

・たくさん居場所…④住民の利用・運営しやすい制度的福祉・生活施設、⑤多様なやわらかい大小のふらりと立ち寄れる場所、⑥路地のような安心できる歩きたくなる道と喫茶店や銭湯や公園などのふらりと立ち寄りたくなる場所

・たくさんさんのチャンス…⑦多世代・同世代にわたる人と人の交流、⑧四季折々の多彩な楽しい行事・イベント、⑨安否確認・話し相手など多面的な友愛訪問活動

谷中に学ぶコレクティブタウン成立の条件…低層高密

谷中にもほぼ同じ条件が成立している。工場もあるが主ではないこと、寺町であり大きな墓地があること、坂をのぼるとお屋敷町が広がること、芸大に隣接し多くの芸術家・文化人の住まいとなつていたこと、そして何よりも若者の活動が目立つことなどの違いはあるが、指摘された本質は変わらない。重要なポイントがいくつかあるが、コレクティブタウンにおいて、どのような建物がどのように・どのような町並みを構成しているかという物理的環境の果たす役割が大きいことを確認したい。端的に言えば「低層高密」であることが決定的に重要である。賑わう通りも、懐かしい路地も、すべてここに起因する。

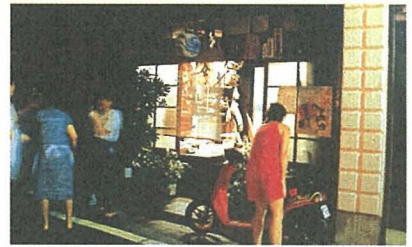
まず、地面の近くに住むということが望ましい。家は町に直結しており、子どもも老人も、そして大人も容易に町へ出ることができる。

主な通りでは、多くの家がミセを構える。逆に言えば、ミセが連なることで空間としての道が成立する。谷中の多くの通りは、緩やかなカーブを描いており、また交差点がT字路になつていて、通り方向の視界も閉じられる。つまり通りは、広場のように囲まれた空間になる。いわば、通りが町の部屋になり、建物がインテリアになる。囲まれることで、その道に接続する家の人びとの社会生活の場となる。

この場合、ひとつひとつの家が通りに面し自分の出入り口を持っていることが重要である。その意味はマンションと比較してみるとわかる。マンションの場合は、沢山の家がひとつの玄関を介して通りとつながる。家と人が結びつきにくく、コミュニティと個人の関係がつながりにくい。個々の住宅と通りが直結せず、中間にマンションの廊下、エレベーターホール、玄関などが介在する。通りに、住んでいる人の活動があらわれてきにくい。すべての家

が通りに直結するということは、社会的な活動がすべて通りを介して行なわれることであり、その結果、相互に出会う機会が最大化されるのである。

もつとも、賑やかな表の通りより、静かな環境を好む人も少なくない。路地はそのような人びとのためにある。表の通りから二次的に派生する路地は、通りと家の間に介在して、相互の関係を緩和する。賑やかさが好きな人と、静かさが好きな人と、好みに合わせて住む場所が選べ、両者が共存できるところがコレクティブのもうひとつの意味といえよう。



町家の軒先でうまれるコミュニティ。
(写真：手嶋尚人)

必ずしも広いとはいえない敷地につくられた路地の住宅は、このような条件で住みこなすための工夫がぎっしり詰まっている。伝統的な町家が、「都市の住居とは、個人の生活をできるだけ他から侵されずに守りたいという要求と、同時に個人の生活を都市全体と連続させたいという反対の要求を、可能な限り幅広い振幅で同時に実現させるためのものだ、ということを見事に示している……」(香山壽夫『町をつくる住宅』)ことは夙に指摘されてきたが、

谷中の長屋には、狭いだけに実にきめ細かい工夫がカラクリのように仕掛けられている。谷中学校の主要メンバーでNPO「ひとまちCDC」を主宰する西河哲也さんの住む長屋が『チルチンびと』29号に紹介されている。「建具を使って融通無碍に変化する間取り」「隣家同士の音を遮るプランニング」「南から北への通風を確保する工夫」「夏の暑さを逃がす小さな前庭」、そして「狭小過密地でもプライバシーを確保」できるよう、内外の視線をコントロールする工夫。とくに、玄関を一畳間、二畳間、一・五畳の前庭が取り巻き、内外の関係を見事に仕切っている様には舌を巻くほかない(昭和初期の長屋に見る民家の継承)、二〇〇四年夏号)。

通りに面した建物ではミセがあることが重要である。ミセは通りを形づくりに活気を与えるとともに、住宅のプライベートな部分とパブリックな通りと

をつなぐ。通りは、ミセの延長となり人びとのコミュニケーションの場となる。災害時の避難や救援の場となる。通りは密集した市街地では主要な空地であり、個々の住宅にとつての前庭としての役割を果たす。

こうして通りはコミュニティ成立の構造として包括的・基本的役割を担い、まさにバックボーンとなる。

以上を整理すると、谷中では、通りを軸にコミュニティからプライバシーへ空間が段階的に切れ目なく構成されていることがわかる。各段階の境目には両者をつなぐ空間や装置があり、相互の関係を調整している。谷中というコミュニティは、通りを軸とする近隣単位から構成され、相互はT字路や坂や斜面で仕切られ、固有な性格を維持している。近隣単位は、住宅を組成要素、通りを基本的な構造とした組織であるが、その中では、ミセや路地などが二次的な構造として、組織化を支えている。住宅は玄関を介して外部とながらるが、小さな前庭や目隠しの塀などを駆使して、外部との関係を調整する。こうして、近隣単位、家族、個人がそれぞれの固有性やプライバシーを維持しつつ、必要に応じて適切な関係を取り結ぶことができる空間構成が成立している。

このように見えてくると、コレクティブタウンを確立する場合のミセの重要性・可能性に思い至る。ミセはコミュニティの軸となる街路を成立させるための重要なポジションを占めている。ミセは余っている。谷根千新商店街が形成されつつあるとはいえ、そのすべてがいわゆる商店で埋まることは今後もないであろう。このようなミセをコレクティブタウンに必要な「共」の空間に活用していく戦略がまずは現実味を帯びそうである。すでに、ミセの社会福祉施設としての活用は全国の商店街で見られるようになったが、もっと広くコミュニティの拠点としてのミセ空間の可能性を広げていければ、コレクティブタウンはもつと近くなるように思える。

コレクティブタウンの発想の源であるコレクティブハウスは、これからの社会に必要な可能性のある住み方として、今後も追求されていくだろう。しかし、近い将来にそのような住み方を希望する人が多数派になることは想

像しにくい。それに対し、個人や家と町の間を重層的・融通無碍に組み立てられるコレクティブタウンは、むしろ将来に対するより現実的な解に見える。

何をなすべきか

果たして、谷根千新商店街が生まれつつある現状を見守れば、オートマチックにコレクティブタウンへ至るのであるか。そうでないとしたら、谷中の「低層高密」市街地を維持し、「低層高密」市街地の公衆衛生上や安全面での課題を克服しつつ、文字通りコレクティブタウンを実現するためには、何をなすべきか。

まず「低層高密」が、わが国の都市政策の体系の中では望ましい市街地像と捉えられていないことを認識する必要がある。わが国の建築規制は一般にオープンスペースの中に塔状の建物を建てることを理想とする発想に依拠しており（ル・コルビュジェの描いた「タワーズ・イン・スペース型」の都市像）、建蔽率を低く抑え、壁面後退をできるだけ大きくし、代わりに高さや高容積を許容するよう組み立てられる。「水平過密都市から垂直庭園都市へ」は、依然基本的なスローガンである。現に、谷中はその攻撃にさらされてきた。

最初は一九八〇年代のバブルの時だ。この時、不忍通り沿いはあるゼネコンのマンション建設のターゲットとされた。当時の『谷根千』に次のような住民の談話が収録されている。「土地を買いに来る業者が、私どもは都や区の不燃化構想の施策に従いまして、まるで行政に依頼されてきたみたいなことを言うのよ」。マンションが屏風のように建ち並び不忍通り沿いの景観はここのときつくられたものである。そして一九九八年の三崎坂ライオンズマンション。周辺住民は、谷中中学校の支援を受け、原案の九階建てを六階建て（通り沿いは四階建て）へ切り下げるといふ歴史的な勝利をおさめ、全国のマンション紛争を闘う住民たちの希望の星となった。計画の変更に止まらず、上野・桜木町まちづくり憲章（二〇〇〇年三月）を定め、谷中三崎坂建築協定（二〇〇〇年二月）を結ぶという成果まで上げた。しかし、二〇〇一年のルネサ

野桜木マンションでは業者に押し切られる。原因の大半は、問題に的確に対応し住民の願いを反映できない都市・建築制度にあるとはいえず、地区計画などの制度を駆使し、都市計画法や建築基準法に一般的に定められた既製の「一般規制」を、オーダーメイドの「谷中ルール」に着替える努力が継続されなければならぬ。これらの点について、すでに一九九五年に台東区が「下町型住宅のあり方に関する調査」を行なっている。建物のデザインとともに制度のあり方も検討されたが、未だその提案は十分に生かされていない。

基本的には、コレクティブタウンという町のイメージをできる限り多くの住民が共有し、事業化のタネを見つけて少しでも実現していく体制を整える必要がある。谷中ではこの体制はある程度できている。二〇〇〇年に、密集市街地に関する調査が発展して、自治会などが結集した谷中まちづくり協議会が設立された。二〇〇三年、谷中中学校を再編し、「ひとまちCDC」と「た」という歴史的都市研究会」というふたつのNPOが設立され、歴史的建物の活用やシェアハウス化などを実現してきた。二〇〇年に及ぶ谷中中学校の取り組みは、ゆつくりとだが地域の人びとの共感を得て成果を産み出しつつある。自治会、商店街、さまざまなNPOや市民団体、企業・商店、お寺、そして住民・個人、それぞれの活動が相乗的に動き出したとき、まさにコレクティブタウンが実現していくことになるだろう。ひとり、行政の積極的な姿勢が見えないことが気掛かりである。

福川裕一／ふくかわ ゆういち

千葉大学大学院工学研究科教授（都市計画研究専攻）

一九七二年、東京大学工学部都市工学科卒業。

一九七八年、同大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。明治大学工学部助手、千葉大学工学部講師を経て、一九九六年より現職。

主な著書に、『都市にとって土地とは何か』

（共著、筑摩書房）、『ゾーニングとマスタープラン』（学芸出版社）、『ぼくたちのまちづくり』

1-4（岩波書店）、『持続可能な都市』欧米

の試みから何を学ぶか』（共著、岩波書店）、などがある。

まちがあつて、人がいて、宿がある

外国からのお客様を受け入れて二七年間に延べ一三万人。長屋の暮らしぶりが残るまちだからこそその家族旅館

澤 功

はじめに

私が谷中の澤の屋旅館の一人娘と結婚し養子になったのは、東京オリンピックが開かれた昭和三九年のことでした。その頃は旅館の最盛期で、私もすぐ勤めをやめて旅館経営に携わることになりました。団塊の世代の生徒さんで修学旅行は溢れ、商用のお客様には家族的待遇が喜ばれ、観光のお客様も大勢いらっしゃいました。

当時の澤の屋を取り仕切っていたのは、義母、義母の姉、それに叔母の女性三人で、従業員は、番頭さんをはじめ七名ほどでした。私は義母から、言葉遣いに始まって旅館のいろはを厳しく教え込まれました。これがいまでも私の旅館経営の礎になっています。

好景気の波に乗り、昭和四三年に旅館の半分を鉄筋コンクリート三階建てにし、二四室にしました。その頃の私の夢は、部屋を増やし売上げを伸ばし利益を上げることでした。

旅館の危機

ところが昭和四五年の大阪万博が終わると、宿泊客の数は一気に下降していききました。修学旅行は生徒数の減少に加えホテルに流れ、商用のお客様は

駅前次々生まれたビジネスホテルを利用するようになり、観光のお客様の旅は高級志向になってバスも付いていない部屋は敬遠され、経営は赤字になってしまいました。

その頃には義母も亡くなっていましたが、養子の意地で澤の屋の看板だけは下ろしたくないという思いで、木造の旧館をアパートにして鉄筋コンクリート三階建ての一二室を残し、家族だけで営業することにしました。それでも経営状態は悪化するばかりで、アパートの家賃収入で生活を支えている状態でした。

外国人客の受け入れ

そんな時、小さな旅館のグループで積極的に外国のお客様を受け入れていたジャパニーズ・イン・グループの創立者、新宿のやしま旅館の矢島さんに「日本のお客様が来てくれないのなら、外国のお客様を受け入れなさいよ」と勧められました。しかし、言葉もわからないし、和室の旅館では受け入れられないと思い込んでいたので、一年間踏み切ることができませんでした。

ところが、昭和五七年の七月にとうとうお客様が三日間ゼロという日がきてしまい、このままでは廃業は目に見えていたので、家内とやしま旅館さんを訪ねてみました。そこは外国のお客様で溢れ活気に満ちていました。部屋

澤の屋の年別宿泊延べ人員および客室稼働率

	外国人 数 (人)	日本人 数 (人)	合計 (人)	年平均客室 稼働率(%)
1982年(昭和57年)	230(5.5%)	3,964	4,194	64.8
1983年(昭和58年)	3,158(57.9%)	2,297	5,455	82.2
1984年(昭和59年)	4,154(67.4%)	2,009	6,163	90.7
1985年(昭和60年)	4,578(70.0%)	1,958	6,536	91.2
1986年(昭和61年)	4,396(70.5%)	1,839	6,235	90.1
1987年(昭和62年)	4,446(72.9%)	1,649	6,095	88.4
1988年(昭和63年)	4,519(75.9%)	1,438	5,957	87.2
1989年(平成元年)	5,314(80.9%)	1,254	6,568	92.1
1990年(平成 2年)	5,697(83.9%)	1,093	6,790	93.3
1991年(平成 3年)	6,177(89.0%)	761	6,938	94.8
1992年(平成 4年)	6,429(91.8%)	576	7,005	94.7
1993年(平成 5年)	6,127(88.2%)	820	6,947	95.1
1994年(平成 6年)	5,741(85.1%)	1,008	6,749	93.8
1995年(平成 7年)	5,064(83.4%)	1,005	6,069	88.0
1996年(平成 8年)	5,264(85.5%)	896	6,160	92.0
1997年(平成 9年)	5,315(83.8%)	1,024	6,339	92.6
1998年(平成10年)	5,701(86.7%)	873	6,574	92.9
1999年(平成11年)	5,641(85.3%)	973	6,614	94.0
2000年(平成12年)	5,387(85.4%)	923	6,310	93.4
2001年(平成13年)	5,249(83.0%)	1,077	6,326	92.9
2002年(平成14年)	5,282(80.4%)	1,290	6,572	95.1
2003年(平成15年)	5,009(79.5%)	1,290	6,299	92.5
2004年(平成16年)	5,554(87.2%)	815	6,369	93.4
2005年(平成17年)	5,418(86.8%)	821	6,239	93.1
2006年(平成18年)	5,458(85.1%)	952	6,410	92.6
2007年(平成19年)	5,484(84.9%)	974	6,458	91.3

註：()内は構成比を示す。

数は一二室、そのうちバストイレ付きは二室のみと私どもとまったく同じ。その上、矢島さんが話している英語が実に簡単で、私にさえわかるほどです。これなら私どもでもできるのではないかと、早速グループに加入し、外国のお客様の受け入れを始めました。

初年度の昭和五十七年は二三〇人でしたが、グループのパンフレットに掲載された次の年は三〇〇〇人を超え、その後順調に増え、これまで二十七年間で九〇か国、延べ一三万人を超える外国のお客様に宿泊していただいています。

まちと関わらないで

義母と一緒に旅館の仕事をするようになった時、義母に言われました。「あんまり町会に関わらないでくださいね。役員になったら、いろいろと用を言いつかって旅館の仕事ができなくなりますからね。それに、町の人はうちに泊まりに来ないでしょう。団体のお客様もバスで来て宴会をして次の日の朝バスが迎えに来て帰るでしょう。商用のお客様はうちで夕食を食べて



谷中2丁目、澤の屋旅館の建物。

滞在客はまちと一緒に

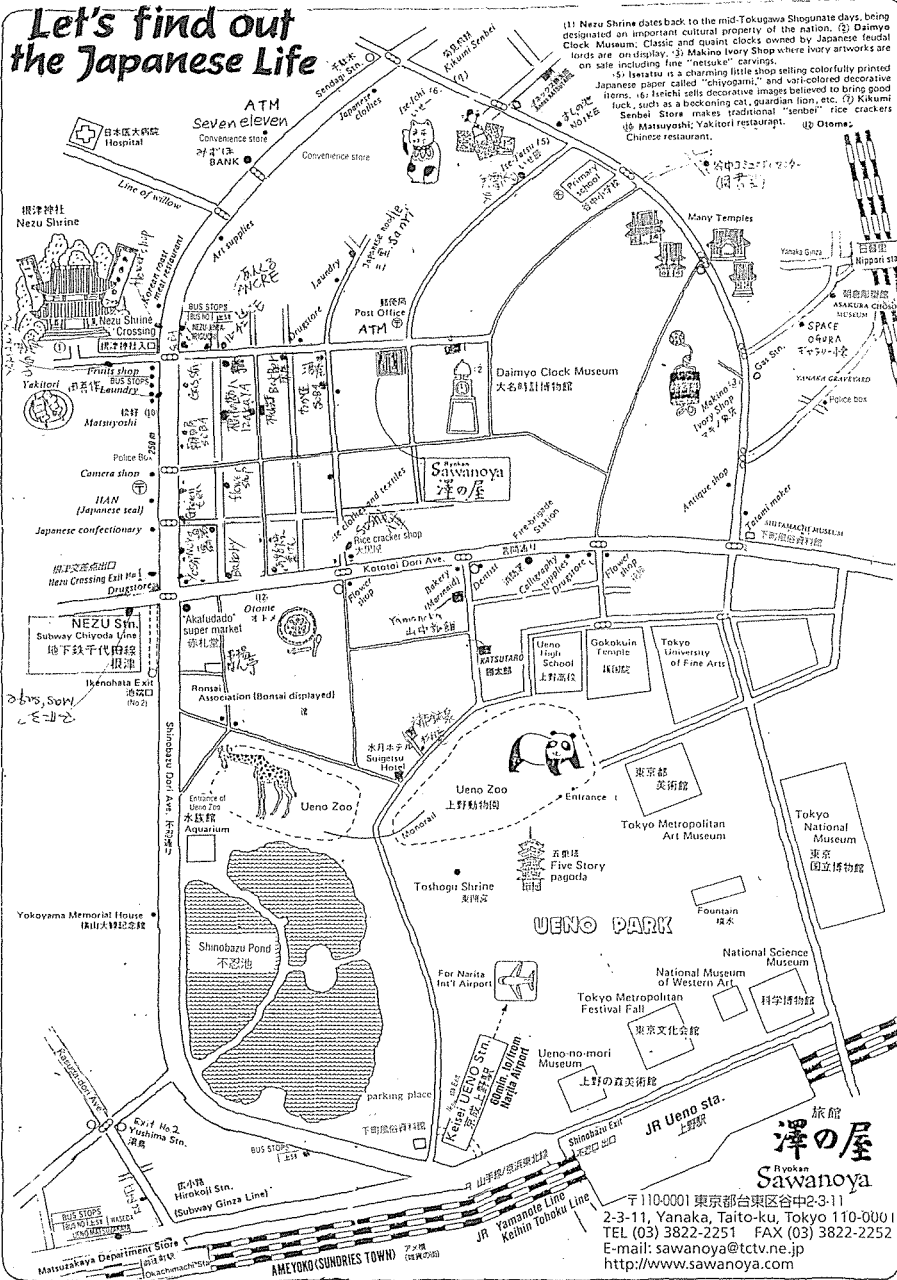
町には出て行かないし、だから旅館は町と関わらなくてもやっていけるのよ」。私は養子ですから、そういうものかと思いついていました。

ところが、義母の姉が亡くなったとき、町会長さんが見えて、「澤さん、お葬式は町会でやりますか、旅館組合でやりますか」と聞かれて、「町会にお願いします」と言いますと、私は座っているだけで葬式は無事に終わりました。しかし、通夜の時、広間にお清めの料理を用意していたのに、旅館組合の人は上ってくれましたが、近所の人は香典を置いてそのまま帰ってしまいました。私の生まれた新潟では、お通夜は結構賑やかです。お通夜はその人の最後のお祭りだから大勢の人に来てもらって賑やかにしてあげたいと思っていました。でも近所の人とおつきあいをしていなかったから来てもらえなかったのです。それ以来、私は積極的に町会に行き、役員も引き受け、今は副会長をしています。義母が亡くなった時は、町会の人にも大勢来てもらうことができました。

ある時、フランスの若い芸術家三人が日本に三か月滞在して芸術活動をするためにやってきて、私どもに予約をしてくれました。初めての長期滞在のお客様ですから喜んで待っていました。チェックインしてバストイレなしの四畳半の部屋に案内すると、「もっと大きなバス付きの部屋を」と、宿替えをしたい素振り、キャンセルされるのを感じましたが、三日もすると「この町が気に入った」と言って、三か月滞在してくれました。彼らは部屋に閉じこもって、毎日町に出かけ

外国のお客様に配っている周辺地図

Let's find out the Japanese Life



周辺地図

て行きます。そして友だちが訪ねてくると、自分の町のように案内したり食事をしていく姿を見かけました。

それ以来、私どもでは朝食と宿泊を提供するだけで、それ以外は町にお願いますれば、長期滞在のお客様でも充分に対応できるという自信が付きました。

そこで、町に出かけて行くお客様のために周辺地図をつくりました。まず五軒ほどの食堂に、地図に載せて外国のお客様を紹介してよいか聞きに行きました。そして承諾を得たお店には、入口にウエルカムトゥーの表示と英語のメニューをつくってくださるようお願いしました。地図には、国立博物館、上野動物園などの観光名所の他に、銀行、郵便局、病院、クリーニング店、薬局など日常生活に必要なところも入れました。範囲は歩いて三〇分ほどの

JR上野駅、日暮里駅までです。

街角でこれを広げて立っている外国のお客様に、町の人が声を掛けて行先を説明している光景を何回も見かけました。

外国のお客様を受け入れて

外国のお客様を初めて受け入れた時、近所の子どもたちが玄関のガラス戸越しに「ガイジンだ」と騒いでいましたが、それが毎日のことになると、もう振り向くこともなくなりました。

次に、私が町を歩いていると呼び止められるようになりました。

「澤の屋さん、お宅のお客様さんがパンツを洗濯してくれと持ってきたけれど、下着はうちでできないから旅館のコインランドリーでやってくれと言ったんだけど、わかってくれなくて」と、近所のクリーニング屋さん。「私の目の前で



諏方神社の夏祭りに御輿をかつぐ。



谷中墓地の花見。



大円寺の菊まつり。



ストリートパーティは桐谷ご夫妻主催の夏の催し。写真は1995年8月。

封筒に現金を入れるから、現金封筒を買ってこれに入れなさいと説明するけど、わかってくれなくて」と、郵便局長さん。文房具屋さんは「何が欲しいかわからなくて、隣の学生さんに来てもらってやっと思いたいものを売ってあげたよ」と言います。でも、最初は戸惑っていた町の人たちがいろいろと知恵を絞って対応し始めました。

クリーニング屋さんでは、澤の屋に泊まっているのを確認して何日の何時までに仕上げればいいのか確かめて、パンツなどできないものは断わって合計金額を示して前払いしてもらおうようにしたそうです。骨董屋さんでは、よく聞かれる品物の説明文を高校生の息子さんに英語で書かせて、聞かれるとそれを読んでもらっています。床屋さんでは、人間の髪は月に一センチほど伸びるので、「この前散髪をしたのはいつですかと聞いて、それからやってあげるのよ」と話してくれました。

戸惑っていた町の人たちが、自然に町の中に入れてくれるようになったのです。

一方、外国のお客様もいろいろな話をしてくれます。「朝早く根津神社に散歩に行ったらラジオ体操をやっていて、見ていたら、壊れている靴を直してやるよと家まで連れていってくれて、日本の朝食をご馳走になったよ」と嬉しそうにオーストラリアの新婚さんが話してくれます。「豆腐屋さんに朝早

みこしをかつぐ

私どものお客様が初めて町の催しに入れてもらったのは、諏方神社の夏祭りの時でした。アメリカからのお母さんときれいなお嬢さんが鎌倉見物に行こうと玄関を出たとき、御輿に出くわし、面白がって付いて行きました。私は子ども御輿の担当でそばにいましたから、町会の若い人が「澤の屋さんとお嬢さんだろう、担がせてあげなよ」と、自分の法被を貸してくれました。結局、鎌倉に行くのをやめて、半日御輿を担ぎました。金髪のきれいなお嬢さんだったせいもあるかもしれませんが、このことがあってから町のいろいろな催しにお客様が入れてもらえるようになりました。

四月のもちつき大会では、ブラジルからの日系の家族の人たちが参加しました。「息子にもちつき体験を初めてさせてあげることができたよ」と言

いながら、お父さんが楽しそうにその光景を写真に撮っていました。十月には大円寺の菊まつりがあります。この催しの中で、出雲流地唄舞の出雲蓉先生がお寺の本堂の階段を舞台に見立てて舞うのですが、私は初めてこれを見たとき、かがり火に照らされて舞う姿の動と静の美しさ、これが日本の芸術だと感動しました。これを外国のお客様にぜひ見てもらおうと毎年誘って出かけるようになりました。

く行って豆腐ができるまで見ていたら、「豆腐をくれたからチョコレート置いてきたよ」とスイスのお客様。「路地で盆栽の手入れをしていたおじいちゃん盆栽の話をしてきたよ」とフランスのお客様。「おじいちゃんはフランス語が話せたのですか」と聞くと、「盆栽の話にフランス語は必要ありません」と言われてしまいました。

夏にはストリートパーティです。これは私どもの旅館のはす向かいの長屋に住む画家の桐谷逸夫さんとアメリカ出身のエッセイスト、エリザベスさんご夫妻が、横の駐車場の車を移動してもらってそこでやるものです。簡単なつまみと飲み物を用意し、無くなれば誰かが家に帰ってありあわせのものを持ってきたり、飲み物が誰かから差し入れられたり、誰でも参加自由のパーティです。私どもへの帰り道でやっているので、町の人に誘われてうちのお客様も参加して、あちこちで話の輪が広がります。近年、桐谷夫妻がこの長屋から引越して、この夏の風物詩がなくなったのはとても残念です。

この他にも、花見や盆踊りなど、いろいろな催しにお客様を誘っていますが、その時に一つ気を付けていることがあります。私は自分が楽しいと、他の人も楽しいと思いません。そこで、何回も外国のお客様を誘っていました。家内に「興味が無い人は誘われても行かないわよ」と言われて、今は、情報として泊まっている人全員に知らせ、しつこく誘わないようにしています。

江戸の長屋の暮らしぶりが残るまち

若くして亡くなられた江戸風俗研究家の杉浦日向子さんと十年ほど前、ある委員会で一年間ご一緒したことがあります。杉浦さんはその会で、江戸時代の長屋暮らしの三つのルールの話をしてくれました。

一、初対面の人にどこから来ましたかなどと生国や出身地を聞かない。二、いくつですかと年齢を聞かない、若く見えたなら若い、年寄りに見えたら年寄りで、見えたとおりでいい。三、家族構成を聞かない。結婚しているのか、子どもがいるのかとそういうことは聞かない。付き合っていて言葉の端からもれ聞くとこでわかってくるのはいいけれど、いきなり聞いたら長屋に住む資格がないというものです。

私が「ご近所では今でもその暮らしぶりが残っていると思います」と言うと、「長屋が残っていますから延々と江戸時代から残っているんですよ」と杉浦さんが答えてくれました。

最近、ご近所に住むアメリカ出身の芸術家のアラン・ウエストさんと対談する機会がありました。そこでこの話をする、アランさんは「澤さん、この辺の人の暮らしぶりにそれは残っていると思う。雑誌やテレビで私のことを知ってアトリエにやってくる人は、まず最初にどの国から来ましたかと聞いて、アメリカと答えると、結婚していますか、はい家内は日本人ですと言うと、恋愛ですか見合いですか、それから子どもは、と聞いて、次にはアトリエはいくらで借りていますかと、聞かれたくないことをどんどん聞きます。でも、ご近所の人は、誰もそんなことは聞いてこない。知っているから聞かないのではなく、わからないけど聞かないという配慮が感じられるよ」と言いました。

長屋の暮らしぶりが残るこの町にやってきた外国の人にも、町の人たちは日本の人と同じように接してくれているようです。

お客様の旅の仕方

私どもを利用して旅している外国のお客様の旅の仕方は、私にとっては新鮮で驚きでした。FIT (Foreign Individual Tourist) といわれる個人旅行の観光客がほとんどで、日本に行こうと思ったら、日本のことを調べ始めて、自分で計画を立てて、そこから旅が始まると言います。

そして、豪華なホテルやおいしいご馳走のことは忘れていくが、旅の思い出としていつまでも残るのは、その国の人とのふれあいやちょっと親切にされたことだと言います。興味あるものに出会ったとき立ち止まらないからとタクシーに乗らず、長い旅をしているからお金を持っていないも無駄遣いは一切しません。重い荷物を背負って上野駅から一時間もかけて私どもを探し探し汗びっしょりで歩いてきても、「苦しみも旅のうち」と平然としています。そして、日本人がどんな生活をし、どんなことを考えているかに興味があり、町歩きをして、食べ物も、商売の仕方も、自国と比較して面白く驚くことが多いと言います。

また、宿を選ぶときは、「旅が目的で宿は手段だ」と言って、自分の旅の目

1 澤の屋の宿泊客の90%はFITである

FITとは「Foreign Individual Tourist」の略で、外国人の個人旅行者のことである。FITの旅の仕方は本文参照。

参考までに、訪日外国人客数のうち、エージェントの取り扱い人数は約20%である。

日本旅行業協会 (JATA) の資料によれば、訪日外客数のうち、JATA会員の取り扱い人数 約12%、JATA外国人会員の取り扱い人数 約8%

また、訪日外国人観光客の旅行形態の中で個人旅行の割合は、

イギリス	87.4%
アメリカ	83.8%
韓国	67.5%
香港	58.6%
台湾	42.8%
中国	18.3%

(JNTO訪日外客実態調査 (平成19年) による)

2 澤の屋をどこで見つけたか

ガイドブック 30%、 インターネット 30%、
口コミ 30%

3 澤の屋の宿泊客の割合

外国人客 85%、日本人客 15%

4 澤の屋の外国人宿泊客の国籍

欧米 90%、アジア 10%で、
第1位 アメリカ、第2位 フランス、第3位 イギリス、
第4位 オーストラリア、第5位 ドイツ、の順
1年間で約50か国の人が宿泊している。

5 澤の屋への予約

予約方法：Eメール41%、電話40%、FAX5%
予約相手方：直接予約 95%、ウェルカムイン 3%、
エージェント 1%

予約の言語：英語のみ

クレジットカード番号 (アメックス、ビザ、またはマスター) で予約を受けるギャランティ・リザーベーション制度を活用することで、世界中から直接予約を受けることができるようになった。

6 平成18年度の実績

- ①年平均部屋稼働率 92.6%
- ②宿泊者数 外国人客 5,458名 (85.1%)
日本人客 952名 (14.9%)
これまで27年間で、90カ国、延べ13万人を受入れている。
- ③リピーターの割合 30%
- ④平均宿泊日数 3.5泊
- ⑤客数 1人客41%、2人客43%、3人客7%、
4人客4%
- ⑥職業 1位 学生、2位 先生、3位 技師
(その他に約200職種)
- ⑦年齢 若い人から年配者まで幅広い。

おわりに

的に合わせて選びます。仕事の時はビジネスホテルを、おいしいものを食べて温泉でゆっくりしたい時は観光旅館を、人に煩わされなくてゆっくりしたい時には大きなホテルを、そして家にいるようにくつろぎたい時には小さな家族旅館を選ぶのだそうです。

そしてお馴染みさんは私に言います。「澤さん、澤の屋はこのままでいてくださいいね。いつ来ても同じ顔ぶれで、家にいるようにくつろげるから来るんですよ」。

私も、私どもが家族旅館のままでいることで喜んで来てくださるのなら、家族が生活できる範囲の利益を得て、お客様の喜びを自分の喜びとしてこのままの形でやっていこうと思っています。



私たち家族でやっています。

日本のお客様を受け入れていた頃、チェックインしたお客様に「この旅館は遠くてわかりにくいね」とよく言われました。また、電話の問い合わせで上野の駅前でないことがわかると、「結構です」と言われて電話を切られました。ところが外国のお客様は、「この町はいいよ、ガイジンと言われたいし、ガイジンだからと特別扱いされないから、普通の日本人と同じ生活を体験できる」と言います。そして「この町にある澤の屋もいいね」とも言ってくれます。

まちがあつて人がいて澤の屋は成り立っているのだと思います。

澤功／さわ・いさお
中央大学法学部卒業。東京相互銀行(現・東京スター銀行)勤務を経て、澤の屋旅館の経営に携わる。ジャパニーズ・イン・グループ会長を経て、現在、日本観光旅館連盟副会長。二〇〇三年、国土交通省より「下町の外国人もてなしカリスマ」に認定される。著書『澤の屋は外国人宿』『ようこそ旅館奮闘記』がある。

発掘採集・散歩のまち

『散歩の達人』創刊以来、特集三回。谷中の魅力とは？

山口 昌彦

「イメージ」を叶えてくれる町

谷中の町を初めて歩いたのは、まだ東京についてもぜんぜん詳しくなかった、今から二〇年ほど前の学生だった頃か。博物館や美術館が立ち並ぶ一大観光地、上野公園の裏手にこんな場所が、と驚いたことを覚えている。本当にたまたま、上野から日暮里あたりまで、どうせなら歩いてしまおうという偶然から、谷中に足を入れたのだった。

当時ぼくは、バブル期のびかびかした東京に馴染めなかった。昔ながらの木造長屋に井戸のある路地なんかがある、そういうところはいったどこにあるんだろうと、いわゆる下町イメージの最たる町、浅草あたりを歩いてみたりした。当然、戦災で昔の町並みはほとんど燃えてしまっているわけだから、そんな路地はなかなか見つからない。

品川区にある住宅街、池田山で育ったぼくは、下町という別世界にあこがれもあった。渋谷とか新宿、銀座ではない、自分が知らない東京、「下町」はいったどこにあるのか。



谷中は坂の町だ。夕焼けがよく似合う。

それを八〇年代半ばに谷中で見つけたのだ。

今思うと、下町というより「古き佳き東京」を求めていたのだろう。（実際、ぼくが思うに、谷中はひと括りに下町とは言えない。雑誌をつくっておいでなんなのだが、この頃は神楽坂の上まで下町と言われてしまっていて、要はマスコミが古い町を括るのに便利ということに使っているわけだ。しかし現在の東京は、住み分けもなくモザイク状に入り組み、膨張していることを考えれば、下町・山の手をあまり厳格にいうことは無理だろうと思っている）。都内にある古い家並みの残るいくつかのデーパーな町も当時から歩いているが、普通の商店エリアを逸れしまうと、たちまち昼間つから酔っ払っているおとつあんたちや路上で眠る人たち、なんてことがある。

ある意味これも生々しい東京の姿で、ぼくにとってはたいへん興趣をそえられるところではあるのだが、一般に、たとえば自分のおふくろに「散歩しよう」と言っ出て出かける場所ではないかもしれない。特異な好奇心がない限りは楽しめない人も多いだろう。

一方、ぼくがその頃住んでいた池田山は、江戸の頃から武家の屋敷があった山の手。美智子妃のご実家もあった。近隣の寺が集まっているあたりは坂も多く、谷中寺町の雰囲気にも似ている。ただ「閑静な住宅街」の面が強すぎて、町並みの展開は大きくない。

その点、谷中界隈は、多くの人がイメージするいろんな「古き佳き東京」が詰まっている。千駄木のお屋敷街から坂を降りれば、根津の路地や長屋。そこから谷中の上ついでいけば、地元民が日常でお参りしている寺町があつて、駄菓子屋に小さな商店街、路地のお社に井戸……。行つてみたら「これだけ？」ということがない。コンパクトにいろんな「古き佳き」がパッケージされていて、歩くほどにそのイメージをふくらませてくれる風景が、音や匂いの変化まで伴つて、次々と展開する。

この町に集まる学生やアーティストなどの若い人たちも、そんなまほろしかと思つていたイメージが現実に現れてくれる新鮮な感動があるから、ここに住みたい、ここで何かやりたいと思うのだろう。

そして風景風情のみならず、いかにも「東京」らしい、都会らしい社会がある。

四方田犬彦さんに月島の人びとについてインタビュをしたとき、「あるところから個人の中へは踏み込まないというエチケットがある」と話されていた。「……それは江戸っ子の継承かもしれない。江戸の町は、いろんな場所から、いろんな事情がある人が流入してきた町だから、それぞれ助け合うけれども、ずかずかとプライベートに踏み込むことはしない」。

驚いたのは、『散歩の達人』二〇〇七年一〇月号で「谷中・根津・千駄木」特集をした際、以前千駄木に住まれていた女優の濱田マリさんも同じようなことをおっしゃっていたのだ。「仲良しのお店はたくさんあるけど、みんなある距離感をもつての線引きがうまい」。

町は違うが、これが江戸っ子、もとい東京人ではないか。適切な距離をもつて接してくれる。そして、人恋しいときは孤独の心をしっかり癒してくれる。このお二人の話から、月島も千駄木界隈も実に都会なのであるなあと思つたのだ。

デコボコの楽しみ

東京で、歩くのが楽しい町の特徴の一つがデコボコだ。たとえば代表的な



屋根の上に女性の裸像が。
(朝倉彫塑館)



車は通れません。路地のまち谷中
は車止めも洒落ている。

繁華街、新宿・渋谷・池袋・銀座で歩くのが一番楽しいのは、実は渋谷だと思う。

ほかの繁華街は平らな地形だが、渋谷は播り鉢状の地形。鉢のフチをなぞるようにして同心円状にゆつくり駅前スクランブルの「底」をめざすだけでも面白いし、地面が平らじゃないから道もくねくねしていて混然としており、路地に入るとどこへ行つてしまうのか、楽しい不安時間がやってくる。

戦前は銀座に次ぐ繁華街といわれた神楽坂だつて、あの地形と路地があつたからこそだろう。市谷

の陸軍参謀本部のおかげだけではあるまい。谷中も、「夕焼けだんだん」はじめ起伏があつていろんな風景の展開があるからこそ、歩く町としての魅力がある。

夕暮れは、地元で支持者の多い「蛭坂」が個人的にはたいへん好きな場所だ。コミュニティセンターと原っぱのある場所だから、商店エリアでもないのに子ども、お年寄り、家族連れ、犬連れ、いろんな人たちがいる。暮れ時の往来がまたいい風景をつくっている。

ヒマラヤ杉が聳える「みかどパン」のY字路あたりは、ぼくにとつて谷中の山頂。お寺の集まるこの界隈はとも空が広い。夕焼けビューポイントではないけれど、刻々と変わる空の色が味わえる。「夕やけどんだん」と並ぶ「お約束スポット」だが、いつも「ここ東京？」と思つてしまう。散歩なのに旅してる感じだ。

散歩の発掘採集

『散歩の達人』が初めて「谷中・根津・千駄木」を特集したのは九十七年九月号。キーワードは「旅」であった。夏の終わりの九月号。気づけばどこにも行っていない、と思っても、都内すぐそばに旅情をかきたててくれるスグレ町がある、というわけだ。

もともと『散歩の達人』の誌面づくりには「旅するように散歩する」ということがある。

誰もが旅に出ると、観光スポットのチェックだけでなく、町や村のあちこちを見逃さぬよう、地味なところもさよろきよろして歩く。あんなところこんなもの、こんなところにあんなもの……。旅行から帰ってきて写真を見ると、何でこんなものを撮ったんだろうって写真があったりする。でもそれは、そのときやっぱ面白かったもの、発見したもの。なんでこんなもの、と思うのは発見したときの面白さを忘れてしまっているからだ。

一見何気ないものでも「実は面白い」ってことを町から採集してくるのが、小誌編集スタッフの仕事なのである。

谷中は発掘採集のやりがいのある町だ。たとえば「朝倉彫塑館」は有名だが、正面入り口のモダンな黒いデザインからは、あの高級老舗旅館みたいな日本間や池の様子は想像できない。さらに裏手の静かな道に回ると、ちよつとした昔ながらの小ぶりな門があって、その奥に見える下見板造りの三角屋根のてっぺんには、女性の裸像が佇んでいたりする。

先日は、住所は日暮里になってしまいが、「夕やけだんだん」手前の経王寺の山門で上野戦争のときの銃弾跡がほこぼこあることを発見して、その銃弾の穴を撫でてひとり悦に入ってしまった。

レッドデータ路地たち

路地が多いのも、歩く好奇心をかきたててくれる大きな魅力だ。

ほくのお気に入りには、玉林寺の境内から行く両脇の路地。何度も通ってい

るのに、いつもどこへ行っちゃうのかとどきまぎする。右の道に行けば、これまた屋根のある井戸とその脇に階段のある路地というすばらしい風景に出会える。左に行くくと三浦坂に続く緑の多いひっそりとした路地だ。

楽しい散歩の必須条件は、期待と不安。細い路地は、その先がどうなっているか、「見えない」ことがその先へ足を進めてくれる。角を曲がった先は？路地のどん詰まりに見える灯りは何？ 道の真ん中に電柱と井戸？

谷中は路地のバリエーションも多く、デコボコもウネウネもマッスグもある。まさに路地の天国。そして今や、谷中は都内では貴重な町角なのだ。



散歩の第一歩、一番の高みでにらみをきかす。
(養福寺仁王門)



維新の上野戦争の銃弾跡が残っている。
(経王寺山門)

東池袋、千住、神楽坂、神保町……この一〇年で消滅した路地は数多知れず。向島や曳舟あたりも、新東京タワー建設や鉄道高架線事業などと並行して町の再開発が進められ、路地裏は一挙に消滅するだろう。

散歩者を誘惑する路地たちは、今や絶滅危機種なのである。

再開発によって、古い建物が消えていくことも悲しいが、路地の消滅もいつも残念に思う。

以前、都市設計も行なう大手の土木会社にもっと人間サイズの道、要するに路地を再開発後も残す、つくることは無理なのか、と聞いたことがある。すると「路地のような道は死角を作ってしまうので治安上よろしくない」と行政からの指導もあるという。「我々ものつべりした再開発にならないようにするためにどうしたらいいか、それがいつも課題なんですよ」と話していた。効率と治安という理由に対して強く反論

する意見を正直持っていない。だが、谷中には闇も影も死角もあるから、光がある。だから、町にいるんな表情が生まれる。

谷中どんだけ

「同じ町を特集するとネタがかぶらないか」とよく聞かれる。良くも悪くも、町も住民も常に変化しているし、「汲めども尽きぬ」が人の住む町だと思いたい。谷中はその代表格。やっぱ面白いなあ」と誌面をつくるたび感じる。

九七年の旅テーマの特集に続いて、二度目の特集〇一年五月号では、地元民となつた外国人に谷中を案内してもらつた。彼らにとつての谷中は、スプリチュアルだったネパールなバザールだったり、ゲイシャ・フジヤマに並ぶ純日本の象徴的存在だったり。共通していたのは、やはり町がもたらず発見の連続が彼らの心を動かしていたこと。またほかの特集企画では、町中に点在するアートギャラリーのことや、古くからある木造家屋に住む暮らしについて、住民にとつての井戸の存在など、前号テーマだった「旅」から地元の暮らし寄りの構成となつた。

谷中界限にも地元というより観光客を相手にしたような店も増えたが、ほかの町に比べまだまだ家族営業の店も多い。チェーン店や今どきすぎる店を避ける傾向にある小誌としては、店紹介ページも取材していろいろ話聞けて楽しい。

三度目の特集となつた昨年〇七年一〇月号では、谷中に住んでいた志ん生



なぜか3本そろって頭をもたげる煙突は？
(玉林寺脇の路地)



くねくね曲がった路地には、屋根のかかった井戸が。
(玉林寺脇の路地)

の一家について、関わりのある店を含め、いろいろな方から志ん生さんたちの思い出をうかがった。志ん生が亡くなつてもう三五年も経つというのに、その思い出を話し始めると涙ぐむおじさんもいらした。こんなにも町に愛されている人をほかに思いつかない。また、こんなふうに地元全体で愛している人がいる町も思いつかない。

創刊から一二年の間に、谷中は三回特集を組んだ(他に小企画では二回ほど)。四回目はいったいいつになるかわからないが、やっぱりきつと編集スタッフみんな楽しんでやるんだらうと思う。少々変化はあつても、散歩魅力は相変わらずであつてほしい。

極端な言い方だが、食べたり飲んだり買つたりしなくても、歩いているだけで楽しい町のままで。

たしかに雑誌を売るためには、店情報をたくさん載せることが必須。どんな方が買つていられるかをデモ販売のときなどに見ていても、チェックするのは必ずと言つていいほど「店」情報だ。しかし、いいなと思つた町には、自分と相性のいい店が必ずある。行き当たりばつたりだけど、なんだかよさそうと思つた店に入る冒険も、散歩の醍醐味だ。

「町」消費する場所」では決してない。「おいしい店情報」が重要なのは承知だが、「散歩の達人」はそれだけじゃない企画でどれくらい街を面白く伝えられるかが勝負、と思つている。



3回
でこの
特集
ま集
これ

山口昌彦/やまぐち・まさひこ
大人のための首都圏散策マガジン、月刊「散歩の達人」(交通新聞社刊)編集長。
早稲田大学教育学部卒業。九六年、創刊準備から編集部配属となり、以来ずっと「散歩の達人」編集部。二〇〇五年に編集長就任。パブル期だった学生時代は工事現場の日雇い仕事でいろんな町を転々とし、一人暮らしの憂さ晴らした孤獨の徘徊がやがて趣味に。でもそれが仕事になつてからは趣味はカヤック。現在四匹の犬と暮らし、毎朝犬とともに散歩に勤しむ。

谷中にコーポラティブハウス

東京の東側との出会い、そしてコーポラティブハウスに住むまで

清崎 裕子

谷中との出会い

九州で育った私は、大学生になってはじめて東京の住人になりました。そして、現在の谷中のコーポラティブハウスに落ち着くまで、なんと一三回の引っ越しを繰り返してきました。一三回の引っ越しには大した意味もロマンティックなエピソードもなく、単に引っ越しが好き、知らない町に住むのが好きということで、ちよつとお金が貯まるとアパートを代わっていました。

その頃の住みかといえば、独身の若者にふさわしい六畳と簡単な台所が付いたアパートで、地域は中央線沿線が専門。吉祥寺、阿佐ヶ谷、高円寺と、いわゆる東京の「西側」ばかりでした。ひとり者で、かつ不規則なテレビのADという仕事をしてきた私にとって、「西側」はとても住みやすいところでした。夜遅くに帰ってきてても、一人でふらりと入れるごはん屋さんや朝まで呑めるバーが



近くにある大きなヒマラヤ杉の聳える路地の入口。谷中は魅力いっぱいの路地のまちだ。

あります。コンビニがひしめきあっています。レンタルDVDの店も充実しています。本当に便利で何の不満もありませんでした。

ところが、三〇歳になる頃から何かもの足りなさを感じるようになりました。それは、「このまま九州に帰ることもなく東京で結婚して、子どももつくて年とっていくんだろうなあ」と考えはじめた時期でした。

そんなある日、番組の下調べで谷中の「大名時計博物館」に行くことになりました。「谷中？それどこ？めんどうだな」というのがその時の正直な気分。何しろ、当時私は「西側」の人間ですから、谷中へ行くのは「東側」へのちよつとした旅でした。

その日、日暮里駅で降りた私は、目の前の風景に啞然、軽いショックを受けました。寺や墓、坂道、ごちゃごちゃの家並み……「ここ、東京？」というのが第一印象。次に、何とも言えない懐か

しさを感しました。今も、谷中のことを『はじめてなのに懐かしいまち』なんて表現されているようですが、まさに、そんな感じ。私の育った九州の城下町のたまたまいにもどこか似ていました。

この、谷中初体験がきっかけとなって、私は「東側」に開眼しました。「東側」へ住みたい！それも谷中に！直観的に強く思うようになりました。さっそく転居作戦がはじまりました。休みの度に谷中を歩き回り、不動産屋を片っ端からのぞいてまわったのです。

その間にも「西側」と「東側」を強く意識する出来事がありました。

ある日、高円寺の駅のホームで男性が切符を落とし、彼はそれに気づかず行ってしまう。私は遠目に見ていたのですが、まわりの人は、男性が切符を落としたのを横目で見て知っているのに拾ってあげません。もちろん声も掛けません。関わりたくないのです。まあ、その男性がちょっとイカツイ感じで、声を掛けにくかったのかも知れませんが……「西側」をよく表している出来事だと思いました。

あくまで私の感じ方ですが、「西側」の間は地方出身者や独身者が多いせいか、クールです。私生活の中で、なるべく面倒な関わりをつくりたくない、他人は他人、一定の距離を保ち、おせっかいはやめてお互い自由にやりましょう……という感じ。私もそうでした。それを心地よく感じていました。

一方、同じころ、「東側」でも切符を落とした人を見ました。すると、同時に二人のおばさんと一人のおじさんが「あっ、落ちましたよ」「落ちたよ！」「落ちたよ」と声を掛けています。何だか笑っちゃうほどおせっかいです。でも、この「おせっかい」が私にとっては新鮮で、また懐かし、「東側」への興味と谷中に住みたいという想いを強くしました。

転居作戦を開始しておよそ二か月後、私は、谷中のはずれにアパートを見つけ、めでたく谷中の住人になることができました。

谷中は身の丈に合った町

谷中での暮らしは、期待を裏切ることなく快適かつ満足のいくものでした。私は、次第に谷中銀座商店街の魚屋や肉屋とおなじみさんになり、「よみせ通り」の飲み屋の常連になりました。

しかし、不慣れた面もありました。たとえば、大きなスーパーが無いので、ちょっとした日用品が簡単に手に入りにくいのです。フライパンの蓋を買うのにわざわざ合羽橋^{かっぱばし}まで行きました。洋品店（ー）はありますが、扱っているものはどちらかというと中高年がターゲット。靴下ひとつ買うのにデパートに行かなくてはなりません。さらに、呑んべの私にとって打撃だったのは、夜一二時過ぎてもやっている飲み屋が無いこと。

しかし、この町の日常……ある種の秩序は、こ

の不便さで守られている気がします。暮らしの中にハレとケの区別が未だ存在するのだなと感じました。人が人らしく自然なリズムで暮らしていることができる、身の丈に合った町……それが谷中だと思います。

その後、私は結婚し、子どもを儲けました。住んでいたアパートが手狭になり、いよいよマンションを探さなくてはならなくなりました。この時、これからは東京に住み続けるのならば、家賃を払うのはバカバカしい、いつそのこと「分譲マンション」を購入しようと考えたのです。

再び、移住大作戦です。この時、谷中以外の地域は私の選択肢にありませんでした。谷中で……身の丈に合った、おせっかいな人がいっぱいいるまちで子育てをしたいと願いました。わが子がかけがえない。黄金の子ども時代を送るには、谷中をおいて無いのでは、とまで思っていました。

既製のマンションには満足できない！

そこで、「マンション」を探しました。私の目的はただひとつ。子どもがいきいきと安全に暮らせるマンションを探すこと。それはそれは、たくさん物件を見ました。二〇件くらいは軽く見ました。でも、どれも気に入りません。何千万円も出して、どうしてこんなところに住まなければならないのか、私には理解できませんでした。

具体的に何が理解できない、不満だったかとい

うと……、①どうしてやたら間仕切る必要があるのか？（2LDKとか3Kとかどうしてそんな規格があるのか？ そんなの住む人が住みやすいように仕切ればいいじゃないか！）、②高層マンションに住む必要があるのか？（子どもが小さいと高い階はどうしても不安）、③全室フローリングにする必要があるのか？（日本には、畳という便利なものがあるではないか……）、そして、細かいのですが、④ウォシュレットは必要か？（子どもは、どこに行っても生きていけるように育てたい、中国の秘境、アフリカのサバンナにウォシュレットはない！）。

つまり、私から見ると、既製の「マンション」にはいろいろなものばかりがありました。さらに、三〇戸、四〇戸も入ったマンション……本当に失礼ながら、どんな人が住んでいるかわからない。中には子ども嫌いで、泣き声を聞いてキレる人がいるかも知れない。階下の人が神経質だとちよつとした物音でもクレームをつけられるかも知れない。騒音おばさんがいたら？ その筋の方がいたら？ 麻薬中毒患者がいたら……もう、きりがありません。一年くらい、物件が出ると内見を繰り返していましたが、もう、疲れてしまいました。

保育園仲間から誘われ、

コーポラティブハウスに参加

そんな時、息子の通う保育園で、Sちゃんのお

母さんに声を掛けられました。「ねえ、一緒にコーポラティブハウスつくらない？ あと一軒足りないんだけど……」。聞けば、谷中に住みたい家族が集まってコーポラティブハウスなるものを建てるのだといいます。さっそく、設計・監理を担当し、自らもそのコーポラティブハウスに入居するというYさんの話を聞きに行きました。Yさんは、以前から保育園のママ仲間を通してよく知っていました。他のメンバーもYさんの知り合いのこと……、私は、コーポラティブハウスのメンバーに加わることを決めました。

コーポラティブハウスを選んだ理由は、①住人の出自がはっきりしている⇒安心して子育てが出来る、②間取りや内装を自分で選べる⇒子どもが安全に暮らせる部屋づくりが可能、③ムダな出費が無い（いらぬウォシュレットを買わされること、無いというのはこちら、広告費や管理費など、本来デベロッパなどに払う費用が抑えられる）、そして何より、④谷中を愛し住み続けたいという共通の地域への想いをもった仲間と暮らしていける、というのが魅力でした。

長かった！ 辛かった！

コーポラティブハウスづくり

その後、話はトントン拍子に進み……といきたいところですが、それから竣工・入居までが、長かったこと、辛かったこと……。

まず、谷中に住みたいといっても、谷中には六世帯のマンションを建てられるようなまとまった土地がなかなか出ないのです。谷中はお寺さんのように寺町です。「いいな」と思う土地がお寺さんの持ち物だったりすると、もう交渉は困難になってしまうのです。紆余曲折あって、土地探しに二年近くかかったように記憶しています。

土地が決まったのはいいのですが、これまたご存知のように谷中は道が狭い。工事の車が入るのもやっとなです。そこで、初めに六軒でお金を出し合ってやったことは、N T Tの電柱を動かして道を広くすることでした。これが結構な出費でした。

また、谷中に限ったことではありませんが、関東地方に住むということは、地震のリスクと隣り合わせということ。ボーリング調査をして耐震強度を探りました。

専門的なことはわかりませんが、皆の希望で通常より入念に調査したと記憶しています。

そして、我が家だけのことでいうと、最大のネックは建設資金でした。もともと貯蓄は無く、親や銀行に借りることで何とか工事を進めていたのですが、いろいろな事情が重なり予定から超過した分の代金を支払えなくなりました。

そこで、最終的には、内装にかかる出費を極力抑えるという、手近でかなり力ずくの手段に出ました。そのころ、設計のY氏と私の間では、こんな会話がありました。

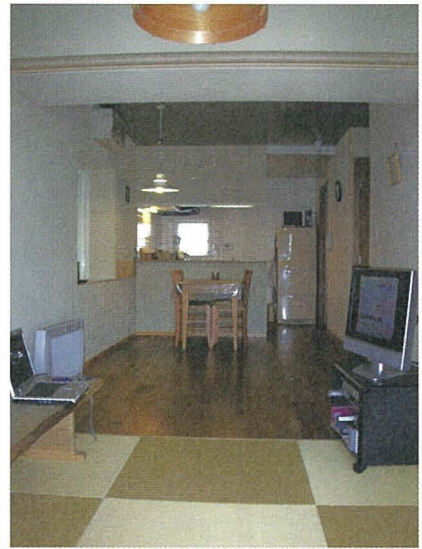
Y氏「このドアどうしますか？」 私「お金



上/台所にいてもリビングの子どもたちを見守れるように、対面式のキッチンにワンフロアになる家です。
左/子どものエリア。吹抜けの壁の途中に溝がついています。中学生くらいになったらこの溝に床をはめて、自分の部屋を作ってあげる予定（発展途上、子どもとともに成長する家といえます）。



上/とにかく畳の部分が多くし、子どもにその良さを伝えたかった。ふすまで仕切ることもできます。
右/台所からはリビングを通してバルコニーまで見通すことができます。



無いからいりません！」 Y氏「でも、無いとお風呂上りに台所から丸見えですよ？」 私「いいんです！　ウチは開放的なのがウリですから」 Y氏「でも、お客さん来たらどうします？」 私「いいんです！　その時は暖簾でも掛けます」…… という調子で、壁面の塗装から床暖房の範囲、キッチンセットのランク、果ては上り框の木板まで、全ての内装を見直しました。まったく壁の塗られていない部屋を引き渡すというのは、設計者としては、勇気のいることだったかも知れません。しかし、私はそれで、よかったですと思います。

お金が無いなら無いで、それこそ身の丈にあった家に住めばいいのです。

ただ、子どもが安全に暮らせる家づくりというコンセプトは死守しました。対面式のキッチン、扉を払うとワンルームになる間取り、天然木に床暖房システム、たくさんの畳スペース等々は、コーポラティブハウスの選んだからこそ実現できたのだと思います。

そんなわけで、この誌面には書ききれない、いろいろな出来事もありましたが、二〇〇二年五月、我々は、めでたく谷中のコーポラティブハウスの住人になりました。

資金面の事情で完成度八〇％くらいで入居した我が家ですが、それでも充分な住み心地です。子どもの成長と懐具合に合わせて、家も成長していくというのでしょうか、「発展途上の家」ってカンジが気に入っています。

コーポラティブハウスの住人として、 谷中の住人として

さて、ハード（建物）のことばかりを書いてきましたが、谷中のコーポラティブハウスに住んで五年、「ハート」……つまりご近所づき合いの面では本当に満足しています。

まず、細かいことですが、コーポラティブハウスでは、おすそわけの精神が健在です。つい先日、いなり寿司をたくさんつくったので階下のKさんに持って行きました。すると、すぐに「実家から蟹をいっぱい送って来たから」とお返しをいただきました。いなり寿司で蟹を釣るとは……。また、子どもの服や絵本、おもちゃなども随分お下がりをまわしてもらったものです。

夜中、お醤油等が切れていたら、コーポラティブハウス内の誰かにとりあえずの分を分けてもらったりもします。今どきサザエさんみたいですが、本当の話です。

子育てをしていく上では、随分と皆さんに助けをいただきました。仕事で帰りが遅くなったとき、息子にごはんを食わせてもらったり、果ては、泊まらせてもらったり……。忙しい時に声を掛けてもらっただけでありがたいものでした。

こうして書いてくると、コーポラティブハウスってかなり関係が密で面倒くさいものと感じられるかも知れませんが、そうでもありません。もともと、六軒とも共働りで、皆さん特に忙しい仕事

に就いているせいか、付かず離れずのほど良い距離感を保っています。

今回は、触れませんでした。とかく面倒といわれる住民による管理組合の仕事も、みんな忙しいことを理由にスリム化しています。年に一〜二回料理を持ち寄ってちよつとしたパーティをします。住人同士で地域の情報交換をするのも楽しみです。



わが家に集まってゲームに興ずる子どもたち。

さて、谷中のまちとの関わりといえば、こちらにも満足しています。

古い町で、年寄りが多いからでしょうか、その分、子どもを大切に、可愛がってくれます。町の人びとにも子どもにも声を掛けたり見守ったりする余裕があると思います。お祭りや消防団活動、バス旅行といったイベントが毎年律儀に催され、それを通して、子どもたちも地域の大人の顔を知ることができるようになりました。

最近、谷中界隈では私よりも息子さんの方が知り合いが多く、ボーッと歩いていると見知らぬ方に、「T君のお母さんですか？」と声をかけられます。また、「T君は通学路から外れて登校しますよ」とか「駄菓子屋で買い食いしましたよ」など通報いただくこともあります。

こうして、お互いの顔が見える規模のまちであることが、谷中に安心して住める大きな要因かなと考えます。当初、タイヘンな思いをし、多少無理をしても、谷中のコーポラティブハウスに参加して良かったと、つくづく思う今日この頃です。

最後に、私自身は、子どもが巣立ってもずっと谷中に住みたいと考えています。それだけに、いつまでもいわゆる「谷中らしさ」を失わないまちであって欲しいと願っています。

しかし、昨今の観光客の増加、それを見込んだ新規出店が相次ぐなか、「谷中らしさ」が損なわれはしないかと心配です。同時に、子どもを育ててくれたこのまちに、これからは、少しずつ、何らかの形でお礼ができれば……と考えています。まずは、地域住人の皆さんと「谷中らしさ」について話し合うことからでしょうか。

清崎裕子／きよさき・ゆうこ

フリーランスのテレビ番組ディレクター。

昨年、私たちのコーポラティブハウスの設計者であり住人でもあるYさんが、逝去されました。「住まい」についてたくさんの方の思索の機会を与えてくれたYさんに多謝！そして、ご冥福をお祈りいたします。

歴史的住まいでの共同生活

上野桜木 市田邸

中村 文美



写真一 市田邸 南側の庭に面する主屋の縁側。

自分が住まうことで一軒の建物を残すことができ、それは建造物の保存修復を学ぶ当時学生の私にとって、「文化財とは何か、建物を保存する意味は」という問いを紐解くいちばん身近な手段だった。単なる古い家ではなく文化財として建物の

筆者含め若い世代が共同生活をしながら日常管理を始めたのである。平成一七年には主屋・蔵・表門・裏門が国の登録有形文化財建造物となった。本稿では、市田邸の歴史、現在の活用に至るまでの経緯、歴史的建物で共同生活をしながら日常

価値を捉え、日常管理を実践してみよう。ひとりでは無理なので共同生活をしよう。安易で体当たりの発想ではあるが、東京芸大諸先輩方の現在までにわたる町への馴染みと、所有者の支援によって、「市田邸」での共同生活が実現した。

市田邸は、東京藝術大学の音校と美校を隔てる道の突き当たり佇む明治四〇年建築の屋敷型住宅である。平成一三年、この家を賃借するためNPO団体を立ち上げ、文化的活動の拠点として建物を活用しつつ、

管理をする住まい方について紹介したい。

市田邸と上野桜木の歴史

市田邸は、明治期日本橋で布問屋を営んでいた「初代市田善兵衛」によって建てられた。初代善兵衛は、滋賀県で生まれ一歳で中仙道を上り日本橋の商店に二二年間奉公し、その後、明治一〇年に金巾染物専門卸売業「市善商店」商標鬼若印を興した。その初代善兵衛が六〇歳を機に長男「善次郎」に商いを託し、明治四〇年上野桜木町にこの屋敷を建て本宅とした。施工は清水組、現在の清水建設であるという。

大正初期には二階を増築し、二世代が同居を始めた。大正五年の時点で、初代夫婦、二代目夫婦、三人の娘、女中の計八人が暮らしていた。二代目善兵衛は、その後の関東大震災の延焼を免れ、在郷軍人として治安に務め、家族で炊き出しを行な

い、被災者の救護に励んだという。

上野桜木は、江戸期より寛永寺の子院が建ち並んでいた地であり、市田邸も子院のひとつである松林院の敷地であった。明治中期から大正にかけて寛永寺が民間に分譲を始め、百坪単位の屋敷町として形成された。現在、当時の建物は、老朽化や世代交代、高齢化のために空家が目立ち、建替えやマンション開発等が進んでいる。市田邸と隣接する上野桜木会館（明治四三年築）は、二軒並んで上野桜木屋敷町の面影を残す、貴重であり、上野公園から谷中方面へ向かう入口の象徴的存在となっている。

下宿屋の思い出

戦後、二代目善兵衛の長女春子さん（大正元年生まれ）が、妹和子さんと共にこの家に住み、藝大（当時音楽学校）音楽科の学生を中心として下宿させていた。春子さんは三畳の女中部屋、和子さんは蔵を部屋にしていたという。下宿生用の部屋を四部屋設け、各部屋に一人、多いときには二人下宿させて計三十名ほどの学生が巣立っていたという。

当時の春子さんの朝は、六時に家中の兩戸を開け、掃除をすることから始まる。下宿生はその春子さんの足音で目覚めていた。また、市田邸では春子さんが下宿の方針を決めており、「門限は二〇時」「友達は茶の間までしか入れず、必ず春子さ

んに紹介する」「友達を泊めない」などのほか、「マージャンは駄目だけど花札はよし」など、春子さん流の決まりがあったという。

当時の下宿生にお話を伺うと、市田邸での春子さんとの暮らしを、現代社会にはないコミュニケーションションの場があったと懐かしそうに振り返る。

「表門の木戸をくぐり家に帰るとおばさんの『おかえりー』という元気な声が迎えてくれる。襖一枚隔てて、他人同士だった学生が住む。掘り炬燵がある茶の間で毎日先輩後輩にもまれ、おばさんの規律ある暮らしの中で過ごすといった体験が、ずいぶん人間を鍛えてくれた。あの日本間ばかりの家のつくりだったからこそ、コミュニケーション能力が磨かれた」。

上野桜木・谷中界隈は東京芸大関係者を含め多くの芸術家が下宿生活を過し、また屋敷を構えた場所である。町のあちこちで家賃の代りに作品を置いていったなどのエピソードが残っている。市田邸の下宿生は、音楽料が多かったこともあり、「黒湯（六龍鉱泉）の帰りに大きい声で歌ってくる市田部屋の連中」と近所の評判であったようだ。

住まいの甦生

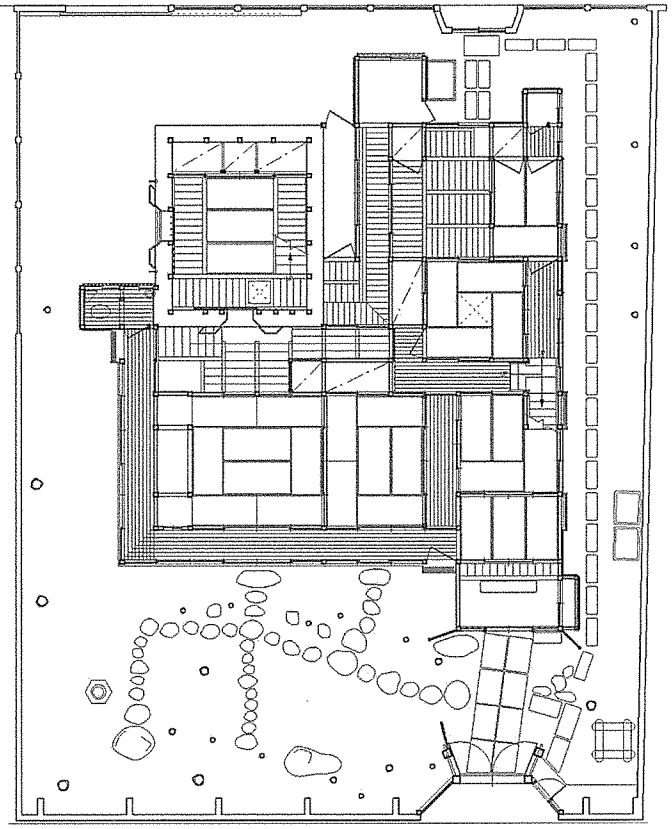
平成以降、市田邸は一〇年近く空家となっており、その間、柱の不同沈下や軸組全体の歪みや弛み、雨漏り、畳の腐れ、土埃の汚れが建物を傷めていた。

平成一三年三月、筆者を含め東京芸大有志が共同で住みながら建物の維持管理をしつつ、ときおり一階座敷を文化的催し・研究会会場にしてはどうかと、現当主である善一郎氏に相談、ご協力をいただけることとなった。

まずは、市田家住宅を借り受ける団体として『たいとう歴史都市研究会』（その後平成一五年一月NPO法人化）を立ち上げ、生活を始めるにあたり必要最小限の応急修理をすることとなった。戦後下宿生活をしてきた方々に当時の様子や今後の活用へのヒントを伺い、襖一枚隔てた距離で他人と暮らす、日本家屋での共同生活の暮らし方を引き継いでいこうと決め、修理方針は基本的に現状維持を図ることとした。

間取り・内装・外装は、基本的に今までの状態をそのままに使用するものとし、電気配線・給排水・ガス配管の必要な箇所の取り替え、台所・洗面所・便所・浴室の水廻り設備はある程度の快適性を重視し、新設、または中古の設備を用い改修した。躯体に関しては、軸部の歪みを修正し、雨漏りのする箇所の瓦据えなおし等の応急的な修理工事を行った。その他、家中十年間分のスス落とし、四九枚の障子棧洗いと障子紙張り、庭整備は、芸大関係者や友人、近隣の皆様に協力をいただきながら進めた。

その後、平成一五年には二階下屋の修理、防蟻対策等の修繕をした。襖は、講師を招いて張り替え講習会を催した。平成一九年には一部床組の補



市田邸平面図 平成13年修理前

強、吊束の弛み修正、公私境の整備、庭の竹垣整備を行なった。これらの工事は、所有者および当会の負担により、谷中の大工・菊池芳明棟梁を中心に、近隣の職人をお願いをしている。

建物の概要

市田邸は、約百坪の敷地周囲に塀を廻し、南側に腕木門を設け表門としている。門の袖塀腰板より上部は鼠漆喰としており、昭和中期までは東隣する現上野桜木会館の白漆喰の塀と白黒の対にな

心感につつまれる。

踏石のある玄関から、三畳の寄付き、縁側を通り八畳・六畳の座敷に至る。床の間の形式は、「花月床」といい、中央一間に床の間を、両脇半間を違棚とびわ棚とする。茶道の稽古法「七事式」を催すに適した造りとなっている。座敷の柱には榎の四方杵を用い、長押を廻さない教奇屋風の意匠をみせる。南と西のし字に縁側を廻す。座敷北面の襖を開けると廊下を介して黒漆喰で仕上げた木骨煉瓦造の蔵がある。蔵内部は畳敷きとなっており、昭和初期までは一階は仏間として使用してい

っていたという。また、道路から見て門上の丁寧に剪定された椎の木が印象的である。門をくぐると、右には空井戸があり、正面にむくり破風の玄関、西側に間口五間の一階縁側、二階に腰高無双窓と上部ガラス窓で全面開口となった開放感のある主屋が南面している。夕方、客人を見送り、表門の門かみきを閉めて振り返り、光がともった主屋を眺めると、なんともいえない柔らかな安

たそうである。現在ここまでを、市田邸を一般公開する際に見学・利用可能な範囲としている。南庭に面した空間を客用の座敷とし、その背後となる北側に家族の居間となる掘り炬燵こたつの部屋、吹き抜けて小屋裏が見える台所、三畳に専用便所の付いた女中部屋、風呂を置き、北側の道路に出る勝手口と裏門を設けている。市田邸は建築当初平屋であり、大正期に家族が増えるにあたり二階を増築したため通柱はなく、平屋当時の桁に補強をして二階の床梁としている。さらに一階と二階の平面がずれているにも拘わらず、関東大震災の際に瓦一つ落ちなかったという。また、古写真により、平屋当時の大正初期までは一階縁側にガラス戸がなく雨戸のみであったことが判る。戦後になって下宿屋を始めるにあたり、和室が並んだ間取りから個室化を図るため、一階各所に中廊下が設けられた。

安全に住まい、楽しく地域に開く

市田邸では、玄関から座敷・蔵・縁側・庭の一連の空間で、さまざまな文化的活動を行なっている。たいとう歴史都市研究会のメンバーが主催する催しとしては、市田邸のおひろめ（建物公開日）、谷中の写真展、勉強会、ミニコンサート、お茶会等。町中が展覧会場となる谷中芸工展への参加も恒例行事となっている（写真1-2）。他地域のまちづくり団体が谷中歩きをする際の休憩所として立

寄ることも多い。最近では、近隣のギャラリート共催で東京芸大卒業生の作品展示や映像の上映会をした。

昨年の暮れには、当会主催でもちつき交流会をやり(写真-3)、市田邸活動の関係者、近隣住民や、谷中散歩最中に偶然立ち寄った人びと等、百名ほどの参加者で賑わった。玄関先で餅をつき、座敷でまるめて、のんびり食す。町と建物がつながる伝統行事は、市田邸に良く似合う。

また、勉強会や会合の会場として貸出しをすることも多い。現代的建物の公共施設とは一味違った、びんと張り詰めた座敷の緊張感が、膝を突き合わせて話をするのにちょうど良い距離感と、好評である。そのほか、テレビや雑誌の撮影ロケセ

ットとしての利用を求める声も高い。このような家に住みたい、共同生活をしてみたいとの声も集まる。

貸出しをする際には、まず家の大掃除会等の催しに参加していただきながら空間の使い方を思案する。襖と障子を外せば、庭と座敷と蔵が一体の空間となり、六十人もの客人を招くことができる空間となる。特にギャラリートや集会所としての設備が整っているわけではなく、家を傷つけないための制限がある中で、あえてこの場所を使いたいと訪ねてくる方々が年々増えている。

平成一八年度には、文化庁委嘱事業「NPOによる文化財建造物活用モデル事業」により、『市田邸に安全に住まい、楽しく地域に開く為の仕組

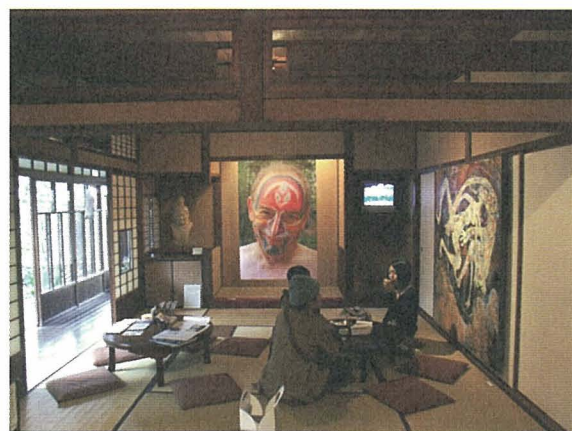


写真-2 市田邸座敷
谷中芸工展期間中の展示風景 平成19年10月。



写真-3 市田邸玄関先 もちつき交流会 平成19年12月。

みづくり事業』を行なった。市田邸の場合、所有者・居住者・管理者が異なる立場で建物の保存活用に関わっている。今後、より建物を広く公開していくためには、不特定多数が家に立ち入る中で、生活の安全を確保しなければならぬ。そこで、建物

を文化財として保存しながら住み継いでいく上で、前述した三者それぞれの立場における問題点・役割は何かを整理し、今後の保存計画の礎にすることをとした。具体的には、①公開や催しを実施する際に来場者アンケート等で、一般来場者の市田邸のとらえ方を調査、②防犯対策として有効な公私境(公開/管理/居住)間の装置・位置の検討、③所有者・管理者・居住者、各々の役割検討、ルール、しくみづくりを行なった。

そして、平成一九年度からは、たいとう歴史都市研究会の中に、市田邸の日常維持管理を担う作業チーム「市田邸部会」を設け、月一回程度の打合せおよび大掃除を行ないながら、今後の保存活用計画や、座敷を貸出す際の規約を作成している。

私の市田邸すまいるん

私は、学生時代から卒業して暫くの間の五年半をこの家で過ごした。現在は同じ台東区内に住みながら、市田邸の活動に携わっている。今も、市田邸では東京芸大はじめ近隣大学の学生を中心に後輩たちが四苦八苦しながら共同生活をしている。

〈建物を通して繋がるもの〉

市田邸に住んでから、東京や谷中に対するイメージが随分変わった。以前は東京の生活に自然を意識することができず、かわりに、皆、対人関係ばかりに縛られ大変そうだと思っていた。



写真一4 市田邸座敷
谷中ガールスカウトがお茶会参加 平成20年1月。



写真一5 市田邸前で障子の棧洗い 平成20年2月。

しかし、市田邸の生活では、建物を通して季節や自然を感じる事ができる。寒いし暑いし動植物や虫とも戦わねばならないし、ということだが、ともかく、それらの自然観や建物を守っていくという意識を共有する人びととの結束力が生まれる。そして、歴史ある家に住むことを通して、地域の歴史を身体で学ぶことができる。建物を介して、人と自然と町が繋がるのである。

〈家の記憶と共に暮らす〉

通常、賃貸した家や部屋に住む場合、以前この家にどんな人が住んでいたのかは、どちらかというのと知りたくないことかと思う。ところが、市田邸に住み始める際に、床下から天井裏まで覗き調

させた春子さんの幼少時代の日記が残されている。その中には、関東大震災の記憶等も綴られている。今も昔も変わらぬ空間を肌で感じることができるところ、家の記憶と共に暮らし、歴史を語り継ぐ実感がある。

〈学生時代の共同生活〉

市田邸での共同生活をもとに、現代の学生時代の暮らし方に疑問を感じ始めた。ワンルームマンションにオートロックという孤立したすまい方。一人に一揃いの住宅設備、電化製品。つい三十年ほど前の学生生活とは比較にならないほど、個人で生活するために便利な環境が整った。この時間があったくない。私もマンション住まいで電車通

査をして、大工や職人と会話をしながら磨き上げるうちに、以前同じようにこの家への愛着を持っていたであらう人びとに、自然と興味が湧いてきた。

蔵には、この家を建てた善兵衛氏の商売記録や、この家で生まれ育ち戦後芸大生を下宿

学をしていた時期があるが、この時間とお金と体力を違うことに使いたいと思っていた。

地域の文化財を守っていく手法として、若い世代が共同生活や下宿をするというスタイルが、定着しないだろうか。家を守る緊張感を共有して生活をする。生活の中に共通テーマがあるため他人同士でも結束力が生まれやすい。

かつては大勢で住むことで守ってきた住宅が、現在は高齢者の一人住まい、空家となつて朽ちていく例が各地で増えていると聞く。もちろん、クリアしなければならぬ問題点も多いが、環境的にはもちろんのこと、精神的にも贅沢な時間を過ごすことができると思う。住みごたえのある家である。

中村文美／なかむら・ふみ
一九九九年、武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。二〇〇二年、東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復建造物研究室修士課程修了。非常勤助手を経て現在同研究室非常勤講師を務める。〇一年、市田邸賃借に伴い、たいとう歴史都市研究会設立。〇三年、NPO法人化し、副理事長、市田邸部会代表。〇六年、合同会社もば建築文化研究所を共同設立し、現在に至る。

〈参考資料〉

・中村文美「谷中における木造住宅の保全活用に関する研究」東京藝術大学修士論文、平成一三年度。
・たいとう歴史都市研究会「上野桜木・市田家住宅」『住宅建築』二〇〇四年三月号（まちの記憶人のすまい―第二回）。

「ここはどこなの、いぢども来たことないみたい」……母は車椅子から半ば振り向いて声を少しはづませて言った。私は「つくば駅ができたからね」と言っつて、(もう何回も来ているのに)とはもちろん言わなかった。

母は手足の機能障害で車椅子でしたが、外出が大好きで外食やショッピングを毎日親子で楽しんでおりました。こんなに元気だった母も、一昨年十月、満九七歳の誕生日を前にして急に体調を崩し、水さえも喉を通らなくなつてしまいました。

入院検査の結果、(嚥下機能障害)で治せないとわかり、手術をして胃に直接カテーテルで栄養剤を注入する方法がとられることになりました。私は毎日病院に通つて、母の栄養投与の方法(胃ろう)を繰り返し練習して、ようやく翌一月、母を連れて自宅に帰ることができました。

寝たきりの母を在宅介護

母は寝たきりになりました。訪問看護の方々に助けられたからできた自宅療養ですが、公的援助は一日一時間

半ぐらいまで、土・日・祭日は休んでいただいていますから、胃ろうとおむつ交換のほとんどが私の役割となつてきました。そのうちに、電解質水分の投与が増えて朝四時半に起きない間に合わないようになりました。寝不足でベッドとキッチンの間を私がふらふらしながら行き来していますと、母はそれを見て笑います。「なに笑つてるのよ」と言つてみましたが、毎回笑いますので、それは私が一生懸命になつているのが嬉しくて笑っているのだとわかると、疲れも癒されて母がいとおいしくなるように思つたのです。

退院後は、自宅での入浴がむずかし



完成したつくばのバリアフリー住宅の室内。

くなりしました。ケアマネージャヤーの計らいで、毎週三回、介護施設の方の送り迎えで機械浴に入れていただくデイサービスを受けられるようになり、母は大変気に入っていました。

三月二六日、母は帰つてくるとベッドで両手を上にあげてグーチョキパーをしております。私はそれを見て(これなら百歳まで大丈夫だ)と内心ほくそえんでいたのですが、翌早朝一リツトルほどの嘔吐をしました。初めてのことでびっくりしました。落ち着いたところで「病院に行こうね」と言うと、弱々しく「うん」とうなずきます。

母の最期を看取る

私は車椅子をベッドに横付けて、母をそーと抱え上げましたら、母は私の顔を見ながら静かに目を閉じました。息が止まったようです。急いで少し応急手当を試みましたが反応がありません。病院に連絡して直行しました。私の車で二分後には救急治療室に入りましたが回復できませんでした。

母はつねづね自宅の自分の布団の上で死にたいと言つておりましたから、ほぼ願いはかないました。「お母さん、

苦しまなくて良かったね」それに「僕の腕のなかで亡くなつてくれてありがとう」。本当にありがとう。

あれから数か月も過ぎたというのに、この情景を思い出すたびに涙が止まりません。ところが最近、涙の途中から胸が温かくなつてきて、悲しいはずの気持ちなぜか楽しい気分になつてくるのです。これってなんだろう、そして私は、それが母からのメッセージだと受け取りました。「私はしゃべれなくて、最後の『ありがとう』が言えなから裕の腕のなかで死なしてもらったんだよ」。私が母を思う以上に、母は私を思いやっていたのだと気がついたのです。

住み替えの遍歴

さかのぼつて、このドラマの始まりは、一九九〇年、私と母が長年住み慣れた東京の住まいを処分して、茅ヶ崎の海岸近くの別荘に移り住んだことでした。私には、あこがれていた理想郷です。ところが母は二年もしないうちに「ここにはとても住めない、東京に帰りたい」と言うではありませんか。車椅子の母にとつて部屋から出る時が大変で、外出がつかつたのです。高齢で友達もつくれず、家に閉じこもる生活になつてしまいました。

今思えば当然考慮しなければならなということなのに、私は素晴らしい環境と

住まいを手にしたことに有頂天で、母の不便さに全く気を配りませんでした。こんなことをしてはいけけない、先の短かい母の人生を、まず幸せにしなければならぬのに……。

ここで私は自分の生き方、人生観を一八〇度転換させたのです。

とりあえず池袋のマンションに住みました。毎日広告を見て、これはと思えば見に行きましたが、納得できるものが見つかりません。そうして一年が過ぎようとしてあきらめかけた時に、建設省建築研究所(当時)の小林秀樹さんの今までにない新しい構想のつくば方式マンション計画を知ったのでした。場所が茨城県つくば市と離れていましたが、室内の自由設計ができることをはじめとして、それを問題にしないくらい素晴らしいものだとしてすぐに解りました。

私はそこに、ワンルームで手すりいっぱいのバリアフリー住宅をつくっていただきました。車椅子で五階の部屋から駐車場まで雨にもぬれずに外出できる思った以上に住みよい建物が、身体障害者の母と介護をする私の十一年を支えてくれたのです。

住空間がもたらした幸せ

一九九六年八月に入居して、母の表情は日に日に明るくなっていきました。二か月過ぎた頃のことです。ふと見る

と母は手すりにつかまって立っているではありませんか。私はビックリして駆け寄りますと、「大丈夫だよ、もう車椅子はいらないよ」。

母は密かに手すりです。それから私が片手をとって手すり伝いの歩行訓練を続けると、ステップで七、八m歩けるようになりました。

外出にはやはり車椅子が必要でしたが、足に力がついただけ移乗が楽になり、よく外出するようになりました。通院、ショッピング、外食と日に三回ぐらい出かけるのを楽しみました。それは私たち親子の今までで最も楽しい時期であったように思います。

新聞に山口家が紹介されると参観者が大変増えました。その方々に質問されることがあります。「満足度は何%ですか?」。私は「一二〇%です」と答えてから次のように話しました。「介護生活に充分満足な設計であるのが一〇〇%、ここでの生活で親子喧嘩がなくなり、その上母が少し歩けるようになってきたことを考えると、これは二〇〇%ですね」。

鈴木先生に恐縮のいたり

ある時、小林先生が私の恩師ですと



室内で、11年の生活を支えた車椅子と筆者、母。

小柄な老人を連れて来られました。一通りごらんになってソファに休まれたとき、その穏やかさに気安さを感じてついこんなことを話しました。「ここにたどりつくまで東京で住宅を随分見ましたが、どれもこれも2LDK・3LDKで同じパターンでした。どうして同じなんでしょうか、違う考えのものがあってもよいと思います……」。老先生は「私もそう思います」と言われ笑っておられました。小林先生も「同じ考えですよ……だから自由設計なのか。一年後、私は図書館で戦後復興の記事を読んでいると、そこにLDKのことが書いてありました。国は大量の集合住宅を造るにあたって様式を一新させるアイデアを求め、そこに鈴木成文東大教授らも関わった。それまでの茶台の畳生活から、キッチンに隣接した椅子式の食事室が提案され、その後、あこがれの文化生活として急速に普及していった。そこに老先生の顔写真が載っていました。恐縮のいたりであります」。

入居から四年もたつと見学者もなくなり、親子水入らずの日々が続いていきました。私はあらためて自分自身が変わったのに気がつきました。声をか

けられると直ぐ返事をするし、頼まれ事には直ぐからだ動ききました。それでいて自分のしたいことは充分にできるのです。

新しい住宅を選ぶとき最終的に決断するのは施主ですが、そこに住む家族は新しい環境による影響を少なからず受けることとなります。家庭内不和から離散に至る場合もありますし、和やかに育ち育てあう家族になる場合もありますが、室内設計と無関係だとは言えないように思います。私はそんな素晴らしい体験をさせて頂けたと感謝しております。

人生はこれから

私は今、後回しにした自分の人生を歩き出しつつあります。日々好日の心境です。私の人生のターニングポイントであった茅ヶ崎での決断が、もし母を言い含めてそのまま居続けていたら、地獄の生活になっていたに違いないと思いました。何故ならそれまでの私は「自己中心」的人間だったことを知ったからです。今ではおかげさまで、少しは人の気持ちが考えられるようになってきましたし、私に残された人生でできれば人のためにもなる生き方をしたと思っています。

山口裕／やまぐち・ひろし

青山学院大学経済学部中退。㈱サンラ イス・システム開発部長を経て、現在(株)デイスカウト45自営。

助成研究の要旨

2006年度の当財団の助成研究および前年度以前の未掲載分の助成研究の要旨を掲載しています。
論文の本編および研究論文評は、「住宅総合研究財団 研究論文集第34号」(2008年3月発行)をご覧ください。

〈2006年度助成研究〉

●研究No. ●研究題目

- 0601 農山漁村 | ターン者住宅の持続的活用・管理システムに関する研究
0602 スペイン植民都市の起源・変容・転成・保全に関する研究
0603 水上居民の家船居住と陸上がりに関する文化人類学的研究
0604 地域と大学の協働による防犯まちづくり手法に関する研究
0605 景観保全における伝統的環境システムの再編に関する研究
0606 川崎・戸手四丁目河川敷地区の経年的住環境運営に関する研究
0607 南廊下型立体路地(御坊市宮島団地再生1-5期)に関する研究
0608 市浦健の設計と諸活動に関する研究
0609 住宅ローンの選択行動と居住形態への影響に関する研究
0610 小規模民間まちなかコレクティブ住宅に関する研究
0611 京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究
0612 空間類型にもとづく集合住宅住戸の変遷に関する研究
0613 共用スペースの活用による高層高密度団地の活性化に関する研究
0614 台湾漢人住居にみられる〈総舗chóng-pho〉の調査研究
0616 居宅の延長としての宅老所の現況と展望に関する研究
0617 天井走行式リフター設置にともなう肢体不自由児の生活環境の変化
0618 要養護児童のグループホームにおける住環境と地域化に関する研究
0619 韓国都市部の社会的不利地域における包摂的な地域再生と居住支援
0620 地方の母子世帯の居住問題
0621 集落再生に向けての家屋等の記録と発信ツールの検討
0622 アジア都市における中高層集合住宅の再生事業に関する研究
0624 被災者住宅再建支援カルテシステムの開発
0625 宅地崩壊地区の住宅再建・生活回復に関する計画論的研究
0627 高齢者の個人差を考慮した快適室温の研究
0628 エステート鶴巻3におけるインフィルの更新実態に関する研究
0629 棧瓦・レンガのオランダから日本への伝播の実態について
0630 日・独「子どもがつくる街」等の事例からみた子どもの参画の要件
0631 吉阪隆正の住宅・都市理念に関する研究

●主査

- 中島 熙八郎
布野 修司
長沼 さやか
吉村 英祐
増井 正哉
新井 信幸
江川 直樹
速水 清孝
沓澤 隆司
徳尾野 徹
土本 俊和
花里 俊廣
小池 孝子
青井 哲人
山田 あすか
大崎 淳史
石垣 文
全 泓奎
葛西 リサ
寺本 晰子
鳴海 邦碩
高島 正典
石川 永子
佐々 尚美
南 一誠
小林 克
木下 勇
倉方 俊輔

〈2005年度助成研究〉

- 0506 近現代韓国における郊外住宅地の変容
0515 持続的居住へむけてのコーポラティブ住宅の再生手法に関する研究
0523 集合住宅団地外部空間の多様化とユーザビリティに関する研究
0525 小規模多様型ケア拠点の構築に関する研究
0526 未(非)婚成人と親との同居生活の実態と住要求

- 石田 潤一郎
丁 志映
田口 陽子
宮崎 幸恵
松原 小夜子

〈2002年度助成研究〉

- 0217 京町家居住者にたいする居住支援に関する研究

- 河邊 聡

農山漁村イーターン者住宅の持続的活用・管理システムに関する研究

主査 中島 熙八郎

団塊の世代は一九七〇年以降、その一部が大都市圏から地方県に向かうが、人口予測からも、特に強い地方回帰傾向は見られない。地方の町村では、近年、転入人口が一定の水準を維持するものが見られ、I・Uターンの存在が伺われる。ただ、年齢的には二五〜三四歳の転入が目立つ。また、これらの町村では、世帯主が六〇歳以降に、その世帯数は減少し、退職後世代I・Uターンの持家指向とともに、その継承意識の弱さとも相俟って、多くの空家の発生が見込まれる。高根県では、行政による空家の借上げ+改修等助成など優れた制度が見られ、その普及と習熟による、空家等居住環境ストックの、より若い世代への継承・活用が重要となっている。

キーワード…(1)団塊の世代、(2)コアホー
ト変換率法、(3)転出入人口、(4)空家発生
数予測、(5)I・Uターンの持家継承意識、(6)居住環境ストック

ス페인植民都市の起源・変容・転成・保全に関する研究

主査 布野 修司

本研究は、「植民都市空間の起源・変容・転成・保全に関する調査研究」と題する植民都市研究の一環であり、キューバのス페인植民都市を対象とし、その拡大深化を計ることを大きな目的としている。考察の大きな基盤としては、セビージャのインディアス古文書館に収蔵された植民都市関連地図資料である。まず、都市図を視点として都市モデルの類型を明らかにしている。また、臨地調査によつて得られた資料を加えて、街路体系、街区組織、宅地割に焦点を当ててその変容(変わるものと変わらないもの)について考察している。

キーワード…(1)キューバ、(2)ス페인、(3)植民都市、(4)インディアス法、(5)ハトとコラル、(6)グリッド、(7)広場と街路、(8)寸法体系、(9)街区組織、(10)住居類型

水上居民の家船居住と陸上がりに関する文化人類学的研究

主査 長沼 さやか

本研究は、中国両広(広東・広西)地域の河川流域・沿海域とその周辺地域を対象にして、「蛋民」をはじめとする水上居民の居住生態と陸上がりのプロセス、および陸地定住後の住生活の変容を文化人類学的にとらえようとするものである。ベトナムなどの東方アジアには現在でも、水上に居住する人びとが数多く存在する。その一方で、中国南部では国家政策による水上居民の陸地定住化が進んでいる。水上居住から陸上居住への移行には、ときに自発的な動きもみられるが、それを急速、かつ強制的に推し進めるのは国家政策の関与である。しかし、国家による強制的陸上よりもまたいくつかの問題を生み出してきている。

キーワード…(1)家船、(2)水上集落、(3)ベトナムハロン湾、(4)中国広東珠江デルタ、(5)蛋民、(6)水上居民、(7)水上人、(8)陸上がり、(9)国家、(10)社会変容

地域と大学の協働による防犯まちづくり手法に関する研究

主査 吉村 英祐

旧集落と千里ニュータウンを対象に、防犯環境調査、住民の治安意識の調査、地区内の地域安全マップの作成に基づき比較・分析した結果を各地域に還元することを通して、大学が防犯まちづくりを支援するモデルのありかたを検討した。地域のニーズを的確に把握する調査項目や調査方法を検討し、地元との協力を得て調査を実施すること、調査結果を地元に関わりやすい形で報告し、研究成果を地域に還元していく姿勢が重要である。地域・行政・大学の三者が信頼関係を築き、協働することで、地域が自立的に安全・安心まちづくりを継続的にスバイラルアップしていくことが可能になる。

キーワード…(1)治安、(2)不安感、(3)住民意識、(4)地域安全マップ、(5)地域と大学の協働、(6)千里ニュータウン

景観保全における伝統的環境システムの再編に関する研究

主査 増井 正哉

本研究のねらいは、集落景観を形成・維持・管理してきた伝統的システムの機能・組織等を明らかにしたうえで、過疎・高齢化などにより機能しなくなった部分について、どのようなサポートを行うべきかを実践的に提案することにある。対象は二〇〇五年一月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された徳島県三好市東祖谷落合集落とし、伝統的環境維持システムの変容について調査して、集落景観を保全していくうえでの課題を明らかにした。さらに、今後必要と考えられる集落外からのサポートのあり方について提案した。

キーワード…(1)景観保全、(2)環境、(3)維持管理、(4)重要伝統的建造物群保存地区、(5)山間集落、(6)農村、(7)茅葺き民家

川崎・戸手四丁目河川敷地区の経年的住環境運営に関する研究

主査 新井 信幸

本研究は、在日コリアンが集住する戸手四丁目河川敷地区の形成から解体までを記録し、同地区の住環境運営の特性について明らかにすることを目的とする。その結果、以下について明らかになった。同地区は一九六〇年前後の数年間に在日コリアンにより形成され、その後、初期居住者によるインフラ整備、賃貸経営、及び教会による生活支援が実施され、社会的弱者の受け皿で、かつ多様な生活スタイルを受け入れるまちなみになっていった。同地区の大部分は二〇〇六年に再開発によって解体され、ほとんどの居住者は地区外へと転居していった。

キーワード…(1)住環境運営 (2)河川敷 (3)在日コリアン (4)再開発 (5)不良住宅

南廊下型立体路地(御坊市宮島団地再生1-5期)に関する研究

南廊下型立体路地の利用実態と住民意識調査(設計者の視点から)

主査 江川 直樹

和歌山県御坊市宮島団地は、住民参加の手法で建設された集合住宅団地であり、一般的な集合住宅団地では実現できない南廊下型立体路地を大々的に取り入れた事により、学会で高く評価されている。本研究は、島団地の立体路地の居住者による使われ方、評価を調査することにより、南廊下型立体路地のもつ意味と、問題点を明らかにした。調査の結果、立体路地では、地面以上にさまざまなモノが溢れ、地面と同様あるいはそれ以上に居住者の行動が表出しており、居住者が接地性が高いと感じる事の出来る集合住宅となっていた。一方で、トラブルはないものの自分の領域が守られていないと感じる居住者もいる事が明らかとなった。

キーワード…(1)御坊市宮島団地 (2)団地再生 (3)南廊下型 (4)立体路地 (5)利用実態 (6)居住者意識 (7)接地性 (8)テラス (9)共有空間 (10)リビングアクセス

市浦健の設計と諸活動に関する研究

主査 速水 清孝

建築家・市浦健が建築界に残した足跡を包括的に明らかにし位置づける研究の端緒として、本研究では次のことを行った。①市浦の設計事務所開設以前の作品の収集と分析、②戦時下の建築新体制構想において果たした役割の解明、③戦後、日本建築家協会会長を辞した後に示した建築家法の提案の背景とその意味の解明、である。ことに①・③では、晩年には、庶民住宅を中心に活躍したと自らを振り返る市浦と住宅との関係を通して、これらを明らかにしている。

キーワード…(1)建築家 (2)市浦健 (3)職能 (4)住宅 (5)建築新体制 (6)建築士法 (7)建築設計監理業務法 (8)建築家法

住宅ローンの選択行動と居住形態への影響に関する研究

行動経済学の観点からの住宅金融と、その住まい方への影響の分析

主査 香澤 隆司

今日の日本の住宅ローン市場は、フラット35と呼ばれる証券化を通じて長期・固定ローンが供給される一方で、民間からは多様なローン商品が供給されるなど急速に変化している。こうした変化を分析するため、利用者のローン選択の要因、期限前償還、借り換え、延滞等の要因について操作変数法、比例ハザードモデル等を用いて推定した。この結果、金利水準の変化、利用者の危険回避度のほか、居住の移動可能性や新築中古の別などが影響し、金利上昇がローン選択の変化を通じて住宅需要を下落させることがわかった。また、証券化のために発行されるMBSの投資家は、株式よりはリスク回避的であるが、公社債よりは収益性重視の傾向が認められる。

キーワード…(1)フラット35 (2)証券化支援制度 (3)危険回避度 (4)操作変数法 (5)期限前償還 (6)延滞 (7)比例ハザードモデル (8)MBS (9)プロビット分析 (10)トビット分析

小規模民間まちなかコレクティブ住宅に関する研究

住まい方の多様性から住宅街地の持続性をみる

主査 徳尾野 徹

本研究の目的は、個人事業主による小規模コレクティブ住宅が、既存住宅市街地に立地する集合住宅として大きな可能性を持つことを明らかにすることである。神戸市・大阪市・徳島市の三事例を対象として、ヒアリング調査、アンケート調査、観察記録調査を実施し、建設動機・計画プロセス・運営の実態、居住者の入居理由や評価、コミュニティの使われ方を探った。以上の調査結果から小規模コレクティブ住宅が多様な住まい方を許容し、住宅市街地の持続性に寄与することが分かった。その一方で、安定した質の確保と潜在的な入居希望者に対する広報に課題があることも明らかになった。

キーワード…(1)コレクティブ住宅 (2)個人事業主 (3)多世代 (4)持続性 (5)まちなか (6)コミュニティスペース (7)住まい方 (8)住宅市街地 (9)賃貸住宅 (10)管理人

京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究

建物先行型論と棟持柱組型論にもとづく建築コラーージュ形態史論

主査 土本 俊和

本研究は、京マチヤが生成される過程として原形と変容をあつかい、京マチヤが他地域につたわる過程として伝播をあつかった。この三者をあつかう際、建物先行型論と棟持柱組論という研究蓄積をふまえた。その上で、原形と変容をあつかう際、建築コラーージュという観点をあらたに導入し、伝播をあつかう際、建物条件付き都市という観点を導入した。建築遺構と考古学的発掘という従来の資料を基礎としつつ、以上のあたらしい観点にもとづいて、京マチヤを再検討し、以下の仮説をえた。京マチヤは市立での最小単位であり、その地方への伝播は都市形成の最初期に特定の都市域に対する建物条件として京マチヤが採用されたことによる。

- キーワード…(1)マチヤ、(2)町屋、(3)町家
- (4)棟持柱、(5)ワダツ、(6)卯建、(7)土塀
- (8)土台、(9)建物先行型、(10)コラーージュ

空間類型にもとづく集合住宅住戸の変遷に関する研究

個室分離型から居間中心型への移行

主査 花里 俊廣

本研究は、隣接グラフによる類型化に基づき集合住宅住戸の変遷を再検証したものである。研究の第一段階では、公団の標準設計、公営住宅、超高層集合住宅、コーポラティブ住宅、建築家による集合住宅の提案など対象となる住戸を特徴あるグルーピングに分けて調査・分析し、近年、様々に提案される新しい住戸には居間の中心性を高めた間取りが多く提案されていることを示し、その現代的な意味を考えた。研究の第二段階として、隣接グラフによる空間構造の分析に基づき、集合住宅の導入期から現在までの住戸平面の変遷を歴史的に概観する年表を作成した。

- キーワード…(1)集合住宅、(2)住戸、(3)隣接グラフ
- (4)公営住宅、(5)公団標準設計
- (6)超高層集合住宅、(7)コーポラティブ住宅
- (8)建築家、(9)居間連結型、(10)下連結型

共用スペースの活用による高層高密度団地の活性化に関する研究

主査 小池 孝子

本研究は、市街地に一九六〇～七〇年代に建てられた高層高密度団地の共用スペースに着目し、団地活性化の方策について考察を行うものである。住棟一階共用スペースについては、築後三〇～四〇年が経過する中で時代のニーズに合わせてその機能を変えているが、特に子ども施設への転用が多く見られる。団地居住者の少子高齢化が進む中でも、共用施設の役割が居住者だけのものから周辺地域の空間環境が子ども遊び場に適している事から、子ども施設への転用が続いていると考えられる。一方居住者も子ども施設が存在が団地に活気を生むと評価しており、店舗増加等、荒廃化が進む団地において、今後子ども施設が団地再生、地域コミュニティ発展の核として役割を果たすことが期待できる。

- キーワード…(1)市街地、(2)高層高密度団地
- (3)共用空間、(4)転用、(5)子ども施設

台湾漢人住居にみられる〈総舖 Tongpu〉の調査研究

日本植民地期以降の〈眠床〉―〈和室〉の結合とそのゆらぎ

主査 青井 哲人

台湾漢人の間では、住宅内の房間(居室)の一部ないし全部に床を張り、その上に雑魚寝する生活が広く行われてきた。この揚床をホロー語で「総舖 Tongpu」と呼ぶ。眠床(寝台)を置くのが常識とされる漢人住居になぜこのような特異な変容が生じたのか。本研究では植民地期における台湾家屋・日本家屋の交渉関係をこの「床」の存在に注目して検討する。彰化縣田中(市街地)、台南市灣裡(村落)での集中的な調査と、台湾各地での事例収集の結果を踏まえ、総舖の現存状況や類型を把握した上で、(1)起居様式、(2)家族社会、(3)文化意識、(4)材料と技術、の各視点に沿って現段階での知見を示し、総舖を歴史的に位置づけるための仮説と課題を提出する。

- キーワード…(1)台湾漢人住居、(2)総舖、(3)眠床、(4)揚床、(5)竹床、(6)和室、(7)職人様式、(8)家族社会、(9)文化意識、(10)職人(大木・小木・量職)

居室の延長としての宅老所の現況と展望に関する研究

地域性による位置づけとニーズの相違に着目して

主査 山田 あすか

本稿ではまず、全国の事業所へのアンケート調査、抽出事例でのヒアリング・観察調査によって宅老所・小規模多機能施設の全国的概況と運営実態、「宅老所はどのような特徴をもち、どのような人を対象に、どのように運営されているのか」を把握した。次に、地域特性を「都市・市街/都市・郊外/地方」「駅近/駅遠」に分類し、独居・同居の別や就労など家族・介護者の状況、介護観、高齢者施設整備の状況、近隣他者との関わり方、など介護ニーズの地域差を生む要因を整理した。さらに、三地域五事業所の利用者の利用圏域や家族の状況等の詳細な調査をもとに、地域の特性と介護ニーズの関係、地域性に根ざした宅老所のあり方について考察した。

- キーワード…(1)宅老所、(2)小規模多機能型居宅介護施設、(3)地域性、(4)在宅高齢者差、(5)弾力的な運営、(6)介護ニーズの地域差、(7)高齢者施設整備の状況、(8)介護者・家族の状況、(9)利用圏域

天井走行式リフター設置にともなう肢体不自由児の生活環境の変化

肢体不自由児の住宅における生活環境に関する事例研究

主査 大崎 淳史

肢体不自由の障害をかかえる子ども(以下、肢体不自由児)のための生活環境デザインの指針を求めるため、肢体不自由児の住宅事例を対象に、天井走行式リフターを導入した場合の生活への効果・問題点について明らかにした。対象は国内が二事例、ノルウェー国が一事例である。調査・考察をす

キーワード…(1)肢体不自由児、(2)移乗介助、(3)天井走行式リフター、(4)抱きかかえ、(5)生活環境

要養護児童のグループホームにおける住環境と地域化に関する研究

主査 石垣 文

要養護児童のためのグループホーム(GH)における住環境と地域化を考察した結果、1. GHの家屋選定は、室面積や本体施設との距離、周辺環境や住民の顔ぶれ等が考慮されていたものの、様々な制約の中で選択余地のないホームも確認された。2. 職員の築いてきた社会関係をもとに、GHは近隣住民等からの理解・支援をうけており、3. GH入所児は本体施設入所児に比べて、施設外の子どもや大人との関わりが活発である傾向がみられた。一方で、4. 関係構築には数年程度の歳月と職員

キーワード…(1)児童養護施設、(2)要養護児童、(3)グループホーム、(4)すまい、(5)ノーマライゼーション、(6)コミュニティケア、(7)社会関係、(8)地域化、(9)被虐待児

韓国都市部の社会的不利地域における包摂的な地域再生と居住支援

主査 全 泓奎

本研究は、社会的な不利地域における居住支援と地域再生モデルを探るために実施した。ここで取り上げたチョッパン地域には、生活が脆弱な中高齢男性や障がいを持つ単身生活者が多く居住しており、韓国では代表的な社会的不利地域の一つである。調査の結果、第一に同地域では民間のきめ細かな対応が有効に働いている点、第二に地域改善に向けた制度的なバリアを解決する必要がある点、第三に同地域が脱野宿など社会的な居住機能を果たしており、地域で住み続けることを望んでいる人々が多く居住している点、第四にチョッパンの経営者及び管理者も地域の肯定的な機能を評価しており

キーワード…(1)社会的排除・包摂、(2)社会的な不利地域、(3)オン・サイトの地域再生福祉、(4)居住支援、(5)居住福祉資源、(6)居住福祉、(7)安心居住、(8)自活居住、(9)地域力、(10)韓国

地方の母子世帯の居住問題——住宅確保の実態と問題点を中心に

主査 葛西 リサ

本研究では大都市の事例として大阪、地方の事例として鳥取を取り上げ、母子世帯の住宅事情及び住宅確保の実態について考察した。その結果、最低居住水準の達成率や住居費負担率については鳥取県が大阪よりも良好だが、両地域ともこれらの結果は一般世帯よりも低位にあることがわかった。また、いずれの地域においても、母子世帯に対する住宅支援の不備から、母子世帯は離婚等を期に転居する割合が高いが育児や経済的問題から住宅確保が困難となっている事実が明らかとなった。本稿では、鳥取県のDV被害者に対する住宅支援についても検討している。

キーワード…(1)母子世帯、(2)住宅問題、(3)都市、(4)地方、(5)貧困、(6)格差、(7)低居住水準、(8)家賃負担、(9)ドメスティックバイオレンス、(10)緊急一時保護

集落再生に向けての家屋等の記録と発信ツールの検討——中越地震による被災集落「法末」を通して

主査 寺本 嘶子

対象とした法末集落は、中山間地という地理的条件に、豪雪が加わり、さらに二〇〇四年、二〇〇七年に震災に遭った。高齢化率が六六・四%、集落の担い手不足は深刻で、約二〇年前から各種対策を講じている。

震災復興に際し我々は、建築や景観資源が豊かであることに着目し、それらを学術的に位置づけ、発信する方法を検討した。その結果、法末の民家は江戸末期から明治期までのものが大半を占め、積雪のための補強や、冬季の採光の確保、降雪・積雪時の出入りへの配慮など、雪に対する知恵が集積していた。

キーワード…(1)中山間地、(2)震災、(3)定住、(4)雪対策、(5)景観

アジア都市における中高層集合住宅の再生事業に関する研究

——香港の都市再生への取り組みを通して

主査 嶋海 邦碩

日本をはじめアジア諸都市では、高層集合住宅の建設が急速に進んでいるが、その一方で、老朽化した中高層集合住宅のたらず問題も大きい。そこで本研究では、住民の九九%が集合住宅に住んでいる香港で、都市再生局が都市再生の一つの手法として用いている建物再生事業に注目し、その手法を理解した上で都市再生における効果を検証した。観察調査やヒアリング調査の結果、香港での集合住宅再生事業は、抜本的方策ではないが、地域の持続性、住宅市場の活性化、事業そのものの波及効果、地域を活気づける効果が期待でき、わが国の地区再生に対しても示唆する点があることが明らかとなった。

キーワード…(1)香港、(2)中高層集合住宅、(3)老朽集合住宅、(4)集合住宅の再生、(5)建物改修、(6)都市再生局、(7)4R戦略、(8)地区再生

被災者住宅再建支援カルテシステムの開発

——被災者・行政間における住宅再建計画と再建状況の共有に向けて

主査 高島 正典

個々の被災者の住宅再建を、被災者と行政が共通の理解のもとで進めていくことは、円滑な支援業務を実施する上で極めて重要である。本研究では、二〇〇四年新潟県中越地震で被災した小千谷市の被災者生活再建支援業務に関するエスノグラフィ調査の結果を踏まえ、各被災世帯の被災状況、世帯構成、所得、健康状態といった基礎的情報から、相談内容、申請状況、再建方針までを一元的に管理し、顧客志向の再建支援業務を進める為の被災者住宅再建支援カルテシステムを開発した。また、このシステムを実際に二〇〇七年能登半島地震で被災した穴水町に導入し、その有効性を検討した。

キーワード…(1)CRM (Customer Relation Management)、(2)被災者生活再建支援、(3)顧客志向、(4)サービス・マネジメント、(5)相談窓口業務、(6)住宅再建、(7)二〇〇七年石川県能登半島地震、(8)穴水町

宅地崩壊地区の住宅再建・生活回復に関する計画論的研究

——中越地震災害での集団移転事業・宅地耐震化事業を中心に

主査 石川 永子

新潟県中越地震の復興では、中山間地域や都市近郊の造成住宅地での「地盤災害」による被害が特徴的であった。その復興に際して集団移転をした集落では、宅地のみならず生業に関係する農地の復旧が持続可能な地域づくりには重要である。また、移転事例は、被災程度や移転先立地条件、自治体の復興方針などにより分類でき、居住者の希望や生活再建に特徴があることがわかった。一方、都市近郊の造成団地では、公道の復旧工事から始めて宅地を復旧したため、多数が住み続けることとなったが、住まいの安全性に不安を持ちつつも二重ローン等経済的な理由から団地内に留まっている世帯も多く課題も残っている。

キーワード…(1)新潟県中越地震、(2)移転復興、(3)地域の持続可能性、(4)地盤災害復旧、(5)住宅再建、(6)生活再建、(7)段階的復興、(8)宅地耐震化

高齢者の個人差を考慮した快適室温の研究

主査 佐々 尚美

高齢者の生活習慣や温熱的特性に応じた快適な室内温熱環境を検討する事を目的として、高齢者が好む室温の把握および設定環境下における人体反応の違いを把握する人工気候室実験と、日常生活習慣に関するアンケート調査や室内温熱環境の実態調査を実施した。高齢者の好む室温は、平均値では若齢者より高く、その時の生理反応は異なっていた。また、設定室温下の生理心理反応は、平均皮膚温は同様の傾向を示したが、気温が低い場合に高齢者の末梢部皮膚温は若齢者より高く保たれ、血圧は上昇し、体温調節機能の衰えが示された。また、高齢者の中でも、性別、血圧等の違いにより好む気温や設定室温下における人体反応は異なっていた。

キーワード…(1)高齢者、(2)皮膚温、(3)温冷感、(4)快適感、(5)個人差

エスレート鶴巻3におけるインフィルの更新実態に関する研究

主査 南 一誠

本研究の目的は、共同住宅の個別性、多様性を確保し、長期間に渡る生活の変化に対応するためインフィルに可変性、更新性を持たせたKEPの開発意図の有効性を検証することである。KEPの研究成果を取り入れて一九八二年に建設されたエスレート鶴巻3の中層棟と低層棟の居住状況を、竣工後二三年目に調査・分析した。エスレート鶴巻3については、竣工直後の一九八三年と入居後一二年目の一九九五年に居住実態調査が初見学らにより行われている。本研究は同様の調査を行って、二〇年以上が経過した時点で行うものである。今回の調査によって、子供の成長や独立などライフステージの各段階において、生活の変化に対応した間取り変更が高い割合で実施されることが確認できた。居間を広くすることや私室の数を調整することなど、限定された間取り変更ではあるが、入居者の個別の要求に対応してKEPのインフィルシステムが、計画当初の意図どおりの可変性を有していたことが認められた。

キーワード…(1)集合住宅、(2)KEP、(3)居住履歴、(4)間取り変更、(5)住みこなし

棧瓦・レンガのオランダから日本への伝播の実態について

——オランダ東インド会社関連遺跡とその出土資料の分析を通じて

主査 小林 克

オランダ各都市・アユタヤ・ゼーランディア・平戸・長崎(出島)から出土した資料をサンプリングし、胎土分析を行った。この結果、黄色レンガは、オランダ地域からアジア各地にもたらされた可能性が高いこと。平戸・長崎(出島)出土の赤色レンガの多くは台南地域からもたらされた可能性が高いことが明らかになった。更に日本の瓦と同質のレンガが平戸と出島から確認され、日本人によりレンガが生産されていたと考えられる。オランダ式棧瓦も、タイ・アユタヤのオランダ人居住地と、インドネシア・バンテン遺跡からも発掘されていた。アユタヤで確認されたオランダ式棧瓦については、アムステルダム出土棧瓦との比較を行ったが、明確な差異は確認出来なかった。

キーワード…(1)レンガ、(2)棧瓦、(3)VO C、(4)胎土分析、(5)近世考古学交流、(7)発掘調査、(8)ゼーランディア、(9)アユタヤ、(10)蛍光X線分析

日・独「子どもがつくる街」等の事例からみた子どもの参画の要件

——ドイツ「ミニ・ミュンヘン」の背景と我が国の波及事例から

主査 木下 勇

ミニ・ミュンヘン(MM)とその影響を受けた日本の一六事例を含めて「子どもがつくる街」をケース以下の子どもの参画の要件を抽出した。①「遊び」に「本物」を取り入れ、ごっこ遊び一学び一参画の展開。②空間は作り込んだ本物似の街の舞台とその体験から自らつくりあげる自由空間の組みあわせがMMの特徴であり、日本では催しの非日常空間と商店街など日常空間が連動する特徴がある。③組織・制度面では遊びと参画の専門的職能の発展、組織間の連携、企業、専門家の支援が成り立つ原理や国際的枠組みからの子どもの参画の位置づけが課題。④手法としてワークショップに長けたファシリテーター、ジュニアリーダーの役割が重要。

キーワード…(1)参画、(2)子ども、(3)ドイツ、(4)住まい・まち学習、(5)まちづくり、(6)遊び(ロールプレイ、ごっこ遊び)、(7)補完性の原理、(8)NPO、(9)本物、(10)ミニ・シティ(子どもの街、遊びの街)

吉阪隆正の住宅・都市理念に関する研究

主査 倉方 俊輔

都市デザインを専攻し、ル・コルビュジエのアトリエで学んだ吉阪隆正(一九一七—八〇)は、とりわけ住宅と都市の分野において、現在も考慮に値する数々の成果を生み出した。本研究では、彼の住宅・都市理念の形成過程と特質を、旧蔵資料や論考に基づいて検討した。その結果、終戦前に獲得していた「建築地理学」の方向性が、戦後の幅広い研究交流を糧に独自の「住居学」に結実し、留学中のル・コルビュジエとの出会いが彼と「住居学」の読み替えをもたらした過程が明らかになった。また、それらの総合としての吉阪の住宅・都市の理念が、人間の行動を中心に「住居」の延長として「都市」を捉えることなど、七項目の顕著な特質を持つことが判明した。

キーワード…(1)住居学、(2)都市計画、(3)地理学、(4)第二次世界大戦、(5)戦後復興、(6)ル・コルビュジエ、(7)今和次郎、(8)石川栄耀、(9)秀島乾、(10)丹下健三

近現代韓国における郊外住宅地の変容

——ソウル・大邱での日本統治期土地区画整理事業の実態と戦後の変貌

主査 石田 潤一郎

本研究は、一九三〇年代以降、韓国の郊外住宅地がいかにして形成され、どのように変容してきたかをソウルと大邱の土地区画整理事業地について探ったものである。「京城府」による一〇地区、「大邱府」による二地区について、その具体的な計画内容を把握し、そこでの日本人都市計画技術者の理念を解明した。これまであいまいであった戦時中の施行進捗状況を明確にするとともに、戦後の変容を調査した。その上で、「京城府」西郊の大岷地区を詳細に調査し、日本人による「外庭・低建蔽率」イメージに基づく計画が、戦中・戦後の韓国都市の状況と齟齬を来たしていく過程を明確にした。

キーワード…(1)朝鮮半島、(2)植民地期、(3)一九三〇年代、(4)郊外住宅地、(5)住宅地開発、(6)土地区画整理、(7)ソウル、(8)大邱、(9)都市計画

持続的居住へむけてのコーポラティブ住宅の再生手法に関する研究

——建設後、長期間経過した事例を通して

主査 丁志映

日本のコーポラティブ住宅は、建設当初から居住者が参加するところに特徴があり、それにより良好なコミュニティが生まれるといわれている。しかし、建設当初の居住者のコミュニティは、建設から月日が経つとともに、入居者の入替わりや高齢化により薄れつつあると考えられる。本研究では、建設後二〇年以上経った三七事例と一〇〜一九年経った二一事例のコーポラティブ住宅を研究対象とし、アンケートおよびヒアリング調査により、経年に伴う住まい方やコミュニティ活動の変化、住戸の中古売買や賃貸化の状況、および建物大規模修繕や維持管理の状況について明らかにし、年数を経たコーポラティブ住宅の再生手法の提案を行った。

キーワード：(1)コーポラティブ住宅、(2)持続的居住、(3)入替わり、(4)経年変化、(5)高齢化、(6)老朽化、(7)コミュニティ、(8)住戸数、(9)再生

集合住宅団地外部空間の多様化とユーザビリティに関する研究

——オランダ住宅団地再生におけるサステイナブル・デザインの検証

主査 田口陽子

本研究では、住宅地計画におけるサステイナブル・デザインの検証を目的とし、再生事業が行われたオランダのバイルマメーア住宅団地を対象に、外部空間の多様化を住棟立面と屋外領域の複合により把握することで、それぞれの状況形成を表出要素により確認した。まず事業計画を検討することにより、二三の外部空間に面する九四事例の住棟立面を抽出した。また、関係者へのインタビューの意匠操作に関する内容から、住棟立面および屋外領域に関する外部空間の構成要素を抽出した。住棟立面と屋外領域における要素の複合から九タイプの断面構成を見出し、各断面構成における表出要素を検討することで、外部空間の構成が状況形成に寄与していることを確認した。

キーワード：(1)オランダ、(2)住宅団地、(3)空間の再生、(4)外部空間、(5)表出要素、(6)リサーチ・バイ・デザイン、(7)サステイナブル・デザイン

小規模多様型ケア拠点の構築に関する研究

——地域社会における居住支援のネットワーク化を推進するために

主査 宮崎 幸恵

共生型のまちづくりを推進していくためには、行政のみの支援だけではなく、行政と民間事業者との協働による取り組みが重要である。本研究では、NPO等が小規模多様型施設(宅老所等)を開設するに際して資金等を助成している滋賀県、長野県の事例を調査した。多様な階層が利用できる場づくりは、少子高齢社会における居住支援策として重要であるが、運営面での課題も多い。課題を解決していくためには、行政と連携しながら、施設間のネットワークを強化していく必要がある。

キーワード：(1)高齢者、(2)高齢者施設、(3)地域拠点、(4)小規模多様型、(5)居住支援、(6)まちづくり

未(非)婚成人と親との同居生活の実態と住要求

——成人同居期の住まい像を探る

主査 松原 小夜子

成人した子と親がともに暮らす「成人同居期」の実態を生活面の自立という視点からとらえるために四つの調査を行った。その結果、「生活面の世話」「生活音」の二つが主たる問題であることがわかった。これは、子が二〇代よりも三〇代の場合に一層顕在化し、男性の子では、高齢化する親が、子の生活の世話、生活リズムの違い、生活音に悩み、女性の子では、むしろ親が子を頼りにする様子が浮かび上がった。成人同居期の暮らしには、子・親、男・女ともに生活面の自立能力を身につけ互いに協力共同することが求められ、住まいの点では、子と親の部屋の適度な距離と独立性、防音性能、トイレ・洗面等の複数設置などの工夫が必要である。

キーワード：(1)成人同居期、(2)シングル化、(3)住要求、(4)生活自立、(5)生活依存、(6)生活音、(7)衣食住教育

京町家居住者にたいする居住支援に関する研究

——居住不安に関する研究

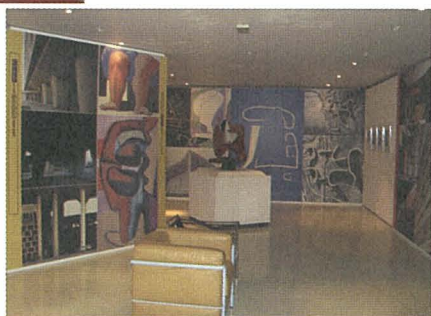
主査 河邊 聡

京都の都心部には、平成一二年の調査で三万戸の伝統町家があることが分かっていた。その後年々数は減少しているといわれる。町家では日々の生活が営まれ、その上で都市的・文化的価値の高さが語られる。(財)京都市景観・まちづくりセンターは、京町家居住者からの様々な相談に応じる町家相談会「京町家なんでも相談」を平成一三年度に立ち上げた。本稿は、この相談会に寄せられた町家居住者からの相談内容をヒアリング形式で間接的に学習し、それを参考資料とした。資料から居住にかかわる不満・不安を抽出・分析し、問題点の把握と理解をした上で、今後居住不安解消の具体案を策定し、居住者への居住支援方を提示したいと考える。このことから京町家の保全・継承の環境づくりに寄与したいと考えるものである。

キーワード：(1)京町家、(2)居住品質、(3)居住不安、(4)住情報

林 美佐

シオン



大成建設が運営する小さな美術館「ギャルリ・タイセイ」のコレクションについてご紹介したい。施設の性格上、コレクションの主体はル・コルビュジエの美術作品であるため、本稿の趣旨にそぐわないかもしれないが、彼が手がけた作品の全ては彼の建築へと繋がる資料としての側面も持っているため、本稿で紹介することを「了解いただきたい」。

ル・コルビュジエ

Le Corbusier 1887～1965

言うまでもなく二〇世紀を代表する建築の巨人であるが、同時に彼は絵画を描き、彫刻をつくり、著書を発表するなど、実に多彩な活動を行なった。

一九二〇年代には「ピュリスム」の絵画を描

き、新しい時代を開く建築への提言を繰り返した。「サヴォア邸」は住宅建築の傑作として知られている。三〇年代には「現代建築国際会議」の主唱者として世界の建築をリードし、超高層ビルや都市計画を打ち出した。また、逞しく豊かな女性の姿を多く絵画に残している。戦後は、独自の尺度を用いた集合住宅「ユニテ・ダビタシオン」や、自在な造形表現の「ロンシャンの礼拝堂」、チャンディガール（インド）での迫力ある公共建築群などによって、大きな衝撃を与えた。

また、彼は日本の近代建築に多大な影響を及ぼした。前川國男、坂倉準三、吉阪隆正らが彼のアトリエで働き、彼らが協力した「国立西洋美術館」は日本で唯一のル・コルビュジエ作品として、先ごろ国の重要文化財指定を受けた。

現在、ル・コルビュジエ財団（パリ）が中心となり、彼の建築と都市計画二二件をユネスコの世界遺産に登録するべく準備が進められ、「国立西洋美術館」もこのリストに加えられている。

コレクションの経緯

大成建設のコレクションの核となっているのは、ル・コルビュジエの友人でありコレクターであったテオドール・アーレンバーグ氏旧蔵の作品である。コレクションを一括して収蔵し、死蔵させずに公開できるところに譲りたいという氏の意向を受けて、一九九〇年に購入するはこびとなった。

大成建設がル・コルビュジエの作品を収集しているのは、単に日本に影響を及ぼした建築家の作品だからというだけでなく、人が幸せになる建築をつくるという彼の建築思想が大成建設の経営理念に合致しているからであり、文化を通じた社会貢献を継続していこうという意図からである。

コレクションの特徴

大成建設のル・コルビュジエ・コレクションはアーレンバーグ氏旧蔵の素描、コラーージュに始まり、その後、油彩、版画集、写真、文献資料などの収集を行なっている。現在、その数は素描、コラーージュ類一九〇点、油彩一三点、版



「ギャラリー・タイセイ 15年のル・コルビュジエへの眼差し」展 第2部の会場風景。2008年開催。

画集六集、彫刻一点、タピスリー一点、手帖一冊であり、他に写真家ルシアン・エルヴェがル・コルビュジエの人と建築を撮影した写真ははじめ、写真一三〇点を収蔵している。

ル・コルビュジエの美術作品は、ル・コルビュジエ財団、ル・コルビュジエ・センター（チユーリッヒ）が多くを所蔵しているが、大成建設のコレクションはこれらに次ぐ規模である。

建築関係の資料については、大部分をル・コルビュジエ財団が所蔵しているため、入手することは非常に難しい。というのは、彼は生前、自分が描いた図面、建築スケッチ類が外部に流出しないように厳しく管理していたので、彼の没後、財産を引き継いだル・コルビュジエ財団以外から、資料が出てくることは非常に限定的なのである。

文献資料

ル・コルビュジエは四七冊の著書を出版している。殆んどがフランス語で書かれたが、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、日本語などに翻訳された。日本では二五冊の著書が翻訳され、没後四〇年以上が経った今でも、新たな翻訳や改訳が出版されている。

ギャラリー・タイセイでは、こうしたル・コルビュジエによる著書だけでなく、ル・コルビュジエについての研究書、雑誌、展覧会カタログなどの資料を極力収集しようとしているが、ル・コルビュジエについての文献は現在も毎年数多く出版され、近年ではファッション雑誌などでも特集が組まれるほどであり、これらを網羅するのは難しい。

現在、ギャラリー・タイセイで所蔵している

ル・コルビュジエに関する文献資料は約二〇〇冊である。

コレクションの目玉

美術作品以外の収蔵品の中から目玉となるものを数点挙げておきたい。

・『レスプリ・ヌーヴォー』

一九二〇～二五年 全二八巻

ル・コルビュジエと友人たちが発行していた総合芸術雑誌。建築に対する彼の提言は注目を集めた。先鋭的な芸術家たちをはじめ、多くの執筆陣が多分野についてエッセイを寄せた。

・『ザルブラの色見本帳』

一九三三年版、一九五九年版

スイスの壁紙メーカー、ザルブラ社からの依頼で製作した色見本帳。色の組み合わせには名前が付けられている。彼の色彩感覚をつかむ上で非常に重要。

・『手帖』 一九五三年一月～五月

ル・コルビュジエはいつも小さな手帖を携帯し、スケッチし、思いついた言葉を書き残した。多くを財団が所蔵しているが、所在が分からない手帖がまだまだ存在する。この手帖は行方不明となっていた中の一冊。

・『直角の詩』

一九五五年 リトグラフ



「ルシアン・エルヴェ・ル・コルビュジエ」展
会場風景。



「ギャラリー・タイセイ 15年のル・コルビュジエへの眼差し」展
会場風景。2007年開催。

版画作品。三五〇部限定。一九章に分けられ、難解な詩とそれに添えられた挿図によって構成されている。ル・コルビュジエの後期の建築に対する考え方が詩という形をとって謳われている。

・「ル・コルビュジエ プランズ」

二〇〇五年〜 DVD

ル・コルビュジエ財団所蔵のエスキス、スケッチ、図面などの建築資料全三万三〇〇〇点を新規に撮影し、デジタルデータ化したアーカイブ。克明な画面が鮮明な色で再現され、今までの図面集では読み取れなかったような細かい書き込みまで解読できる。

公開

ル・コルビュジエ生誕一二〇周年の二〇〇七年に、ギャラリー・タイセイは開設一五周年を迎えることができた。

ギャラリー・タイセイでは、所蔵する美術作品の一般公開を軸に、ル・コルビュジエの業績をさまざまな切り口から捉えた展覧会活動を続けているが、文献資料の公開は行なっていない。その理由は、資料が古く状態が悪いため、また閲覧スペースがないためである。ただし、ル・コルビュジエを研究されている方であれば、ご相談に応じることは可能である。

視点を変えて作品に触れるたびに、ル・コルビュジエは新たな面を見せてくれる。さまざまな表現方法を駆使して、自分の世界を構築していった彼をより深く理解するためには、著書をはじめあらゆる分野の作品を精査することが必要である。

ギャラリー・タイセイでは、今後もル・コルビュジエに関する資料の収集を続け、展覧会を通して、彼の業績を広く伝えていきたいと思っている。

林 美佐／はやし・みさ

大成建設ギャラリー・タイセイ学芸員。

一九八七年、学習院大学大学院博士前期課程修了。東京都庭園美術館学芸員を経て現職。ル・コルビュジエや近代建築を取り上げた展覧会の企画運営を行ないながら、ル・コルビュジエによる絵画を建築とのつながりの中で研究している。著書「再発見／ル・コルビュジエの絵画と建築」（彰国社）のほか、ル・コルビュジエ、ルシアン・エルヴェに関する論文、エッセイ多数がある。

大成建設ギャラリー・タイセイ

所在地：〒163-0606 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿セ

ンタービル17階

電話：03-53381155/10

E-mail：galerie@pub.taisei.co.jp

URL：http://www.taisei.co.jp/galerie/index.html

開館日：月～金 10時～17時（土日祝日および展示替え期間

は休館。詳しくはお問い合わせ下さい）

入場料：無料

2008年

- 1/12 第177回江戸東京フォーラム／第4回「東京の地域学を掘り起こす」シリーズフォーラム「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」
- 1/13 第121回研究運営委員会
- 1/14 第7回住宅史料委員会
- 1/22 第34回江戸東京フォーラム委員会
- 1/23 第93回すまいるん編集委員会
- 1/29 第81回図書情報委員会
- 1/29 第6回住宅研究史委員会 (1)
- 1/30 第6回住宅研究史委員会 (2)
- 1/30 第13回コレクティブハウジング研究会委員会
- 2/22 第67回住教育委員会
- 3/ 4 第25回世界のすまい方フォーラム委員会
- 3/12 第178回江戸東京フォーラム「チャレンジCGプロジェクト『江戸の町並みをつくる』」
- 3/12 「住総研 清水康雄賞」選考委員会
- 3/18 第14回コレクティブハウジング研究会委員会
- 3/25 定例理事会
- 4/ 5 第9回「住まい・まち学習」実践報告・論文発表会
- 4/ 8 第94回すまいるん編集委員会
- 4/12 第122回研究運営委員会
- 4/13 第7回住宅研究史委員会
- 4/24 第8回住宅史料委員会
- 4/ 「住総研 清水康雄賞」選考委員会
- 5/14 第35回江戸東京フォーラム委員会第82回図書情報委員会
- 5/21 第68回住教育委員会
- 5/24 第19回世界のすまい方フォーラム「なぜ、日本は水虫大国となったのか」第26回世界のすまい方フォーラム委員会
- 5/22 定例評議員会
- 5/27 定例理事会
- 6/13 キックオフミーティング
- 7/12 第28回住総研シンポジウム

最近の動き

●研究論文評二六編の審議終わる

一二一回研究運営委員会が一月一三日に開催された。

二〇〇七年度は、二〇〇六年度研究助成三二編の内の三一編と、二〇〇五年度以前九編の内の五編を合わせた三六編が審議の対象となった。その内の三編は、このままでは掲載に値しないとの判断から次年度に延期された。延期申請のないまま未提出のもの四編あり、惜しくも次点で採択されなかった論文のことを考えると残念である。さて、内容面で見ると、論文は総じてレベルが高く、審査側としても嬉しい結果であった。特に、災害時の復興や生活支援に関する研究、高齢者や障害者、社会的弱者の支援に関する研究が多かったように思わ

れる。また、ここ数年、実践型あるいは参加型の研究にも研究助成をするように努めており、数編がこれに該当する。

今後の課題として、活動報告や技術報告、開発・試作研究などは、論文としてみたとき評価が厳しくならざるを得ないが、従来の研究助成の特色を活かしながら、報告・発表方法などを新たに定めるなど、助成枠の拡大を含めた検討をしていきたい。

本年も、「助成研究選奨」として、以下の四編が選ばれた。

- 「景観保全における伝統的環境システムの再編に関する研究」 主査 増井正哉
- 「共用スペースの活用による高層高密度団地の活性化に関する研究」 主査 小池孝子
- 「台湾漢人住居にみられる総鋪(tongpo)の調査研究—日本植民地期以降の(眠床)（和室）の結合とそのゆらぎ」 主査 青井哲人
- 「居室の延長としての宅老所の現況と展望

に関する研究―地域性による位置づけとニーズの相違に着目して」 主査 山田あすか

これら四編は、キックオフミーティングの場で、二〇〇八年度研究助成主査に対し、好事例として発表していただく予定である。

●住教育フォーラム

〈東西の食育・横綱対決〉

第二〇回住教育フォーラムが二月二三日に開催された。今回は、「子どもの生命力地域の生命力を育む―住まうことと生きること、食べること」と題して行なわれた。

講演の一つは、東北の地にあつて、多様な地域資源を地元住民が発見し、生活と生産の両面に生かす地元学を実践しつつ、子どもの生命の育みにつながる食育の見事な展開をはかっておられる結城登美雄氏(民俗研究家)の活動である。

いまひとつは、四国徳島の漁村集落で子

どもたちの「磯学習」と呼ばれる総合学習をすすめる中で、子ども自身ヒジキを育て、販売し、食べ、楽しみ合うという、地域の知恵と意志を生かす人間本来の回復・再創造に赴かんとされている草野裕作氏(伊座利の未来を考える推進協議会)の活動が紹介された。

食育・地元学と磯学習・漁村留学という、住まうことと生きることと学ぶこととのなめらかなつながりの構図が鮮明に語られた。

●図書情報委員の交代

本年度最後の図書情報委員会が一月二九日開催された。横手義洋委員長(東京大学)、安武敦子委員(駒沢女子大学)の退任に伴い、中島智章(工学院大学)、藤岡泰寛(横浜国立大学)の両委員が選任され、新委員長に福濱嘉宏委員(福濱嘉宏建築事務所)が就任した。

イベントだより

江戸東京フォーラム

近世・近代考古学が認知されてきた！
—東京の地域学を掘り起こす(4)—

シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」の第四回目は、たばこと塩の博物館が主催する特別展「幕末nippon」と共催した。フォーラム「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」(通算第一七七回)は、一月二日、同館で、小林克委員(東京都歴史文化財団)の司会で実施した。まず、特別展の企画に携わった谷田有史氏(たばこと塩の博物館)が、幕末という時代、その幕末に初代アメリカ駐日総領事として来日したハリスについて発表をした。

次に、江戸遺跡の発掘事例が近年増加しているが、その上層に必ず近代の「東京」が存在する。そこで、都心各区の発掘担当者が、考古学の立場から江戸と東京の連続性・非連続性について次の報告をした。

毎田佳奈子氏(港区教育委員会)は新橋付近の発掘事例から、人が生活をしているところでは遺物が連続していること。水本和美氏(千代田区四番町歴史民俗資料館)は、豊島・新宿・千代田の発掘事例を考察すると、地面を知りつくして土地利用がなされていたこと。仲光顕克氏(中央区立郷土天文館)は、土地利用において、町人地は大きな変容はみられないが、武家地は細分化・町場化していること、等の発表があった。

それらに対して、波多野純委員(日本工業大学)から次のコメントがあった。江戸が東京に変わる。その境目の部分を埋めていくことは難しい。政治は断絶するが、市民の生活は連続と続く。そのことがこのフォーラムでよく分かった。

討論では、①各自自治体の埋蔵文化財調査は危機的な現状にある、②近世と近代の時代区分、西洋化や近代化という用語の概念を発掘資料から追究したい、③このフォーラムで、考古学から江戸東京学のアプローチが試みられたが、このことは今後の展開が期待される、等の意見があった。

近世・近代考古学は二〇年の歳月を経て、近年やつと認知されてきた。そのことが実感でき、考古学に携わっている人々たちを元気づけるフォーラムであった。



特別展「幕末nippon」リーフレット。当財団の助成によって作成された。

新刊だより

住宅総合研究財団研究論文集 No. 34

二〇〇六年度研究助成二八編・二〇〇五年度以前の研究助成六編 委託論文三編を収録している。論文集は我が国の住研究の唯一の論文集として高い評価を得ている。

A4版・定価二五二〇円

(お申込みは、丸善営業部 電話03-3272-0521)

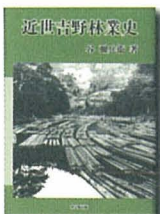
初期の管理人小屋
—一九世紀のパリと、パリのコンセルジュ
訳者 関川千尋
創英社

A5版
三〇〇ページ
定価三九九〇円
(本体三八〇〇円)



近世吉野林業史

著者 谷彌兵衛
思文閣出版
A5版
五〇七ページ
定価九七六五円
(本体九三〇〇円)



住宅・不動産金融市場の経済分析

—証券化とローンの選択行動—
著者 查澤隆司
日本評論社
A5版
二二七ページ
定価三九九〇円
(本体二八〇〇円)



祭りのしつらい—町家とまち並み

編者 岩間香ほか
思文閣出版
B5版
二二三ページ
定価二二〇〇円
(本体二一〇〇円)



次号予告
2008年夏号

七月発行

特集 21世紀えねるぎ事情

〈焦点〉

超長期の視点から

野城智也(東京大学生産技術研究所)

〈ミニシンポジウム〉

21世紀えねるぎ事情を考える「暮らし—すまい—」から

中上英俊(住環境計画研究所)

萩本和彦(東京大学生産技術研究所)

司会 野城智也(東京大学生産技術研究所)

〈論説〉

エクスルギーで考える

宿谷昌則(武蔵工業大学)

コプロダクション・物質・エネルギー併産

堤敦司(東京大学エネルギー工学連携研究センター)

エネルギー源の変化にロバストな住宅とは

小玉祐一郎(神戸芸術工科大学)

〈すまいのテクノロジー〉

熱の賢い使い方—小温度差利用システムの可能性

〈私のすまいろん〉

江戸の暮らしとエネルギー

石川英輔(作家)

〈ひろば〉

暮らしのなかのエネルギー

岩船由美子(住環境研究所)

〈すまい再発見〉

真木郎

真木兼男

〈図書室だより〉

江戸東京博物館の土浦亀城関係資料について

早川典子(東京都江戸東京博物館)

〈住総研ニューズレター〉

タイトルは仮題 執筆者は変わることがあります。

図書室だより

学位論文を受入

主として二〇〇六年度に住宅・建築・都市計画・不動産分野で博士号を取得した学位論文を受け入れた。櫻井典子『コレクティブハウジングにおける住コミュニティの発達と支援に関する研究』、亀屋恵三子『ALS罹病者の療養環境に関する建築計画研究』、亀崎美苗『ネットワーク居住の空間的広がり』、藤隆一郎『再生可能エネルギー・燃料電池活用型住宅用複合システムに関する研究』、石川理都子『制振ダンパーの開発と高層建物の居住性向上に関する研究』、竹下俊彦『不動産市場の効率性と価格形成に関する研究』、今井裕夫『ドイツ表現主義建築家フーゴー・ヘーリングの住宅における有機的空間構成に関する研究』、水上優『フランク・ロイド・ライトの建築思想に関する空間論的研究』、浅井秀子『山陰地方都市の伝統的住居の保全を目的とした環境計画と防災計画に関する総合的調査研究』、糟谷佐紀『車いす使用者の駆動力と住環境整備に関する研究』、松村正希『高齢者・障害者のグループホーム型居住施設に関する実践的研究』、辻壽一『公営住宅リノベーションに関する基礎的研究』、木村拓郎『噴火災害時における住宅・集落再建に関する基礎的研究』、金冨錫『密集住宅市街地再生のための規制誘導制度に関する研究』である。当図書室で所蔵している学位論文のうち著者の許諾を得た論文については、当

財団ホームページで公開することを予定している。寄贈いただいた方々には、感謝申し上げます。

なお、当図書室では、住宅・建築・都市計画・不動産分野の学位論文の寄贈を随時受け付けている。

連絡先は：kazama@jusooken.or.jp

高齡者・障がい者の住まい等に関する資料
野村敬ほか『O.T.P.Tのための住環境整備論』(三輪書店)、金沢善智『利用者から学ぶ福祉住環境整備』(三輪書店)、家づくりの会『“古い”の発想で家づくり』(彰国社)、水谷浩明ほか『ついのすみか』家づくりプロジェクト(トソー出版)、『シニア・コミュニティ』編集部『よくわかる新しい高齡者住宅二〇〇七』(ヒューマン・ヘルスカア・システム)、島弘子『リフォームでワンフロアに暮らしを作る』(文化出版局)、井上由起子『施設から住まいへ』(厚生科学研究所)、溝口千恵子『住宅バリアフリー実例集』(講談社)、山田あすか『ひとは、なぜ、そこにいるのか』(青弓社)等を今回受け入れた。

その他にも、当財団のハウスアダプテーションフォーラム研究委員会が関わっている「ハウスアダプテーション」、日本のハウスアダプテーション(以上住宅総合研究財団発行)や「ハウスアダプテーション・住まいのバリアフリー」(建築技術)、『在宅介護(コミュニティケア)を考えるハウスアダプテーション用語集』(中央法規)、『自分らしく住むためのバリアフリー』(岩波書店)、当財団の出版助成による出版『知的障害のある人のためのバリアフリーデザイン』(彰

国社)、『痴呆性高齡者の住まいのかたち』(ワールドプランニング)等も所蔵している。都市と環境に関する資料

和田武ほか『市民・地域が進める地球温暖化防止』(学芸出版社)、真田純子『都市の緑はどうあるべきか』(技報堂出版)、日本建築学会『ヒートアイランドと建築・都市』(日本建築学会)、日本建築学会『地球環境時代のまちづくり』(丸善)、金澤重保『風土と都市の環境デザイン』(ふくろう出版)、日本建築家協会環境行動委員会『二〇五〇年』から環境をデザインする(彰国社)、大橋照枝『ヨーロッパ環境都市のヒューマンウェア』(学芸出版社)、山崎一彦『EcoUrbanism』環境開発のビジョンと方法(日経BP企画)等を購入した。他にも、第一住宅建設協会発行の研究報告書、『ことも環境学研究』掲載論文等もあるので是非ご利用いただきたい。

図書室内

開室時間：九：三〇～一六：〇〇

(一)：〇〇～一三：〇〇はレファレンスサービスおよび新規登録受付等係員対応業務は休み

休 室：土曜日 日曜日 祝祭日 当財団の休日(夏季・冬季の休暇期間、創立記念日(十一月六日)、シンポジウム開催日)

利用資格：一八歳以上の方
利用形態：完全開架式(資料貸出はしてありません)

詳細お問い合わせは：
<http://www.jusooken.or.jp/tosyofront.htm>

「おもひやり」の購読について

●発刊日は原則として、冬号一月、春号四月、夏号七月、秋号一〇月です。したがって、送付開始は、購読料受領後の最新号とさせていただきます。なお、購読手続きには約一週間かかりますので、お含みおき下さい。

●購読満了時にご通知いたしますので、引き続き購読いただきますよう、お願い申し上げます。

●バックナンバーのお求めにもおたえししており有無、ご希望の方は、あらかじめ在庫の有無、送料を左記財団まで、ご確認下さい。

購読料は次のとおりです。

一年間 二〇〇〇円(送料共)
三年間 五〇〇〇円(送料共)

お支払い方法

●領収書は、郵便局の払込票兼受領証で代えさせていただきます。財団からは改めて発行いたしません。

●購読期間中の購読中止による購読料返金はいいたしません。

「すまいるん」は次の店頭でも販売しておりますので、ご利用ください(店頭での予約購読の受け付けはしてありません)。

●南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21

電話(03)3291-1338

財団法人住宅総合研究財団

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-8

郵便振替東京001101316639

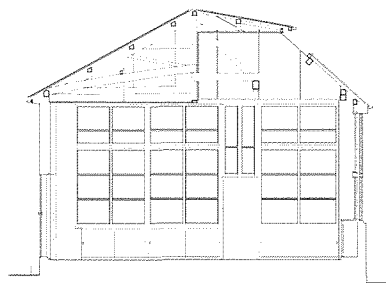
電話(03)3494-5001 FAX(03)3494-5794

旧・平櫛田中邸の現在

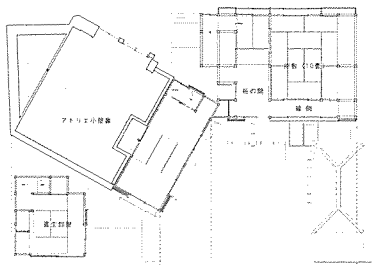
多くの画家・文人たちが愛した上野桜木に残る大正期アトリエ付住宅

章乃 懸鞍

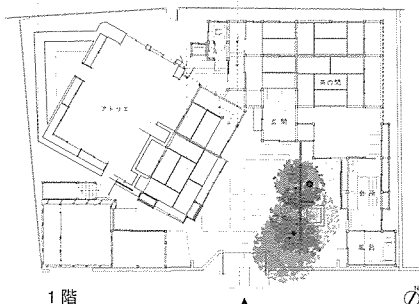
平櫛田中（ひらくしでんちゅう、本名・田中倬太郎）は、明治・大正・昭和の長きにわたり活躍した、日本を代表する木彫家の一人である。明治五年（一八七二）、岡山県後月郡西江原村（現在の井原市）に生まれた田中は、明治三〇年（一八九七）に上京したのち、日本彫刻会創立や日本美術院再興に参加し、昭和一九年（一九四四）からは東京美術学校（現・東京藝術大学）教授を務めた。その後、帝室技芸院、日本芸術院会員を歴任し、昭和三七



アトリエの断面図



2階



1階

平櫛田中邸とアトリエの平面図

袋小路の先にひっそりと建っている。旧・平櫛田邸のある台東区上野桜木一帯は、江戸時代から続く寺町である。元は東叡山寛永寺の領域であったが、明治維新後に宅地化が進められた結果、多くの御屋敷が建つ閑静な住宅地となった。明治三二年（一八八九）、上野公園内に東京美術学校が開校したことにより、この地には多くの文人や画家が集まるようになり、芸術家の道を志す若者たちの生活や制作活動の場として文化的気風の漂う町

裏に小さなアトリエを建てて彫刻制作を行っていたが、大作「転生」を制作するにあたって、より大きな空間を必要とすることとなった。その頃親交のあった日本画家・横山大観、下村観山、木村武山は田中の困窮を知り、自分たちの描いた絵を売って得た資金を田中のアトリエ建造に充てることを提案したという。こうして田中は友人らの尽力によりアトリエを構えることとなり、長くこの地で制作活動を行なうこととなったのである。

年（一九六二）には文化勲章を受章、昭和五四年（一九七九）に亡くなる間際まで木彫界の重鎮として精力的な活動を続けた人物である。大観ら友人の尽力でできたアトリエ
旧・平櫛田中邸は、田中が大正八年（一九一九）から昭和四五年（一九七〇）にかけて、およそ半世紀にわたって居住したアトリエ付住宅であり、代表作である「鏡獅子」や「転生」など、多くの作品がこのアトリエから世に発表された。これまで幾度かの増改築を経

が形成されていった。田中は明治三〇年（一八九七）から昭和四五年（一九七〇）までの七三年間をこの界限で過ごしたが、その間、東京美術学校の創設に尽力した岡倉天心や横山大観、高村光雲らをはじめとして、当時の美術界を牽引していた人物たちとの貴重な出会いを重ねている。この旧・平櫛田邸は、このような友人たちとの繋がりがから生まれたものであったことが次の経緯から窺える。
旧・平櫛田邸ができる以前、田中は谷中の長安寺近くにある二間長屋の一軒を住まいとし、

著書の中で上野桜木のアトリエのことに触れ、「上野の家を数回訪ねたことがあるが、それも辺幅を飾らない先生らしい住居で、仕事場につながる畳の質素な部屋で、老彫刻家は本を読んだり、人に会ったり、小品の仕事を手がけたりしているらしかった。部屋にはうつつすらと木屑の匂いがしていた。玄関の前に少し空き地があって、そこには直径等身に余るほどの檜や樺の切り挽いた丸太が累々と転がして置いてあった」と述べている。長く住むう

ちにアトリエや住宅には改修の手が大分入れられたが、玄関脇につくられたこの畳の部屋は当時の面影を今もよく残している。

上野桜木と田中

上野桜木での生活の中で、田中は周辺に住む住民たちと篤い親交を持つようになった。彫刻家として身を立てるまでの貧しい時期は付き合のある店から味噌や醤油などを分けてもらったり、近所の住人には日常着の縫製を頼んだり、制作に熱中する田中が面倒を見られない間、子どもたちを付近の銭湯へ連れて行ってもらうなど、まさに家族ぐるみの付き合いであったという。

田中の感謝の思いは現在もこの町のいたる所に残る。付近の神社や上野桜木の町会に贈られた田中作の狛犬や獅子頭、掛軸などは現在も祭事の折に御神酒所に飾られている。また、田中の子どもたちが通った谷中小学校に



75頁写真
左／旧・平櫛邸の玄関と、その左に前庭を囲むように建てられたアトリエ棟を見る。
下右／住宅二階縁側から右にアトリエ棟を見る。
下左／北側に向けて大きな採光をとったアトリエの室内。

のご家族の方々の協力を得ながら内部の清掃や修繕が少しずつ行なわれ、生気を取り戻していった。

現在、旧・平櫛邸はアートギャラリーや映画・ドラマのロケ地として、さまざまな機会に用いられるようになった。田中も一時期教鞭を執った東京藝術大学彫刻学科を中心に開かれるサステイナブルアート展は、昨年までに三回を数える。三回目の昨年は東京藝術大学一〇〇周年を記念し、台東区のタイアップにより「アトリエの末裔あるいは未来展」が開催された。この展覧会では、芸大の学生・教員らが旧・平櫛邸からインスピレーションを得、それを基に木彫の作品制作を行なうという試みが行なわれ、旧・平櫛邸の建物全体を見事な展示空間へと変身させた。

現在は基本的に非公開であるが、公開のたびに畳や障子の張り替えや雨漏りの修理、庭の手入れなどの維持管理が利用者の手によって少しずつ行なわれ、旧・平櫛邸は本来の魅力を取り戻しつつある。上野・谷中界隈を代表する歴史的建築物の一つとして、また今では失われつつある大正期のアトリエ付住宅の貴重な一例として、今後もさまざまな試みの中で多くの人びとの創造力を刺激する場となることを願ってやまない。

鞍懸章乃／くらかけ・あやの
（株）文化財保存計画協会技術員。

二〇〇二年、札幌市立高等専門学校専攻科修了。二〇〇五年、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了（文化財保存学専攻）。現在は、文化的景観や世界遺産候補地の調査・研究・計画策定に携わる。



は作品を売った資金を基に平櫛田中奨学基金が設立され、図書購入代として教育のために役立てられたという。

大正期の貴重なアトリエ付住宅として

私がこの旧・平櫛田中邸と出会ったのは六年前であるが、当時この住宅を訪れる人のない寂しい建物で、主が住んでいた頃、おそらく木屑の香りが家中を満たしていたであろう往時の面影はほとんど失われかけていた。しかし、幸運なことにこの住宅の価値を見出した幾人かの人びとによる呼び掛けをきっかけに、地元の有志をはじめ田中の故郷であり建物の管理者である井原市や台東区、平櫛田中

編集後記

今回の企画は、「コレクティブタウン」というキーワードで谷中の町に着目した。私にとって谷中は、長年関わってきた町だが、再発見もあった。

コレクティブタウンの元となっているコレクティブハウス。それは、自己完結する暮らしから、リビングやキッチン、ランドリーやキッズルームなどの空間やものをシェアし、緩やかにつながることで、経済や家事負担を減らす生活スタイルだ。

「風呂場は？」と尋ねられれば、銭湯を指差し、近所の店に自宅の合鍵を預けるお年寄り住む谷中は、まさにコレクティブタウンだと思っていた。

ミニシンポジウムを開き、編集後記を書いている今は、コレクティブタウンの上に「日本流」が必要だという結論に至っている。

もともとは北欧で始まったこの生活スタイル。となると、情報公開、合議制、義務と権利、公平という言葉が相互扶助の根底理念に見え隠れする。

そこで、ハタと頭を抱えた。本当に谷中はコレクティブタウンと言えるのか？谷中といえば、一握りの顔役による閉鎖的な町会運営、外からはわかりにくいものごとの決まり方、ある意味で、それは不平等で不公平。しかし、ひっくり返せば、頼りになる世話役が住民への奉仕を一手に引き受け、町を守っている。だから、当番だからと一年交代を前提とした町会長職というのは谷中ではあり得ない。ええい！と「日本流」を乗っけた次第だ。

町全体の生きざまを捉え、町の暮らしをデザインしていくには、歴史、文化、経済、福祉、環境、人間関係などなど総合的にみるのが肝要と思う。今回はそこまで切り込めなかった。今後の課題としたい。
(本号責任編集 手嶋尚人)

住宅総合研究財団(略称「住総研」)は

昭和二十三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮迫した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「住宅総合研究財団研究論文集」等を発刊、また住に関する専門図書、セミナー等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業に力とめております。

この「すまいるん」は、活動の一端として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様により広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行(季刊)されているものです。ご利用のほど、よろしくお願い申し上げます。

季刊 すまいるん 2008年春号

二〇〇八年四月一〇日発行
頒価 500円

発行 財団法人 住宅総合研究財団
発行人 峰政克義

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-8
TEL (03) 3484-5381
FAX (03) 3484-5794
E-mail: jusoken@niji.mesh.ne.jp
URL: <http://www.jusoken.or.jp/>

編集委員 *

片山和俊 (東京芸術大学建築科教授)

小林秀樹 (千葉大学工学部教授) *

中谷礼仁 (早稲田大学理工学術院准教授)

服部岑生 (千葉大学大学院名誉教授)

野城智也 (東京大学生産技術研究所教授)

● 制作 建築思潮研究所

印刷・製本 慶昌堂印刷株式会社